

# 環境教育ボランティア 活動ハンドブック

## 生活系環境問題の改善に向けて



独立行政法人国際協力機構  
青年海外協力隊事務局

# 環境教育ボランティア 活動ハンドブック

— 生活系環境問題の改善に向けて —

2020年3月

独立行政法人 国際協力機構  
青年海外協力隊事務局



## はじめに

環境教育職種の派遣が始まった 90 年代後半から今日まで、約 400 人の環境教育ボランティアが世界各地へ派遣され環境啓発活動を行ってきました。海洋公園や森林公園、市街地の学校などで、豊かな自然環境をテーマにしたいわゆるグリーン系の啓発活動を行うボランティアがいる一方で、近年、廃棄物などの生活に密接したブラウン系の環境問題を活動の対象とするボランティアが増えていきます。日本は、過去に高度経済成長に伴い公害を含む急激な環境汚染を引き起こした歴史がありますが、現在、多くの開発途上国でも、開発と経済成長の結果増え続ける廃棄物の問題やそれに起因する衛生環境の悪化などが大きな課題となっています。

このような環境問題という大きな課題を一人の力で全て解決することはできませんが、赴任先の人々や同じボランティア同士で協力し合うことで、少しずつ、しかし着実に問題解決へと近づくことができるはずです。これからますます深刻になると予想される途上国での環境問題の改善にむけて活動を進める上で、本書が皆さまのお役に立てることを心から期待しています。

本書の執筆に当たられた先生方、編集及び関連資料・情報提供においてご支援いただいた JICA ボランティア OV、関係者の皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

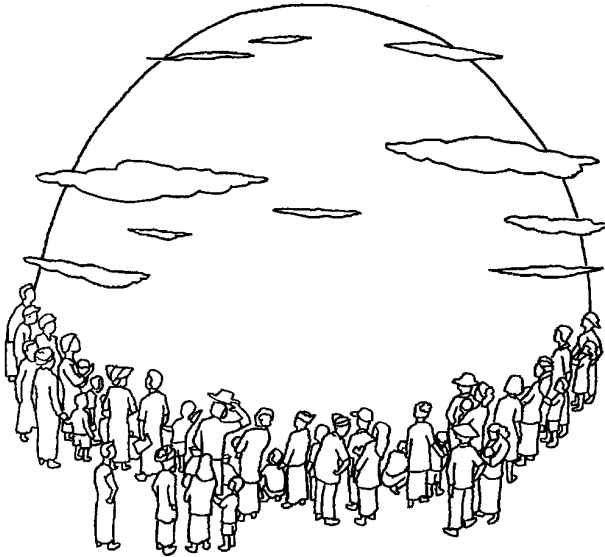
2011 年 3 月

独立行政法人国際協力機構  
青年海外協力隊事務局

# 目 次

第1章 途上国の生活系環境問題と環境教育	5
1. グローバルな相互依存関係がもたらす環境問題群	6
2. 身のまわりの生活環境と導入テーマ	10
3. 途上国における環境教育	12
第2章 赴任直後、とりあえずやってみること	25
1. まわりの人を知ろう	26
2. 地域を知ろう	32
3. 活動のビジョンをはっきりさせる	35
第3章 本格的に活動を始めよう	41
1. 活動のための資源を探す	42
2. 活動計画を立てよう	50
3. 活動を進める上で心に留めておくこと	61
第4章 活動のツボ	69
1. 環境教育教材の開発	70
2. 廃棄物問題の改善	80
3. 学校巡回活動	88
4. イベント・ワークショップ	96
5. 先輩ボランティアの活動いろいろ	107
第5章 活動アイデアボックス	113
1. アイスブレイクいろいろ	114
2. 体験型アクティビティいろいろ	132
巻末付録資料	151
引用・参考文献	155

## 途上国の生活系環境問題と環境教育



**途** 上国での環境教育活動、その言葉の魅力とはうらはらに、任国での環境教育活動がはたしてうまくいか、多くのボランティアが不安を持っていることでしょう。この章では、途上国における環境問題の特性と所在についての認識を高めるとともに、身の回りの生活改善に向けて取り組むべき環境教育のテーマ、アプローチ、視点についての理解を深めていきます。環境教育は自然環境豊かな場での取り組みのみならず、日々の生活を通した取り組みも期待されています。自身の環境教育活動が、価値の押し付けや独りよがりにならないようにするにはどのような点に配慮すればいいのか、環境教育のアプローチにはどのようなものがあるのか、について学びを深めていきましょう。

# 1. グローバルな相互依存関係がもたらす環境問題群

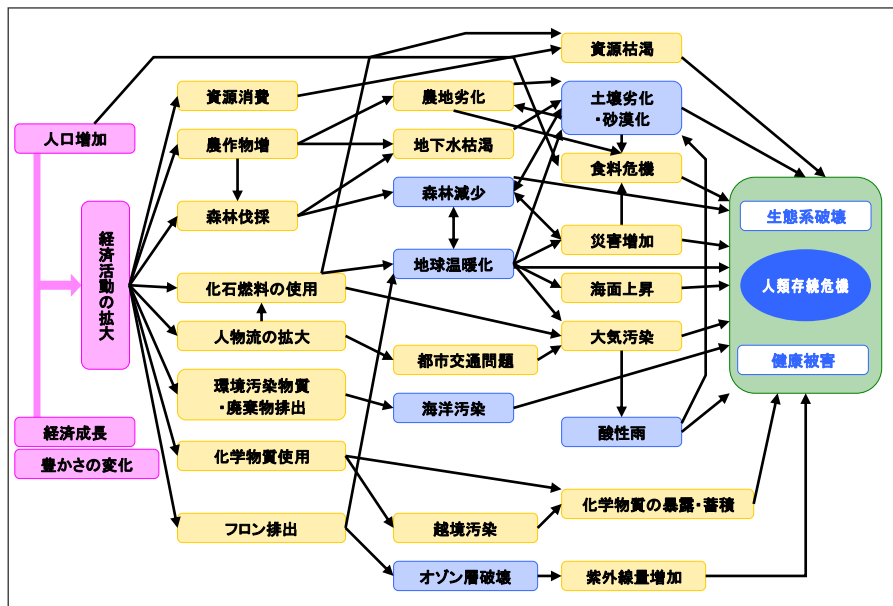
## 1. 世界的で複雑な問題群

「環境問題」と一言と言っても、個々人によってイメージするものはさまざまです。今日、話題になっている気候変動問題や生物多様性の問題のみならず、生活環境で深刻な問題となっている水質汚濁や大気汚染、地盤沈下なども環境問題です。また、貧困問題が深く影響をもたらしている過放牧・過耕作・過剰伐採なども地域の環境問題といえるでしょう。環境問題に共通していることは、その「相互依存性」にあるといわれています。つまり、環境問

題は、相互が深くつながりあった「問題群」なのです。

さらに、環境問題の共通性として、①長い時間かけて進むプロセスであること、②地球環境の変化は生活・産業・自然などへ広くおよぶこと、③個々の地球環境問題が大気や水、生態系の働きや世界経済を通じ相互に連結すること、が挙げられます。結果的に、地球環境の悪化はめぐりめぐって人類の生存に影響するという「負の循環構造」を生み出しているのです。

■ 図表 1-1 問題群としての地球環境問題



出所:環境省(1993)

## 2. 国際的な環境教育の歴史とミレニアム開発目標

環境問題の国際的な議論は、1972年の国連人間環境会議(通称:ストックホルム会議)から始まったと言われています。環境教育の重要性もその当時から言われており、1977年のトビリシ会議(環境教育政府間会合)では、環境教育の基本的な考え方と指導原則(付録資料1 P152)が提示され、今日でも環境教育の基本的な理念となっています。

その一方で、1980年代後半に提示された「持続可能な開発(Sustainable Development)」の概念は、環境問題と開発問題を深く関連付けさせ、1990年代以降の一連の国際的議論とその教育の在り方について大きな影響を与えました。従来の自然と科学に基づく環境教育から、

環境・経済・社会のバランスに配慮をし、関係性(つながり・かかわり・ひろがり・ふかまり)と、価値観・態度・集会的行動に重点をおいた「持続可能な開発のための教育(ESD)」へと進展を遂げています。

2000年には、ニューヨークにおいて国連ミレニアムサミットが開催され、21世紀の国際社会の目標として、ミレニアム開発目標(MDGs)が採択されました。平和と安全、開発と貧困、環境、人権とグッドガバナンス(よき統治)、アフリカの特別なニーズなどを課題として掲げ、8つの開発目標とともに21世紀の明確な方向性を提示しています(図表1-2)。このMDGsの達成においても、教育・訓練はもっとも重要なアプローチ(人間開発アプローチ)として位置付けられています。

### ■ 図表 1-2 ミレニアム開発目標(Millennium Development Goals)

- ゴール 1 : 極度の貧困と飢餓の削減
- ゴール 2 : 普遍的初等教育の達成
- ゴール 3 : ジェンダーの平等推進と女性地位の向上
- ゴール 4 : 幼児死亡率の削減
- ゴール 5 : 妊産婦の健康の改善
- ゴール 6 : HIV/エイズ・マラリア・その他の疾病の蔓延の防止
- ゴール 7 : 環境の持続性の確保
- ゴール 8 : 開発のためのグローバルパートナーシップの推進



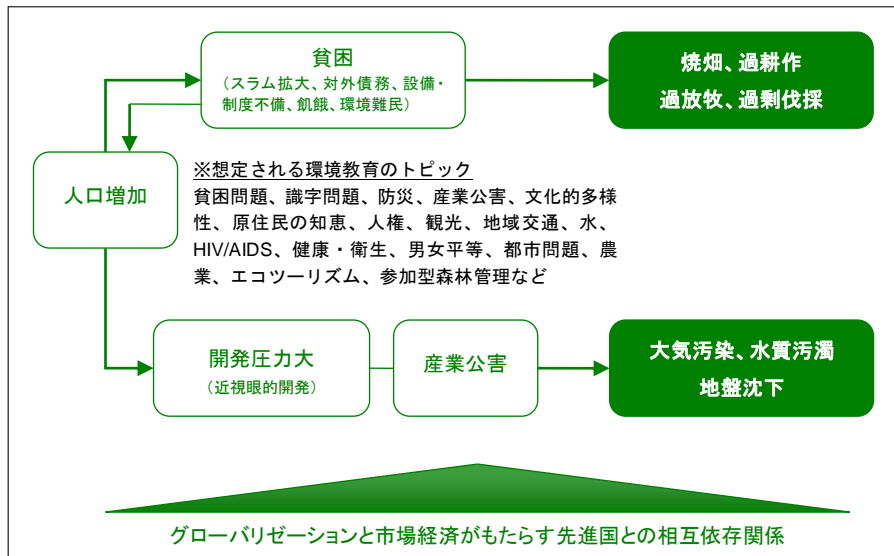
### 3. 先進国・途上国の異なる環境破壊の構造

では途上国における環境破壊の構造はどのようなものなのでしょう？ 途上国における人口増加は、深刻な「貧困問題」と「近視眼的な開発」をもたらしています。さらに、「貧困問題」は生活そのものを経済優先にさせ、自然とのバランスを保つことへの配慮の欠如の結果、焼畑・過耕作・過放牧・過剰伐採などの問題を起こしています。また、急激な人口増加がもたらす都市への大規模な人口移動は「近視眼的な開発」を優先させ、結果として農林水産業の商業化とサービス業・観光産業の拡大、無計画な都市開発を促

進させ、大気汚染・水質汚濁・地盤沈下などの産業公害を必然的に引き起こす構造をつくりだしています。このように、途上国における環境破壊は、開発・貧困問題と深く関係しています。

いっぽう、先進国においては異なる環境破壊の構造が見られます。先進国における「経済活動の大型化」は、国内外の資源利用と廃棄を増大させ、途上国をもその環境破壊の構造に巻き込みます。また、技術発達による「経済活動の高度化」は、難分解性物質を大量に生産するといった先進国独特の環境破壊の構造をつくりだしています。

■ 図表 1-3 途上国における環境破壊の構造と所在 — 貧困の陰で



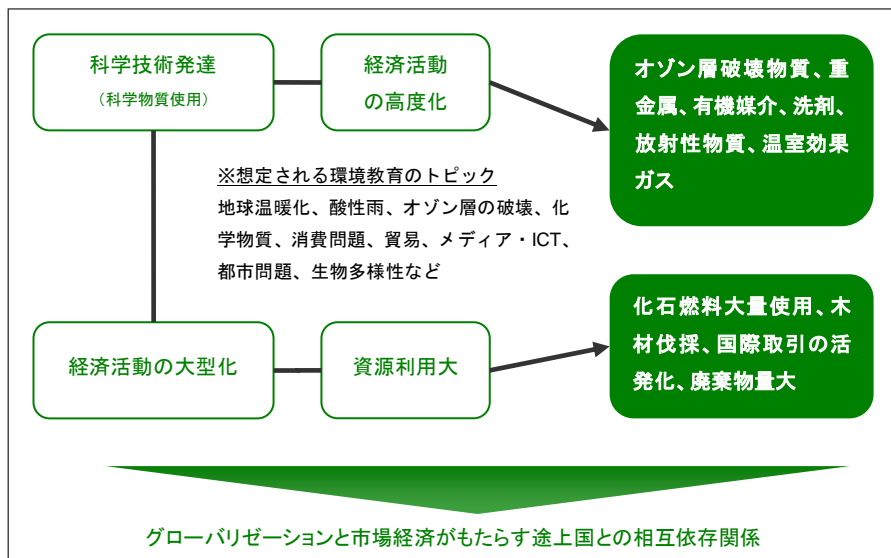
筆者作成

このように、先進国では豊かさ(経済活動の大型化と高度化)の陰で、環境破壊が起きていることが読み取れます。

これらの指摘を踏まえると、途上国における環境問題を把握するには、途上国の視点(人口増加の問題・貧困・近視眼的開発)のみならず、先進国の視点(経済活動の高度化・大型化)、さらにはその相互依存関係(グローバル化と市場経済)についても理解を深める必要があります。それにもかかわらず、先進国型の環境教育活動をよかれと思って実践している例が少なくありません。途上国にお

いて環境教育活動を行うには、「人口増加」「貧困問題」「近視眼的な開発」について理解を深めながら、先進国との関係性にも目を配る必要があります。そして、水や大気といった自然と科学に基づく問題解決型の教育実践だけでなく、個人や集団のエンパワーメント(個人や集団が自らの生活に統御感を獲得し、平等で公正な社会の実現にむけて影響力をもつこと)と社会変革を意識したより人間開発(経済・社会開発に対して)の色彩が強い教育実践が必要とされています。

■ 図表 1-4 先進国における環境破壊の構造と所在 — 豊かさの陰で



筆者作成

## 2. 身のまわりの生活環境と導入テーマ

### 1. 水へのアクセス・水の質

途上国における水へのアクセスと水質の維持は、地域住民の生存に直接かわる深刻な問題です。水は飲み水・生活用水としてのみならず、農業や牧畜においても不可欠です。水の採取は女性の家事労働として位置付けられることが多く、結果として女性の教育へのアクセスを阻害している原因にもなっています。

さらに、衛生的側面のみならず、工場排水や重金属による水質悪化・生活排水による富栄養化などにより、水へのアクセスはあっても水を利用できない地域も多数みられます。環境教育においては、社会的側面とも深く関連づけた取り組みが期待されています。

### 2. ゴミと衛生問題

途上国におけるゴミの廃棄は、衛生問題に直接つながる深刻な問題です。ゴミの廃棄は、水質の悪化を招くだけでなく、さまざまな感染症をもたらします。さらに、ゴミの廃棄は治安の悪化やスラム化とも深く関係性があり、社会的・経済的問題としても位置付けられています。一方、貧困層の住民にとっては、ゴミ廃棄場は収入を確保するための重要な生活源であることもあります。

日本のように、環境管理システムや自

治体単位での適切なゴミ回収システムが存在していないことが多い途上国において、ゴミ問題を解決することは容易ではありません。さらに、「焼却」を通してゴミを一時的に削減することは、大量生産・消費の文化を根付かせる原因にもなります。環境教育においては、①ゴミを資源として認識させること(分別による販売やコンポストなどによる農業利用)、②財・サービスの購入段階での配慮(グリーン購入)、③ゴミ総量の削減(マイバックの普及や不必要なものを購入しない文化)などが重要な取り組みと言えるでしょう。

### 3. 過耕作・過放牧・過剰伐採・自然環境の破壊

グローバリゼーションと市場経済のもとでは、多くの住民が貨幣経済に振り回されます。現金収入を得るために、途上国の地域住民は、身の回りにある換金可能な財・サービスを売り、限られた土地を酷使しながら生活収入を得ています。過耕作・過放牧・過剰伐採は、現金収入を得るために限られた土地を酷使した結果としてみることができるとでしょう。

土地の過剰な酷使は、土壌劣化を招くだけでなく、再生不可能な生態系の破壊(乾燥・湿潤地域の森林、湿地・湿原、マングローブの急速な減少)をもたらします。

土地の負担を軽減するために、耕作頻度や放牧密度を低下させたり、地域在来の樹木を植林したりする活動は、地域固有の生態系の復元に貢献するだけでなく、土壌劣化と水分の蒸散をふせぐのに役立ちます。環境教育活動においては、ただ復元にむけた活動をするのではなく、地域住民の参加と対話を促し、地域住民の主体者意識を向上させることが必要とされています。

#### 4. 都市化と環境問題

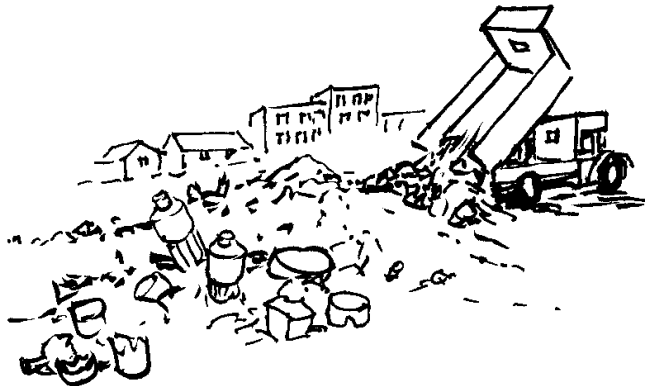
グローバル化と市場経済、人口増加は、多くの人々が都市に集中する原因となっています。都市への急激な人口集中は、近視眼的な開発をもたらし、結果として多くの産業公害や都市環境の悪化をもたらします。

工場用水のために地下水を利用すると地盤沈下が起きるだけでなく、工場排水と生活排水による水質汚濁と富栄養化、車やバイクの排気ガスや工場煤煙がもた

らす大気汚染、工場廃液や不適切な化学物質管理による土壌汚染などのさまざまな問題をもたらします。車中心の交通システムと環境配慮のない車両の利用は、渋滞の悪化や騒音、大気汚染などをもたらしています。さらに、貧困層の住民による都市への移動は、都市のスラムの拡大に影響しています。都市化の問題は、まさに、環境・経済・社会問題が複雑に絡み合った問題群なのです。

#### 5. 気候変動がもたらす自然災害

世界的な気候変動は、途上国の地域にも大きな影響を与えています。寒波・洪水・台風・干ばつなど、さまざまな自然災害が各地で起きていることもグローバルな環境問題と言えるでしょう。自然災害の未然防止も、環境教育の取り組みと関連づけることが可能です。グローバルな文脈と地域の文脈を関連づける想像力が必要とされています。



## 3. 途上国における環境教育

### 1. 環境教育の重要性

環境教育の目的とは何でしょうか？環境に関する関心・感受性の向上や知識の獲得はもちろんのこと、途上国と先進国との相互依存関係の中では、問題解決にむけた技能の習得や価値観の醸成、日常生活におけるライフスタイルの構築（態度）、持続可能な社会構築にむけた行動・参加の推進が環境教育の目的として位置付けられています。

1977年に開催されたトピリン会議では、環境教育の5つの目的である関心・知識・態度・技能・参加（図表 1-5）と指導原則（付録資料 1 P152）が示され、今日

においても基本的理念として扱われています。

### 2. 環境教育の3つのアプローチ

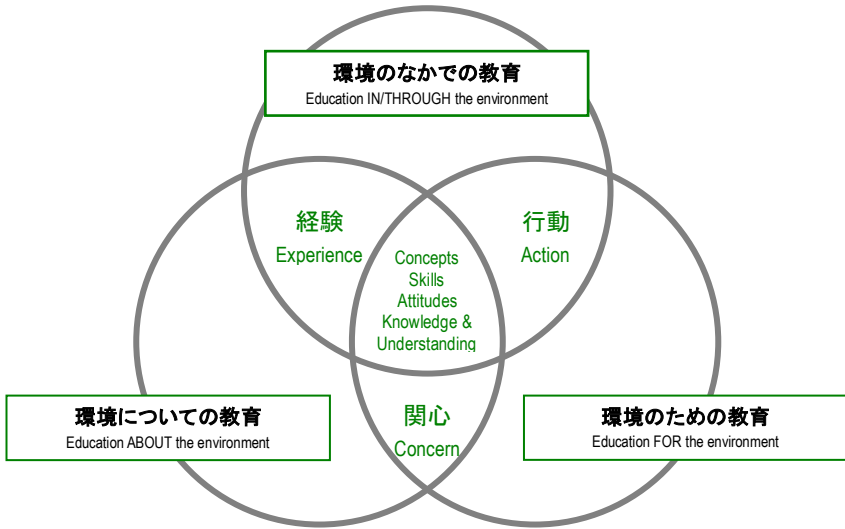
環境教育は子どもから大人まであらゆる年代が対象です。環境教育には大きく分けて3つのアプローチがあると言われています（図表 1-6）。学齢期や年代、目的に応じて、どのような環境教育アプローチが適切かどうかを検討する必要があります。さらに言えば、各アプローチにおいて教育者の役割が大きく異なることを理解したうえで、対応することが必要です（図表 1-7）。

■ 図表 1-5 環境教育の5つの目的

①関心（気づき）	社会集団や個人を支援して、総体としての環境とそれにかかわる問題に対する関心や感受性を獲得させること。
②知識	社会集団や個人を支援して、環境とそれにかかわる問題についての多様な経験や基本的な理解力を獲得させること。
③態度	社会集団や個人を支援して、環境に関する価値観や思いやり、そして環境の保護と改善に積極的に参加する意欲を獲得させること。
④技能	社会集団や個人を支援して、環境問題の明確化と解決に必要な技能を獲得させること。
⑤参加（関与）	社会集団や個人に対して、環境問題の解決に向けたあらゆるレベルでの活動に、積極的に関与する機会を与えること。

出典：UNESCO-UNEP(1978)

■ 図表 1-6 環境教育の3つのアプローチ



出所: Palmer, J. & Neal, P. (1996)

■ 図表 1-7 環境教育の3つのアプローチと教育者の役割

アプローチ	特徴	教育者の役割
環境のなかでの教育 (In) - 感性学習・直接体験型	自然や人間(社会・文化・経済)の中での直接体験による感性学習。幼年期での比重が高い。フィールド体験などによる直接体験型学習活動。	フィールド体験のオーガナイザー
環境についての教育 (About) - 知の移転型・理論型	自然や人間(社会・文化・経済)についての知識・技能学習。学齢期での比重が高い。講義形式などによる知の移転型学習活動。	体系的な知の移転
環境のための教育 (For) - 集团的行動・参加・対話型	自然や人間(社会・文化・経済)のための行動・参加学習。成人期での比重が高い。ワークショップなどの参加型・対話型学習活動。	協同の参加者・追求者

筆者作成

### 3. ESD の 10 の視点

1990年代後半から、「持続可能な開発のための教育(ESD)」に関する国際的な議論が欧州を中心に行われてきました。環境教育とも深いつながりのある「持続可能な開発のための教育(ESD)」は、①関係性学習、②価値と集合的行動、③学習プロセスと協同プロセスの連続によるスパイラルの構築、④市民性とエンパワーメントを重視しており、生涯を通じて「持続可能性(生態学的持続可能性、社会的公正、文化・精神的持続可能性)」を追求しつづける運動的・創造的概念であるといえるでしょう(ESDの10の視点については、付録資料2 P153)。「つながり」「かかわり」「ひろがり」「ふかまり」を大切にしたESDの視点は、これからの環境教育の実践において配慮すべき視点です。

### 4. 途上国における環境教育

#### —その意義と配慮すべき視点

途上国における環境教育活動を展開するにあたり、配慮すべき視点にはどのようなものがあるでしょうか？ここでは、筆者の経験に基づいて、途上国における環境教育の展開にむけた配慮項目を整理しました。

#### (1) 質の高い基礎教育の推進にむけて —貧困のスパイラルからの脱却

途上国において環境教育を展開していくには、その前提段階である「質の高い基

礎教育<sup>1</sup>の推進にむけた教育機会の均等と男女平等の達成」の視点が不可欠です。その普及・実施こそが、環境改善(健康と衛生問題の改善・環境に対する認識の向上・機能識字<sup>2</sup>の向上など)と社会変革(批判識字<sup>3</sup>の向上・コミュニケーション能力の向上・女性の社会参加・集合的意思決定の向上など)に寄与する可能性を有しています。つまり、学校教育だけでなく、識字率の向上や学校外教育の推進などを通じた基礎教育の充実が貧困のスパイラル(図表1-8)からの脱却を促すだけでなく、適切な家族計画と衛生管理のもとでの出生率の低下や女性の社会参加、住民による自然資源の有効利用、男女参画型の社会づくりに寄与するのです。

<sup>1</sup> 基礎教育—一人が生涯学習していくための基礎となる知識、価値、技能を獲得することを目的とする活動。日本では初等教育・就学前教育・成人識字教育などのことを指すが、国によって基礎教育の定義自体が異なるため固定的な概念ではない。

<sup>2</sup> 機能的識字—文字の読み書き能力(基礎識字)だけではなく、その能力を用いて家族、団体、社会で活動しながら生きていくための能力。

<sup>3</sup> 批判識字—社会的に弱い立場にいる学習者が自らの抑圧された状況を客観的に理解し現実社会を批判的に捉え、その状況を改善し新しい社会を創造しようとする能力。





#### (4) 代替的なアプローチの展開

知識を詰め込むようなやり方では断片的な知識しか身につかず、自分で判断して行動できるような人材を育成することはとても難しいと言えます。参加者自身が自ら参加・体験し、感受性を育み、自身で気づきを生み出すような「環境の中での教育(In)」アプローチ(感性学習・直接体験型)と、環境保全に向けた参加と集合的行動を通して多くの人々とともにコミュニケーションをとりながら自分の意見をまとめ、互いの価値観を尊重し、合意形成と解決策を見出すような「環境のための教育(For)」アプローチ(集団的行動・参加・対話型)は、新しい知を創り出すという点においては共通するアプローチと言えるでしょう。その一方で、これらのアプローチは、今日の途上国の教育現場において理解されていないかったり、重要性が低いとみなされていたりする場合があります。

あります。新しい学びのアプローチとして環境教育活動に取り入れ、子どものみならず関係組織・教育関係者・地域住民にその魅力と重要性を理解してもらうことが重要です。

#### (5) 五感を使う環境教育(全体言語)

文字や言葉だけで伝えようとするとは難しいことも、五感(視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚)を使って体験することでより深く伝わる場合があります。五感を使った環境教育活動では、見ること・聞くことに頼りきっている人間の感性に新しい感覚を気づかせるきっかけになります。さらに、新しく気づいた感覚を参加者と共有することにより、一緒に感動をわかちあうことを可能にします。五感を使う環境教育活動は、感受性豊かな子どもたちだけでなく成人にを対象とする取り組みにおいても有効であると言われています。

### ■ 図表 1-9 「知の移転型」アプローチが途上国で行われている理由

①教材の少なさ	出版されている教材そのものが少ないため、教師が黒板に書いた内容を板書する方法でしか知の伝達ができない。
②教師能力	地域教材や実験教材などの教材開発の技術、カリキュラム開発や参加型プログラムのノウハウを有していない。
③重視される知識偏重型教育	保護者は知識・技能獲得を期待しているため、参加型教育・野外教育が重視されておらず、教育を統一試験にむけた受験対策として捉えているため、受験対策以外の教育内容には関心がない。
④物理的なクラスの人数の多さ	クラス自体の生徒人数が多いため、体系知の移転のアプローチが効率的である。

筆者作成

## (6) 構成主義

### ー過去の経験との関連づけ

構成主義とは、学習者を自ら主体的に知識を構成する存在とみなし、知識の形成には学習者のバックグラウンド(生活環境・持っている知識・態度など)から影響を受けるという考えから、教育を教育者が一方的に教える「知識の移転」のような方法ではなく、学習者が自ら知識を構成できるような方法で行なうべきであるとするものです。学習者が自身の有する過去の経験と環境教育の取り組みとを関連づけやすくなるような学習環境を作りだし、過去の経験と関連づけた発問や意味づけなどをすることが、学習を自分のものとして取り入れる大きなきっかけになります。

## (7) 地域独自の学習スタイルの尊重

### ー踊り・会話・歌

環境教育活動の効果的な展開には、環境教育活動を実施する側の企画力・コミュニケーション能力・学習展開などによるものだけではなく、学習者の「学習ス

タイル」が大きな影響を持ちます。欧米においては、文字の読み書きが主流の学習スタイルとされていますが、途上国における文化や伝統知識の学習スタイルには、踊り・会話・歌といったコミュニケーションの手法を通して学習を深める活動も多く見られます。このような場合、基礎的な識字能力(読み・書き・算数)がなくても、深い意思疎通がとられていたり、伝統的な知恵の伝達が行われていたりする事例も多く見られます。文字を使用しないコミュニケーションの手法にはどのようなものがあるのかを見極めることも、環境教育の効果的展開において重要です。さらに、地域やコミュニティ内のあるグループや小集団によりコミュニケーションの度合いが深まる例も多く見られています。個人の学習スタイルとともに、どのようなグループ・小集団だと活発なコミュニケーションがとれるのかについても十分な見極めが必要です。



## (8) 環境教育教材の開発と活用

環境教育のメッセージを魅力的に表現し、明確に伝達をする際には、環境教育教材が重要な役割を持ちます。しかしながら、ただ教材をつくれればいいというものではありません。環境教育教材の開発には、まず設計図(カリキュラ・ユニット)を作成することが、対象とする学習者の学びを深めるうえでとても重要であると言えます。さらに、教材の学習目的に応じて、タイプ(動機づけ型教材・指導型教材・参加型教材・フォローアップ教材)と内容表示、用途に大きな違いが出てきます。現状把握をしたうえで、誰を対象者に、どのような目的で、どのような教材を開発すべきかを検討する必要があります。

また、教材開発は、その教材の開発プロセスに配慮を行うことによって、住民を巻き込んだり、住民同士のコミュニケーションの活性化に寄与したりする可能性も秘めています(教材の参加型開発)。村落の紹介ビデオを作成する取り組みは、地域の価値の顕在化にむけた地域住民間のコミュニケーションの活性化に貢献をもたらすでしょう。地域教材にボランティア自らの経験や日本からの情報を新たに付け加えることができれば、地域住民との連携によるオリジナルな教材を開発することが可能になります。

## (9) 環境教育活動の効果的展開にむけたキーパーソンの獲得

環境教育活動の効果的展開には、地域のキーパーソンの協力が不可欠です。環境教育ボランティアの活動報告書を読むと、このキーパーソンには、所属組織のカウンターパートのみならず、組織のリーダー、地域NGOのスタッフ・教師・地域住民など多様です。しかし、信頼関係の構築なしに、地域のキーパーソンが主体的に動くことはありません。日々の生活や活動の中で、キーパーソンとなる(なりうる)関係者との信頼関係を構築していくことが重要です。

## (10)さまざまな「つながり」を重視した環境教育

環境教育における一連の活動を通して、「すべてがつながっている」という認識をもつことが重要です。とりわけ、①事象間の「つながり」(自然の中や自然と人間のつながり、環境・経済・社会の相互関係性)、②主体間の「つながり」(地域におけるさまざまな主体の相互依存関係)、③地域的文脈との「つながり」(歴史・文化・精神性・生命地域)、④グローバルな文脈との「つながり」(グローバリゼーションと市場経済)など、「つながり」にも多様性があります。新たな視点として、⑤知識と態度・行動との「つながり」(知識偏重の学習文化における態度・行動の重要性の認識)、⑥日常生活との「つながり」(ライフスタ

ルとの関連づけ)なども重要な「つながり」と言えるでしょう。

### (11) 効力感

#### — 主体者意識に配慮した環境教育

環境教育の効果的展開には参加者・学習者の主体者意識がとても重要です。参加者・学習者の主体者意識の向上なしでは、環境教育活動の自立発展性を見込むことは不可能であると言えます。参加者・学習者が環境活動による活動成果を見えるものとして提示することは、参加者・学習者が自身の活動に効力を感じる(効力感)を高めるだけでなく、自身や自身の属する集団の主体者意識を向上させることにつながります。

ゴミの分別活動が分別で終わらずに、ジャンクショップにおいて現金に交換し、共通資産(サッカーボール、楽器など)を購入することは、活動成果を提示することにつながり、参加者・学習者の効力感と主体者意識(オーナーシップ)を大幅に向上させることでしょう。たとえ、それが金銭的な価値が付されていないものであっても、その活動の価値を顕在化させることができれば、同等の効果が期待できます。

### (12) エンパワーメント

#### — 社会変革を重視した環境教育

エンパワーメントとは、女性・移民・障害者など社会的弱者が、知識や技術を得て

自ら周囲の状況を改善していくことで自立を促し、社会に対して主張する力を持つことです。一人一人の潜在的に持っている力を信じ、自信のなさや希望のなさを変えて、自己や仲間の人生を肯定的に受け入れることも重要です。エンパワーメント概念の基礎を築いたジョン・フリードマンは、エンパワーメントを育む基本要素を、①生活空間、②余暇時間、③知識と技能、④適正な情報、⑤社会組織、⑥社会ネットワーク、⑦労働と生計を立てるための手段、⑧資金とし、それぞれの要素は独立しながらも相互依存関係にあるとしています。

途上国における環境教育活動においても、社会改善をもたらしながら自立を促すという点では、相互を連関させていくことも十分に可能です。一方で、エンパワーメントの段階的プロセスを踏まえた上で異なる資源を投入していく点においては、実際の展開に十分な配慮が必要です。

### (13) 国際的な教育イニシアティブとの連関

途上国における環境教育に取り組む際には、ミレニアム開発目標(MDGs)との整合性を考える必要があります。このMDGsの達成に向けた取り組みには「持続可能な開発のための教育(ESD)」や教育機会の均等を重視した「万人のための教育(EFA)」の運動、識字を重要な学習手段として位置付けた「国連識字の10

年（UNLD）」などがあります（図表 1-10）。途上国における環境教育活動が、環境に関する教育活動を超えて学習と教育に関するより深い意味合い（国際的な教育イニシアティブとの連関）を有していることを踏まえて、活動を進めていきましょう。

## 5. 途上国における生活環境問題と環境教育

前述の通り、環境問題は多くの問題と深い関係性をもった「問題群」です。さらに、途上国の環境教育の展開においては、環境的側面をただ強調するのではなく、経済的な側面や社会的文脈を反映させた取り組みでないと、その効果と自立発展性は期待できません。さらに、環境問題は人口問題と開発問題とも密接な関係を持っています。個人・組織・地域社会・国・国際社会など様々なレベルでできる環境改善と実施展開には、その活動レベルと範囲があることを認識しましょう。

このようなことを踏まえると、日本における環境教育の実践経験を直接途上国の現場で展開することは困難です。赴任した地域の現状をまず知り、自然界にどのようなつながりがあるのか、自然と人間、人間と人間の間にはどのような関係性があるのか、どのような社会のしくみがあるかについて十分に把握をすることが必要とされています。そして、カウンターパート（以下、CP）を含む地域の関係者を巻き込みながら、プログラムの企画・立案・実施をしていく必要があるでしょう。

「つながり」「かかわり」「ひろがり」「ふかまり」に十分配慮をしながら、ボランティア自身が、途上国から学ぶ姿勢を持ち続けることなしには、効果的な環境教育活動を展開することはできません。ボランティア自らが、地域とグローバルな文脈を関連づけさせる「想像力」と、現場に適した環境教育を展開するための「創造力」が必要とされています。



地域の小学校での環境教育の授業の様子。  
宮崎紀子隊員（ボリビア・H18年度派遣）

■ 図表 1-10 国際的な教育イニシアティブとの関連

国際的な教育イニシアティブ	環境教育との関連
ミレニアム開発目標 (MDGs)	<p>ミレニアム開発目標(MDGs)の8つの目標と18のターゲット(達成目標)は、国際開発協力における重要な枠組みであり、国連レベルで合意されているものである。初等教育の提供と教育における男女間の平等に関する条項は、MDGsとEFAのアジェンダの双方に共通する2つの分野に関わる。識字・教育の質・ノンフォーマル教育など基礎教育のその他の側面は、MDGs達成のための条件として提示されている。</p>
万人のための教育 (EFA)	<p>万人のための教育(EFA)の6つの目標は、すべての子どもと成人への基礎教育の普及、そしてこのような条項の本質について言及している。基礎教育は、あらゆる年代の女性も男性もアクセス可能でなければならない。適切な学習とライフスキルを提供し、常にその質の向上に努めなければならない。基礎教育は、生活の質と貧困に対してよい影響を及ぼすものであると見なされているのは明白であるが、このような影響の本質と、最も適切な教育の内容についての検討は、さらに大きな課題である。言い換えれば、EFAでは教育の役割と提供が中心課題であり、これらによってEFAの計画が前進するのである。教育の基本的な目的は、社会的および政治的により広範囲に議論されるべき課題であると見なされ、また考えられている。</p>
国連識字の10年 (UNLD)	<p>国連識字の10年(UNLD)は、EFAの取り組みの一部である。識字は、EFAの6つの目標すべてに織り込まれたものであり、目標達成のための条件でもある。あらゆる形態や段階の教育を実施する上で、識字を学習の重要な手段として取り入れなければならない。十分に質の高い識字能力の習得にしかるべき関心を払わなければ、体系化された学習の場にアクセスしても意味がない。UNLDには、さまざまな生活の側面とも戦略的に結びつくことにより、教育プロセス以外のものへも影響を及ぼすという側面もある。識字能力の習得と活用は、自信や自発性を高め、市民としての社会参加や、文化的自尊心を促すという、目には見えにくい効果があるとともに、母子の健康、出生率、収入レベルの向上といった目に見える影響もある。</p>

筆者作成

## BOX 1 環境教育ボランティアに期待すること

皆さんは様々な理由で協力隊への参加を決意されたことと思います。私が技術専門委員として面接を担当した際にも、子どものころからの夢だったと語ってくれた方がいました。あるいは、世界の現状を憂いてやむにやまれず参加を決めた人、若いエネルギーや可能性を試してみたいと参加を決めた人、百人百様の動機があったかと思いません。

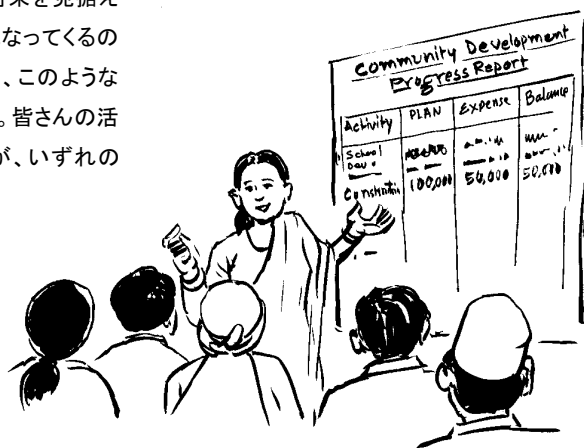
最近、海外を目指す日本の若者が減ってきた、今の日本の若者は内向き志向になってきたとの報道が頻繁になされています。確かに、様々な仕組みが金属疲労をおこし、さらには格差の拡大といった社会状況の悪化、閉塞感にとらわれている現在の状況では、将来への希望を見出せず、チャレンジ精神が萎えてくることも理解できます。

このような時こそ、自らの生活や私たちの祖国である日本を相対化し、将来を見据えた生き方を考えることが重要になってくるのではないのでしょうか。協力隊は、このような場として、最適な場の一つです。皆さんの活動は、多岐にわたっていますが、いずれの

活動も任国の持続可能な社会の実現に確実につながっています。そして皆さんの任国での経験は、地球という一つの星の中で、人間のみならず、他の生物種も含めて、互いに支えあって生きることなしには私たちの幸せがないことに気づかせてくれるでしょう。活動を通じて得たこの気づきと種々のジレンマを伴った経験が、生きる力となり、未来づくりにつながります。

日本が提案し、国連を中心に世界が取り組んでいる持続可能な開発のための教育（ESD）は、日頃皆さんが取り組んでいる活動にほかなりません。皆さんの経験と知恵が新たな社会創造につながることを確信しています。

立教大学教授、日本環境教育学会会長  
阿部 治



NOTES



## NOTES

## 第2章

# 赴任直後、とりあえずやってみること



**前** 章では途上国における環境と教育が直面する多くの問題点を概観し、さまざまな教育的アプローチを簡単に紹介しました。公害問題や貧富の格差、直接・間接的に先進国が影響を与える途上国の環境問題などなど、「テーマが大きすぎる！」「とても私の手に負えない！」「難しすぎる…」と感じる人も多いかもしれません。実際、環境問題は非常に大きなテーマであり、個人の力で全てを解決することは不可能です。

しかし、個々人の活動が「つながる」ことで大きな力を発揮することを私たちは知っています。特に環境教育にたずさわる私たちは個々の活動を「つなげる」ファシリテーターであり、人と人、人と社会、社会と自然、途上国と先進国など、さまざまなスケールの「つながり」を意識しながら個々の活動を具体化していかなければなりません。“Think Globally, Act Locally” とりあえず大きく考えて、足下から行動してみましよう。

# 1. まわりの人を知ろう

## 1. JICA 事務所と調整員

現地に赴任し、真っ先に訪れるのは現地の JICA 在外事務所です。在外事務所には、事務所長をはじめとする日本人職員のほかに複数のナショナルスタッフがおり、任地の一般情報のほとんどが手に入ります。環境担当（もしくは教育担当）のナショナルスタッフは活動に直結する情報に詳しいので、気になることは躊躇せず質問しておきましょう。特に教育省（環境教育）や環境省・公共事業省（廃棄物処理等）など、中央官庁の中でも今後の活動に関係してくると思われる組織の情報は地方では入りにくいかもしれませんが、任国行政組織の中で自分の CP が何処に位置するかくらいは知っておくと、今後の活動が「どの範囲まで」行えるかを類推する材料となります。また、配属機関のテリトリーを「超える」活動を行う必要が出てきたときも、JICA ナショナルスタッフの支援を受けられる可能性があるため、十分にコミュニケーションをとっておいてください（ただし、ナショナルスタッフも多岐にわたる仕事を抱えて忙しい場合があるので、社会人としての配慮は忘れずに）。

ボランティアにとって現地事務所でもっとも頼りになるのは、ボランティアを担当する「企画調査員（ボランティア）」（以下、調整員）です。

多くの調整員はボランティア経験があり、ボランティアが活動中に直面する問題や、生活する上のアイデアなど、多岐にわたって相談に乗ってくれます。また任国からの要請を精査し、ボランティア派遣申請を JICA 本部に行うのも調整員であり、多くの場合、現地や CP の情報をもっとも把握しているのも彼らです。

既に任国内で活動している環境教育ボランティアがいれば連絡先を聞いておくと今後の活動に参考になるでしょう。また同じ職種ばかりでなく、農業や林業、栄養士、村落開発など、それぞれの分野で活躍中のボランティアにも可能な限りコンタクトをとってみてください。他職種の中にも環境教育活動の中で生かせるアイデアがたくさんありますし、逆に他職種のボランティアも環境教育のアイデアを必要としているかもしれません。これら「協業」は、協力隊の最大の強みでもあります。



また、現地事務所には「健康管理員」を配置している場合があります。ほとんどが医療現場での経験がある任国保健情報のスペシャリストで、任地周辺都市の病院情報や感染症情報などに精通しています。健康面でのサポートはもちろんのこと、医療廃棄物の処理や感染症、地域保健医療制度など、環境教育ボランティアの活動として想定されるトピックの情報も健康管理員が力になってくれるかもしれません。

## 2. ホストファミリー・近隣住民

JICA 事務所でのオリエンテーションも終わって、無事活動現場に到着したら、ホストファミリーや近隣の住民とのコミュニケーションから始めましょう。

ホストファミリーは、ほとんどの場合「あなたの味方」です。「外国人がホームステイすることを了承している」こと一つとっても、よそ者に対して柔軟なことは間違いありません。それどころか、新たに受け入れる日本人に「興味津々」で、好意をもって接してくれるであろうことは容易に想像が付きまします。

多くの場合、ホストファミリーはその国の平均的生活かちょっと上、中流から中上流家庭であることがほとんどでしょう。そのことを認識した上で、家族のこと、仕事のこと、子供の学校のこと、最近街で流行していることなど、どんなことでも話してみましよう。こういった基礎的な周辺情

報は地元コミュニティと接していく上での「共通認識」となり、今後のスムーズな活動には欠かせません。

あなたが「情報収集」するだけでなく、日本の情報や両国の違いを相手側に伝えることも忘れないでください。相手は今後一緒に暮らすあなたの情報をかなり「知りたがって」いるはずですよ。

また、赴任後2ヶ月くらいまでの新鮮な感覚をこまめにメモしておくことをおすすめします。人間はどのような異なった環境にも適応し、慣れていくものです。赴任当初はとてもの気になったこと(時間を守らない、衛生状態が悪い、イイカゲンなど)が慣れてくるに従って平気になり、よい意味でも悪い意味でも「ネイティブ化」していくものです。また、最初に感じた「違和感」の示す意味を後になって知ることも多々あります。この「最初の感覚」は、慣れた後では感じるができなくなることがほとんどなので、なるべく詳細にメモをとっておいてください。現地のよい部分も悪い部分も含め、後に直面する無数の問いの答えがこの「最初の感覚(直感・違和感・驚き)」に含まれていることが多くあります。

## 3. カウンターパート(CP)

赴任地での仕事、最初に親しくなるのはCPです。CPは、活動をする上でのもっとも重要な理解者になります。ボランティア活動をスムーズに始めるために、CPとは十分な理解と信頼関係を構築しなけ

ればなりません。仕事上での「同僚」であると同時に、よき「友人」関係を築いてください。今後 2 年間の活動のパートナーですから、気兼ねなく何でも質問してみましよう。

環境教育の CP は多くの場合環境教育もしくは環境問題の担当者としての経験を持ち、ホストファミリーよりはボランティアの知識・興味レベルに近い情報が得られるでしょう。地元コミュニティにもそれなりに「顔が利く」可能性もあり、そこに住む人々やその生活、職場の人間関係、政局や地元経済まで、ありとあらゆることを教えてくれるかもしれません。特に地域のキーパーソンの情報は、できるだけ CP から得てください。もちろん、現地と日本の大きな違いがあれば、こちらからも積極的に教えてあげましょう。小さな理解の積み重ねが信頼関係につながります。

活動に関する情報はできるだけ CP と共有し、「解決すべき問題」に対するスタンスは可能な限り共通化しておくのがキーポイントです。例えば、ボランティアが「住民の意見を吸い上げ、巻き込み、主体性を引き出していきたい」と考えていても、CP が「住民は行政の側でコントロールしたい」と考えていては、活動はスムーズにいきません。最初からは無理かもしれませんが、相互理解を進めるうちに、この「スタンスの共通化」を心がけてください。

しかし、どんなにボランティアが努力し

ても CP との大きな問題が生じてしまうことがあります。そうした場合には、一人で悩まずに(修復不可能になる前に、できるだけ早い段階で)事務所の担当調整員に相談してみましょう。調整員はさまざまなチャネルを通じて問題解決に力を貸してくれるはずですよ。

#### 4. 地域のキーパーソン

ホストファミリーと CP から地域の一般的な情報を得られたら、地域の「要人(キーパーソン)」に可能な限り「ご挨拶」してみましよう。

個人主義が行き届いた日本と違い、途上国では「人と人のつながり」が生活そのものを規定している場合が多く見られます。特に遠方から赴任してきたばかりの異国人(=ボランティア)に対して、地域コミュニティは大きな好奇心を抱いているはずですよ。ポジティブな印象かネガティブな印象かの判断はとりあえず置いておいて、「よそ者」の礼儀として、地域の代表者に挨拶をしておきましょう。CP は既に「地域の人」なので、時間が許すかぎり同行してもらいましよう。

この場合の「代表者」は必ずしも行政的な「首長」ではなく、神父さんやお坊さんなど宗教的な場合もあるでしょうし、女性グループ代表や隣組の組長さん、学校の校長先生など社会的な場合もあるでしょう。とにかく、本格的な活動を始める前に個人として「仁義を切っておく」ことで、

後々の余計な対立を防ぐ大きな効果があります。

可能であれば、今後の活動にアドバイスをもらえるように伝えること(広義の「関係者巻き込み」)ができればよりよいでしょう。特に政治的・思想的にセンシティブ

な、ゴミ問題や教育などの活動を始めてからだと、利害関係が既に対立してしまっていて「にっちもさっちも」いかないことが多々あります。事前にできるだけ「信頼関係を構築しておく」ことを心がけましょう。

### ■ 図表 2-1 情報源と得られる情報例

情報源	得られる情報例
環境/教育担当 ナショナルスタッフ	任国の中央行政機関(環境省・教育省など)・各種関連団体の情報、CP 機関の情報、環境および環境教育に関する政策
企画調査員 (ボランティア)	CP および任地に関する情報、ボランティア支援体制・制度について、事務所およびボランティア連絡所の機材について(コピー・印刷など)、他ボランティアの情報(環境教育ボランティアおよび他職種)
健康管理員	任地および近郊の保健医療情報、任地および近郊の医療機関情報、地域保健医療制度(貧しい人が医療を受けられる?など)、感染症など環境教育に関係する情報
ホストファミリー 近隣住民	地域の学校について、学校の種類(幼稚園・小中高・大学、それぞれ何年? 義務教育は?)、何部制?(校舎は一つでも、午前・午後・夜間の部などがあるか?)、全校児童数&クラス数(だいたい児童数でよい)、仕事について、町(村)について(一般情報・おいしいレストラン・市場など)
カウンターパート	活動に関係する全ての情報(地元教育機関、環境教育の現状、ゴミ行政など)、配属先組織図、職場の人間関係、配属先と地元住民の関係、地域のキーパーソン
地域のキーパーソン	(間接的に)各キーパーソンの立ち位置(政治的・宗教的・社会的)、地域の環境 NGO/NPO の活動内容および理念、年間活動(イベント)カレンダー、地元住民が抱える問題(もしくは地域住民が「問題と考えている」事柄)、地元の社会構成
地元教師や地元 NPO	子どもたちが抱える問題、地域の問題一般、環境 NPO の活動内容および理念、年間活動(イベント)カレンダー

## BOX 2 「声」を聴くー「私たち」はあるが「私」がない

「人びとは本音を語るか？」  
インタビューでいつも考えることです。  
日本の東北地方で、家庭訪問調査をした時のこと。

『ごめんください。』と私、  
家の中から『留守です。』という声。  
声がするのだから家に誰かいるはずですが。  
しかし『留守です』とはどうしたことでしょう。  
考えてみましょう。  
インタビューの拒否？ いいえ。  
その家の人でない人が留守番をしていた？  
いいえ。

『うちは〇〇が留守だから、聞き取り調査に答えられない。』という意味でした。この声の主は 60 代の女性。にこにこしている。私が『お母さんの意見を聞きたい。』と言うと、『私は意見を言える者ではない。』とその女性。しかし、私が『是非、奥さんの意見が聞きたい。』とねばって聞き始めると、時間が経つにつれて次々に話してくれま。しかし、確かに男性に聞くよりは時間がかかりました。こういう質問に慣れていないために、時間がかかるのです。

その隣の家も、またまたその隣の家も同じく年配の女性の『留守です。』という返事がきます。私が座り込むといろいろな話をしてくれます。何件か同じ状況が続いて、気づいたことがありました。私はいつも最初の質問が『今、一番気になっていることは何で

すか？』と尋ねます。この東北の村での典型的な「気になっていること」は次の3つです。

- ①嫁不足(若い女性が少ないので、独身の中年男性が多い。)
- ②減反(毎年、国の農業政策で田んぼの耕作面積を減らさざるを得ない。)
- ③雪対策(冬場、若い男性が出稼ぎにしている中で、女と年寄りで行う雪下ろしが大変。)

ところで、上の回答をした 60 代のお母さんのやりとりは次のようでした。

私：『お子さんがいますか？』

お母さん：『息子が 3 人いるよ。』

私：『息子さんたちは独身ですか？』

お母さん：『いんや、3 人とも嫁つ子いるよ。』

ということは、この家では嫁不足は問題ではないようです。では、このお母さんは嘘をついたのでしょうか。そうではありません。彼女の主張は「私たちの村では嫁不足が問題である」で、彼女の主語は「私は」ではなく「私たちは」でした。英語で言うと

“We have such a problem in our village.”  
であって、“I have such a problem.”  
ではないのです。この東北地方での調査の話には続きがあります。

私はどの調査でも個別のインタビューを行います。グループインタビューも行いま

## BOX 2

す。この時は中学3年生のグループインタビューを最初に行きました。やはり質問は「今、一番気になっていることは？」です。中学生たちの声は「高校を卒業したらこの村を離れないといけないこと」「農業をしたいけれど、親がやらせてくれないこと」「都会に出ていかなければいけないこと」といった類の答えが多いです。

次に大人のグループインタビュー。ここで、先に行った中学3年生の「村を離れたくない」声を伝えると、大人たちは「いやいや、この子たちが高校生になると現実的になるよ」と異口同音。大人のグループインタビュー後、今度は個別の家庭訪問インタビュー。そこでの会話は…

私：『おたくの次男はこの村に残って農業をやりたいと強く思っているようですよ。』

父：『知っていますよ。でもね、この村で本気で農業やりたいのはうちの息子だけなんですよ。』

私：『「兄ちゃんも農業をやりたいけれど、親に仙台に行かされた」とも言っていましたけど。』

母：『そうなんです。長男も次男もなんです。でも、うちの息子たちだけが村に残されたらかわいそうじゃないですか。他の家の子供さんたちも本気でこの村や農業をやる気があったら良いのですが。うちの子供たちだけじゃあね。』

この家だけでなく、他の家でも同じようなやりとりがありました。つまり、どの家も「うちの子供たちだけが本気で農業をしたい」「うちの子供たちだけが本気でこの村に残りたい」と思っていました。「私たちの村では、本気でこの村に残り、農業したい子どもたちはいない」という言説ができあがっていたのです。ここでも主語は「私たち」であって「私」ではありませんでした。インタビューに答える人が「私たち」を主語にして話しているうちは本音ではないでしょう。

ワークショップなどでは、グループ活動が多くなります。グループ活動はグループの見えざる力で個々人の声を引き出す効果があります。しかし、人はそれぞれ考えをまとめるのにかかる時間が違います。この個々の時間の違いを埋めるためには、個人作業が必要となります。これまでのグループ活動では「私たち」ばかりに気を取られて、「私」を忘れていたのです。ワークショップや調査などの活動をする際は、ファシリテーターがグループでの「私たち」の時間を生かすために、参加者の「私」の時間を作るお手伝いすることも大切なのです。

私の仕事は日本でも発展途上国でも人々の「声」を聴く仕事です。

平山 恵  
明治学院大学准教授



## 2. 地域を知ろう

### 1. 地域の一般情報(人口、産業、学校ほか)

自分を取り巻く「人模様」を把握したら、次は「地域を知り」ましょう。

CP などからの情報によって、地域の「おおよその姿」はつかめてきたかと思いますが、その多くが伝聞や個人の記憶に基づいたちょっとあやふやなものかもしれません。またほとんどが現状を反映し「現在を切り取った」ものだと思います。人口が減っているのか増えているのか？ 主産業は成長期？ 衰退期？ 子供の数は増えている？ 若者は流出？ どの地域に子供が多い？ ゴミの排出量の推移は？ 周辺地域と比べてどう？ など、活動を始めるに当たって必要なさまざまな基礎情報を集めなければなりません。

この部分は、ぜひ CP と作業を進めてください。情報の所在を確認し、担当者とコンタクトし、必要であればより信頼できる複数のソースを探す。この作業を協同行うことによって認識を共通化し、今後の

活動に対するスタンスを共有することに役立ちます。また、情報請求に対する各機関の対応から、それぞれの信頼度や自主性(=やる気)を類推することができますし、それによって今後各機関をいかに巻き込んでいくか(巻き込むべきか否かを含めて)を考える根拠にもなります。インターネット上に公開されているデータに関しては、積極的に利用し効率を上げましょう。

とりあえずはあまり完璧さを追求せず、CP との最初の共同作業くらいのもりで、楽しんでやってみましょう。データ収集および他機関との交渉は、CP が結構テクニクであったり、逆に潔癖症であったり、正義感が強かったり、といった性格を知る上でとても役に立ちます。相手の「強みと弱み」をできるだけ把握して「強みを伸ばし弱みを補う」ような「チームづくり」を進めましょう。

#### ■ 図表 2-2 地域の一般情報の例

- ・CP および任地に関する情報
- ・人口および人口動態(総務省・国土省もしくは国土地理院、市町村役場)
- ・主要産業および産業動向(経済省・産業省もしくは経団連、地域の商工会議所、市町村役場)
- ・学校(教育省、市町村役場、少なければ校長先生を訪ねるのがおすすめ)

## 2. 地域の環境や教育問題

### (ゴミ問題、違法伐採、公害、飲酒・ドラッグほか)

ところで、ゴミ問題(=廃棄物処理)に関する調査を始めると、ほぼ例外なく「利権」の問題に出くわします。飲酒やドラッグ問題を含めて「利権」にはマフィア等が関わってくる可能性も否定できません。実際に環境教育活動で危険な目に遭うことは少ないと思われますが、「そういうこともありうる」と意識し、常に CP や調整員の助言に耳を傾けるようにしてください。

地域の一般情報が集まってきたら、いよいよ環境や教育といったテーマに関わる情報収集に取りかかりましょう。ここま

での調査で、地域の大まかな問題点を把握し、地元が「問題である」と考える事柄や、場合によっては統計データとの差異(人々が「問題」と感じていることが、統計では「他地域に比べて良好」であったりすることが)がわかってきたかと思います。

それらの中で、今後の活動に大きく関わってきそうな事柄について、より深く調べてみましょう。特にこのパートは活動の「中心目的」を設定するための核となる調査ですので、できる限り CP と一緒に行き、認識を共有しておくことが非常に重要です。

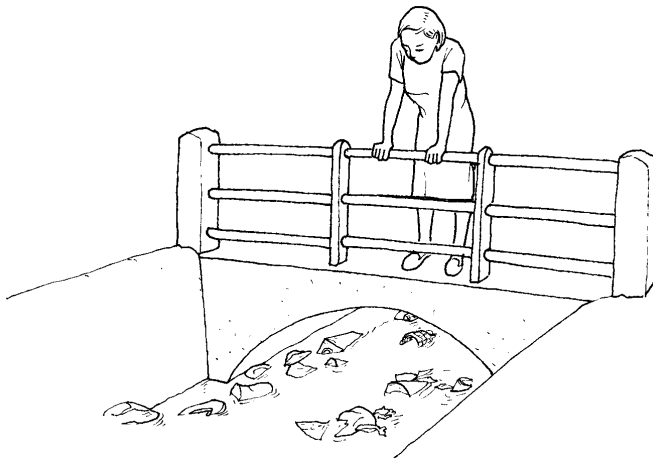


さて、まずは学校の先生に話しを聞いてみましょう。地元の小・中学校の先生は、土地によっては地域の指導者的な役割を担っていることもあり、情報の宝庫です。多くの場合、子供たちを取り巻く環境やドラッグ・飲酒などの社会問題、ジェンダーや貧困から町の美化まで、ほとんどの環境および教育に関する興味領域をカバーしています。まじめで熱意のある人が多いので、活動期間を通じてさまざまな助言や支援を期待できますし、学校における環境教育活動では中心になってもらう可能性が高い人たちでもあります。ぜひ仲良くなってください。

また、今後の活動を見越して、地域で環境教育や自然保護活動、教育活動一般にたずさわっている NPO や団体を訪ねておくのも非常に重要です。地元の環境問題に継続的に関心を持つ環境 NPO は、非常に多くのデータや情報を持っています。年間の活動予定や大きなイベン

トなどの情報を入手し、協力できる部分は積極的に関わっていきましょう。特に環境に関わるイベントは、共催形式にする方が単発でやるよりも格段に効果が高く、「ヒト、モノ、カネ」全てにおいてコスト的なメリットが大きくなります。

また、JICA の活動は「政府間」技術協力であるため、必然的に配属機関は(中央、地方を問わず)政府関連機関になる傾向にあります。途上国の行政機構は脆弱なことが多いため、選挙などによる政権交代で配属先機関および CP が変更になり、せっかくの協力活動(および成果)が引き継がれない危険性を常に持っています。その点、地域の環境 NPO や団体は継続性が比較的担保されているので、新政権(県・州政府や市役所)に対する働きかけに非常に効果を発揮します。CP とも時間があるときにこの点について話し合っておくことをお勧めします。



### 3. 活動のビジョンをはっきりさせる

ここまでで活動を始めるに当たって必要な情報の収集およびCPとの活動の導入部分が終わりました。CPの性格や能力が少しずつでも把握できてきたのではないのでしょうか？この節では2年間の活動の「パートナー」であるCPと、問題の分析をしながら活動のビジョンを明確にしていきましょう。

#### 1. 「やるべきこと」「やれること」「やりたいこと」

ボランティアの活動においては、「やるべきこと(求められること)」「やれること」のほかに、ボランティア自身が「やりたいこと」(ボランタリーな意志)という重要な要素があります。「あなた自身がやりたいこと」と「CPがやりたいこと」、さらには収集した情報から「やるべきこと(任地で解決すべき問題)」をそれぞれ分析し、2年という活動期間、与えられた状況および人員で行える範囲内(「やれること」)で活動のビジョンを描いてみましょう。

ビジョンが描けてきたら、前節で収集した情報から「この町で解決すべき問題」を環境教育という視点で考えてみましょう。その中で「自分がやりたいこと」「やれること(得意分野)」などに従って、どのような活動、プロジェクトを実施するのか選択してみましょう。

その際、「私は子供との活動が大好き!」とか、「町の中心部からポイ捨てゴミがなくなったらすごいだろうなあ!」とか、「やはり根本から廃棄物処理システムを考えなければ!」など、あなたが主体的に「感じる」ことを大切にしてください。あなた自身が「これをやりたい!」と思うことになれば、①十分な支援体制がない可能性があること、②途上国固有の不確実性、③2年間という制限において、活動を実行・継続していくことは非常に困難です。まずは「やりたいこと」、次に「やれること」、最後に「やるべきこと」を考慮してください。

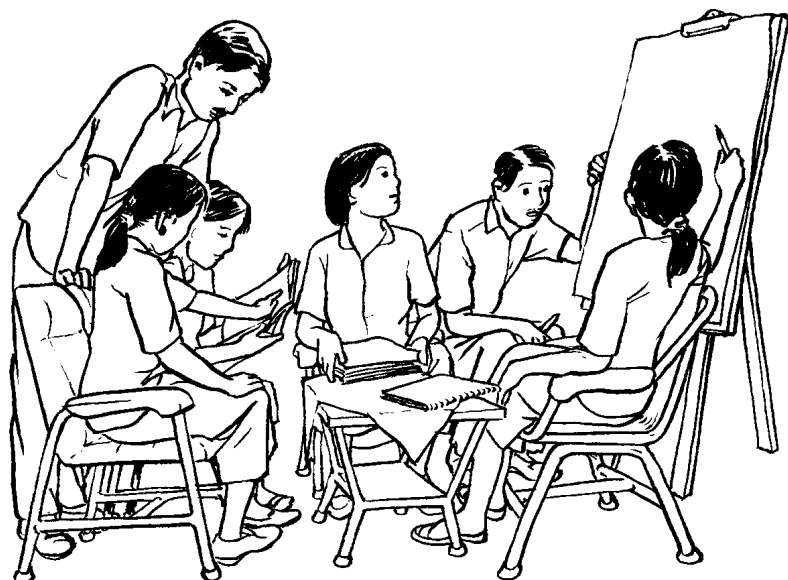


## 2. 2年後・10年後にどうなっていてほしいか具体的にイメージする

実施するプロジェクトや活動が決まったら、CP と共有し、具体的な「絵」を書き始めます。その際に重要なのは「2年後の活動終了時にどうなっていたいか（どうなっていて欲しいか）？」と「10年後にどうなっていて欲しいか？」を明確にし、イメージを共有することです。選択したプロジェクト（活動）を実行し、計画通りに進んだ場合に2年後の「プロジェクト終了時」にどのような変化が望ましいかを、「絵に描く」なり「ストーリーにする」なりして具体的に CP と共有します（必要に応じて、関係機関と

も共有します。）

この作業によって、常に「ビジョンを意識する」ことが可能になり、途中で問題が生じたり、迷ったりしたときに常にイメージに立ち返って軌道修正をする基礎が出来ます。特に言葉や文化・習慣が違っていると、同じものを見ている「つもり」で、全く違った方向に向かっていったようなことが起こりがちですが、初期の段階でこの「イメージのすり合わせ」をすることで誤解を回避し、直面する困難をともに乗り越える勇気と仲間意識を醸成することができます。



### BOX 3 人々の生活を観察し記録する

キーパーソンや周りにある資源、材料は見つかってきた、でもやっぱり何をしたらいいのかわからない。そんな時は、自分のもつ情報を少しでも深いものにしていく「活動」を行ってみるのも一つです。必ずしもイベントやアクティビティを行うことだけが協力の「活動」ではなく、自分が住んだ村、関わった人たちのエピソードを丁寧に蓄積していくことも立派な「活動」の一つです。それが後任や他の援助関係者の活動やプロジェクトに貢献することもあるでしょうし、一部でも現地語に訳して帰国時などに残すことができれば現地へのフィードバックにもなり、お世話になった方々への感謝の気持ちにもなります。「見聞きしたことを残す」ことも十分「活動」になるのです。

#### ■ 観察で大切なこと

普段私たちは身の回りで起こる事を十分に観察しているかというとうそではありません。起こる事象を「見る」ことはあっても、それらを注意深く「観察する」にはある程度の準備が必要です。また、偏った観察にならないようなポイントを抑えておくことも大切です。

ポイント① 観察者は自分一人ではなく、現地の同僚、同期、同職のボランティアなど色々な視点を持った人と一緒に観ることでより深い観察ができます。例えば私の住んだ

シリアの村はイスラム教徒が多く、同僚と仲良くなってもその妻子には会えないということもよくありました。その点、女性は国籍に関わらず会い、話をするすることができます。

ポイント② 観察する対象は異なる様々な属性を持つこと。同じ村の中でも村長、学校の先生、農民、遊牧民、仕事や年齢等によって考え方や持つ意見は異なります。

ポイント③ 過去のボランティアや専門家の報告書、任国の5カ年計画などに目を通すこと。

ポイント④ 過去のデータに目を通す際は自分一人ではなく何人かで目を通すこと。同じデータでも異なる視点(同期ボランティアや調整員、あるいは現地の人)で観れば異なる解釈が出てくるかもしれません。水や土壌の汚染が問題とされていたシリアの村で水質専門家の方々と水を採取し、有害性の調査を行いました。その結果を見て、水銀とクロムの値がWHO基準以下であるとシリア人は無害を主張しましたが、日本人は日本の環境省基準では有害であると判断しました。どちらが正しいというよりも1人の解釈ではデータの信頼性は明らかにならないことを知っておく必要があります。

#### ■ 自分も観察されている？

任国は動物園でも見学施設でもありませんから相手を観察するだけでは相手からの

信頼も得られません。相手も自分達を観察しているわけですから、謙虚な態度や自分のことを相手に伝える準備(自己分析など)や練習(P150 マイクロティーチング参照)をしておくことも大切です。

### ■ 観察して、そしてどうするの？

観察して終わりではせっかく集めた情報が宝の持ち腐れになってしまいます。大切なのは記録をとり蓄積し、共有することです。これら情報をどのように分析するかについてはこのコラムでは割愛しますが様々な人のエピソードや観察事項を書き出し、いくつかのテーマ(例: 村人達の最大の関心事など)に絞ってみましょう。そしてそれらのテーマについて様々な人に話を聞いてみるとよいでしょう(これを衆目評価と言い、多くの人の目で情報を共有します。当然異なった意見や反発する意見も登場するでしょうがそれらも含めて記録し、より信頼性のある情報にしていきます)。

まとめた情報を共有するには、調整員などに協力してもらい、図書スペースやネット上で公開するなど誰でもアクセスしやすくするとよいでしょう。また現地語に訳すことで、現地の人にもシェアできると新たな衆目評価となります。協力隊のように2年間現場に密着し、現地の人々と暮らす経験ができる人は少なく、こうした情報は JICA のような援

助機関だけでなく、赴任地の人たちにとっても後々意義あるアーカイブ(情報の蓄積)となるはずです。

### ■ 活動の最終目標はフィードバック

折角協力隊で赴任するのだからプロジェクトを立ち上げたい、現地の人の役に立つことをしたいという気持ちはわかりますが国際協力の根本理念として自分が望む社会を押しつけるのではなく、その国の社会を構成している人たち(自分の同僚や周りの人たち)がどのような社会を望んでいるのかを知ることが大切です。私の周りのシリア人も始めは車がほしい、テレビがほしい、お金をもっと稼ぎたい、と言っていましたが「自分が住む地域をよくするためにもっとこうしたい」というアイデアを私に伝えてくれ始めたのは帰国を目前にした頃、あるいは帰国後夏休みを利用して遊びに行ったときでした。

2年間の間に立ち上げたイベントやプロジェクトはその時は周りの人々が望む社会と一致しているように見えても、実は彼等の表面的な要求から生まれたニーズに過ぎないのかもしれない。たった2年間で本当に現地の人たちの本音が聞こえるものかどうか、常に注意深く観察を続けてみてはどうか。

田村 雅文  
シリア・環境教育・H17 年度派遣

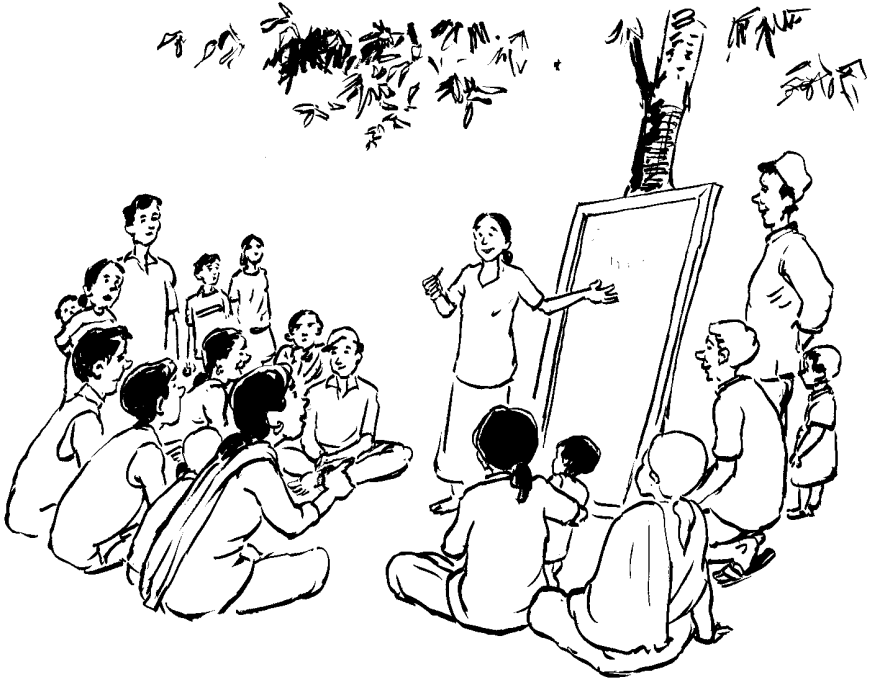
## NOTES



## NOTES

## 第3章

# 本格的に活動を始めよう



**現** 地の生活に慣れてきたら、いよいよ活動開始です。思えば長い道のり。はじめて JICA ボランティアのことを知って心動かされたあの瞬間から、決心、応募、合格、派遣前訓練と、長い準備期間でした。「途上国の人々の役に立ちたい、自分にだって何か貢献ができるはず！」今までたくさんの準備をしながら温めてきたこの思いの丈をいよいよ活動に具現化していくときがやって来ました。そこで、はやる気持ちをあとほんの少しだけ抑えて、この思いをできるかぎり効果的な貢献活動へと展開できるよう、この章で学びましょう。

# 1. 活動のための資源を探す

## 1. 「資源」ってなに？

さあ、いよいよ活動開始。手始めに何をしたらいいでしょう。はやる気持ちで、活動が空回りしてしまわないように、最初に活動に活かせる「資源」にはどんなものがあるのかを確認してみましょう。

ところで、「資源」とはなんでしょう。しばしば、経済・経営などの分野で、資源の代表格として「人・物・金・情報」という呼び方を耳にしたことがあると思います。近年では、この4つに加えて、第5の経営資源として「ビジョン」を挙げる人もいます。国際貢献と経済・経営では、大きく分野が異なるように見えますが、「複数の人々が一つの思い、すなわちビジョンに向かって力を合わせて進み、関係する様々な立場の人々がよりよい実りを得ようとする組織的な活動」といった意味で、わたしたちの国際貢献の活動にも経済や経営の感覚はとても役に立ちます。

## 2. 途上国の中での「資源」

ただ、私たちのフィールドは途上国。「人・物・金・情報」などの資源が、先進国のように活用できるわけではありませんし、もともと物的資源の貧しい状況下、しかも異文化の中で、資源としての人が誰で、資源としての物がどういうものか、それがどこで、どのように入手できるのか、という

ことが、すぐにはよくわかりません。わかったとしても、自由に資源にアクセスして活用することができるとは限りません。語学の壁も感じつつ必死に生活していると、つつい余裕をなくして、貴重な資源を見過ごしてしまうことも多いものです。

そこで、「思いがけない資源」や「途上国ならではの資源」、異文化の中での活用の仕方を見落とさないように、途上国の中での資源をまず確認しておくことがとても大切な作業になります。

## 3. 資源のチェック表を作ろう

途上国の中での資源を確認するために、まず、身の回りの資源となるものを紙に書き出すなどして、活動資源を整理してみましょう。「さまざまな活動資源の例」(図表 3-1)では、代表的な資源についてそれぞれ参考事例を示して具体的に説明しています。これをもとに、赴任先の状況に照らし合わせ、資源の分類の仕方を工夫しながら「わたしの活動資源」を具体的に作成してみましょう。



書くという行為を通じた確認作業は、整理ができるだけでなく、とても力強い意識化の役目も果たします。また、活動の振り返りの材料にもなり、この作業自体がさらなる活動展開の資源蓄積になります。

途上国では、文字や文書を書くことに対する価値を共有できないことが多いですが、あきらめずに活動のプロセスを書き残し、貴重な2年間の自分自身の活動そのものも資源化してみましょう。

■ 図表 3-1 さまざまな活動資源の例

種類	内容	例
人	キーパーソン・好意的な人々	村長、宗教的指導者、教師、調整員、地域をよく知っている子供たちやそのお母さんなど地域住民
物	材料・道具	自動車、コンピューター、プリンター、ゴミ袋、OA 機器、紙芝居、空き缶(雨水を貯める貯蔵槽にリユース)、古着(お掃除用のクロスやエコバッグなどにリメイク)、廃油(石鹼にリサイクル)
金	活動資金	予算化された公的資金、各種団体の活動資金、募金 (P46 図表 3-2 参照)
事	機会	町のお祭り、「環境の日」などの環境保全にちなんだイベント、海や山など自然の中で行われる各種イベント
	場	寄合集会や町内会などの定期的な集まり
情報	形式知(知識・技術)	コンポスト、バイオマスエネルギー
	暗黙知 (文化や知恵など形式化・成文化されていないが、地域の人々に内在する価値あるものやノウハウ)	「オレンジの皮は油汚れを拭き取ってくれる」など、おばあちゃんの生活の知恵的なものから、地域の土壌の様子や地下水脈を植生で見分けたり、自然の徴候から天候や気候の変化をいち早く読み取って、種まきや収穫のタイミングをはかったりする、というような「地域の知」までいろいろ
自分	自分の特技や、性格的に特長といえる自分自身の強み	絵が得意、歌が歌える、ダンスが好き、日曜大工が得意

## 4. それぞれの資源の特徴

「人」「物」「金」「事」など資源は何かイメージができれば、それぞれの資源の特徴をもう少し詳しくみてみましょう。

### (1) 資源としての「人」

まずは、「人」についての資源です。「キーパーソン」とはなんらかの組織やコミュニティにおける人間関係の中で、その成員の意思決定に対して特に大きな影響を及ぼしたり、よいきっかけをつくってくれたりする、文字通り「鍵となる人物」のことで、資源になる人、つまり「味方になる人」は、いったいどんな人で、どこにいて、どんな風に知り合えるでしょうか。

実は、2章で紹介した調整員やCP、地域の人々は皆、あなたにとって「資源」になり得るキーパーソンです。その中から特に環境教育の活動において、誰がキーパーソンとなるのか考えて見ましょう。

特に見逃しがちなのが、寺院や教会など、地域の人々の信仰の対象や、心の拠り所になっているところです。日本人の多くが初詣に神社へ行き、結婚式は教会、お宮参りは神社、告別式はお寺というように、諸宗教に対して寛容で、宗教を文化としてとらえる傾向が強いように思われます。一方で、特定の宗教をもつ人々にとって、信仰とは時として生きる意味そのものであり、何よりも大切な心の拠り所です。そこで例えば、寺院や教会が、地域コミュニティにとってどのような大きな存在と

なっているのか、そこでの組織はどのようになっているか、そこにグループ活動などはあるのか、といったことを、相手にとって失礼にならない範囲で調べ、そのグループリーダー的な存在が誰か探してみましょう。

また、「主」「長」のつく偉い人だけがキーパーソンにはあらず、ということも覚えておきたいことのひとつです。最終的に資源となる人とは、活動の理念やビジョンに賛同し、実現への道のりの労苦をわかちあってくれる人です。ひとりではできないことも、仲間と助け合って取り組んでみましょう。

### (2) 「もったいない」のココロで見える、身のまわりの使える「もの」

環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したケニア人女性、ワンガリ・マータイさん。マータイさんが、1977年から始めたグリーンベルト運動は、植林を通じて貧困からの脱却、女性の地位向上、ケニア社会の民主化に大きく寄与しています。そのマータイさんが、2005年の来日の際に感銘を受けたのが「もったいない」という日本語だったといいます。

マータイさんは、「もったいない」という日本語は、Reduce(ゴミ削減)・Reuse(再利用)・Recycle(再資源化)という3Rの環境活動をたった一言で表せるだけでなく、かけがえのない地球資源に対するRespect(尊敬の念)が込められている美

しい言葉であると、世界共通語「MOTTAINAI」として広めることを提唱しました。その後の愛知万博「愛・地球博」でも、当時の首相が開会式のあいさつで「もったいない」という言葉を紹介し、環境省の環境白書・循環型社会白書にもこの言葉が登場するなど、「もったいない」は全国的な盛り上がりを見せました。

この日本人が持つ「もったいない」精神は、途上国で物的資源も活動資金も限られているボランティア活動の中で、きっと生きてくることでしょう。そして、最近では、Reduce・Reuse・Recycle の 3 つだけでなく、たくさんの「R」が表現されるようになってきました。私達の資源消費に対する考え方を Re-think(再考)したり、その場に合わせて Remake(作り変え)、Refine(性能向上)したりするなど、「もったいない」と「R」をヒントにいろいろな資源の活用方法を考えてみましょう。また、不要なもの、必要なものをパートナー交換したり、提供してもらえるようお願いしたりするなど、新製品を購入する前に、まず身の回りのチェックと行動が大切です。

### (3) 資金を集めるにはどうする？

さまざまな道具などの物的資源や、協力者などの人的資源に恵まれても、活動によっては資金が必要になってきます。しかし、インフラも整っていない途上国では、環境関連分野の予算の優先順位が低くならざるをえないのが現状です。

しかし、予算が乏しくても、予算以外の資金を得るチャンスもあります。資金源にはどのようなものがあるのか、まず種別別に整理して地域の現状を調べてみましょう(図表 3-2)。そして、ダメもとでも資金集めの様々な方策を試してしてみましょう。

例えば、かの有名なマザー・テレサは、資金集めのアイデアにとっても長けた人だったと言われています。ある時、ローマ法王パウロ 6 世がインドを訪れた際、インド滞在中にとアメリカの大富豪が最高級車を献上しました。そしてパウロ 6 世は、インドを去るときこの車をマザー・テレサにプレゼントしました。そこで、彼女は、これを賞品にした「チャリティ宝くじ」を売り出し、あっという間に車の値段の何倍もの金額を集め、ハンセン病患者のための「平和の村」作りの資金としたそうです(沖 2010)。

皆さんの先輩ボランティアの中にも、ただ「寄付をして下さい！」といってもなかなかお金が集まらないため、宝くじやディナーパーティーなど、お金を払う側が楽しめるような仕組みを作ることで、活動資金を得た人達もいます(但し、国によって宝くじが法律に触れることもあるので事前に調べましょう)。みなさんも資金がないからとすぐ諦めず、様々な工夫を凝らして活動資金を集めてみましょう。

■ 表 3-2 資金源の種類と例・工夫ポイント

資金源	例・工夫ポイント
予算化された公的資金	市役所の環境局等、行政機関における環境問題改善・環境教育推進などに関する活動予算、ボランティアの現地業務費など。
各種団体の活動資金	学校などの活動費、企業の CSR への取組の一環など民間企業の資金、NGO などからの活動支援金、教会や修道会など慈善団体からの寄付など。
競争的資金	国際機関や研究所、民間企業などさまざまな機関・組織・団体によるプロジェクトへの資金提供などの公募への応募など。
募金	様々な組織や個人に呼びかけての募金。資金集めだけでなく、国際理解教育のツールとして、現地の様子をニュースターにして伝えるなど、そのほかの活動と連携させながら試してみる。
その他	その他、フェアトレードやビジネスを通じた資金調達など。

#### 4) 機会があなたを待っている

##### — お祭り・集会を利用せよ

活動に使えるものという視点で見ると、地域のお祭りや集会をはじめ人々が集う「機会」や「場」には、活動の展開への大きな可能性が秘められています。ぜひ、地域の集会やお祭り、冠婚葬祭などに積極的に参加してみましょう。

直接自分の活動内容に関わらないテーマの集いであっても、人々が集まる場で人々のやり方を見ることで、その地域の文化をより深く知ることができます。寄合集会のとき、男性と女性は分かれて座るか、女性も積極的に意見を発言しているかといった関与の仕方、その地域のジェンダ―格差を垣間見ることもできますし、中心的な人物が誰かわかることもあり

ます。

お祭りは、地域の人々が共に収穫の豊穰を祈ったり、豊作を感謝したりすることを通じて、人々の連帯感を高め、絆を強くするといった働きもあります。冠婚葬祭では、人々と一緒に笑い、一緒に泣いて、気持ちをわかちあってみてください。役に立てることが何もなくよいのです。ただその場を共有して、地域の人々と「喜怒哀楽」をわかちあうことであなたも地域にだんだん馴染んでいくはずですよ。

また、積極的に自ら何かの「機会」や「場」を企画してつくってみることにチャレンジしたいものです。取り掛かりは環境教育でなくても、日本文化紹介の集いでも構いません。人が集まってくれないこと

があってもあきらめず、そういった経験を  
通じて、この地域の人々はどんな事、ど  
んなアプローチで興味関心が喚起される  
のか探ってみましょう。

### (5) 地域におけるさまざまな価値

地域の人々にとって大切なことが何か  
を知るのには、異文化理解だけでなく、環境  
教育の波及効果を高める上でも大変重  
要です。環境教育によって、たとえば 3R  
の知識やゴミの分別について知識を得れ  
ば、環境を保全する行動が促進されるか  
い、必ずしもそうだとは言えないことは、  
先進国でもしばしば議論されるところで  
す。

なぜでしょう？ それは、人は決して知  
識や理論だけで動く生き物ではないから  
です。頭の納得とココロの納得の両方が  
必要です。ココロが納得するには、環境  
保全に役立つ行動が自分自身にとってど  
んな意味があるか、言い換えれば自分  
にとってのインセンティブを理解し、それを

将来世代ではなく今ここで生きている自  
分が味わえることが重要な要因になっ  
てきます。

インセンティブは、経済的価値などの目  
に見えるものだけでなく、その人に内発的  
な行動を喚起させる価値意識や倫理観、  
モラルなど目に見えないものがあります。  
ココロの納得、その人が何に価値を置い  
ているかは、経済的貧困からやむを得ず  
時間を費やす作業は別として、何に時間  
や労力を費やすかによく表れます。これら  
を把握するために、まず、1年の「地域行  
事のカレンダー」をつくるなど、地域の暦  
を十分に把握し、人々がこの地域で、学  
校や職場をお休みにしてまで行う祭事や  
行事、その祭事が何を祝いしてのもの  
なのか、何を記念しているのかといった事  
を把握するのも重要です。それらは、この  
地域の人々にとっての自然観や環境思  
想の源流とあいまって人々の行動を内面  
から動かすものだからです。



千載一遇

滅多に訪れそうもないよい機会。二度と来ないかもしれないほど恵まれた状態。



## (6) 自分の可能性を解き放て —自分の強みを再認識しよう

最後に、意外な盲点となりがちなのが、「内なる資源」。いつでも無尽蔵にある資源が、自分自身に内在しています。夢や志を持ち続けることも大きな資源です。そして、活動においてももう一つの「内なる資源」の視点は、自分の得意なことや好きなことなど、「セールスポイント」です。「好きこそもの上手なれ」ということわざがあるように、自分の好きな分野では大きな力を発揮することができます。そして何よりも、自分が好きなことをやっているとき、自分のココロは喜びでいっぱい！ そんなココロの状態は、相手のココロも理屈抜きに喜びで満たす力があるのです。

ぜひ、自分の好きなことを活動に生かしてください。もし、歌が好きなら、伝えたいことを歌に乗せたり、絵を描くことが得意なら、絵画ポスターなど絵の環境教育

教材をつくってみたり、工作が得意なら子どもたちが思わずゴミを捨てたくなるようなダストボックスをつくってみたりしてみましょう。他にも、地域の人たちと得意技の大会を開いて活動を展開するきっかけづくりをするなど、積極的に自分の強みを活動に生かしましょう。

また、先輩ボランティアが残してくれた活動や教材、既に地域で行われている活動の中には、実にすばらしいものがたくさんあります。一から自分ですべてをやろうとする必要はありません。もし自分がその配属先の初代のボランティアでなければ、まずは先輩の足跡をたどり、先輩ボランティアの仕事のよいところをぜひ受け継ぎつつ、自分の得意技も加え、その時々々の状況に応じて活動を継続発展させていくことも大切です。



得意の音楽を活かした環境ソングで啓発活動を実施。  
吉岡幹人隊員(ネパール・H20年度派遣)

## BOX 4 環境教育隊員の活動報告書にみられる多様なキーパーソン

東京都市大学の佐藤真久研究室では、1999年から2007年の環境教育隊員61名の活動報告書の文章分析(第1号～第5号報告書)を行いました。本分析から、ボランティアの活動の成功をもたらす要因(貢献要因)として、赴任国におけるキーパーソン(以下、補完的エージェント)の属性と役割・機能、時系列に基づく出現頻度に特徴があることが明らかになりました。

ボランティアの活動における補完的エージェント(99名)の抽出と時系列変化においては、外的な関わりを持つ地域住民、学校・教師、NGO、青年が計65%を占める一方、内的な関わりを持つ、配属先職員、配属先組織・上司、配属先同僚が計35%を占めました。さらに、補完的エージェントの出現数とプロジェクトの貢献要因の出現数を時系列でみると、任期後半に双方の増加(正の相関)がみられています。このように、補完的エージェントの存在が、隊員活動の成功に

大きな影響をもたらしていると言えます。

環境教育活動における成功には、活動目的に適した補完的エージェントの獲得が重要であるといえます。配属先組織の関係者のみならず、地域住民や外部関係者とのコミュニケーションと信頼獲得が、環境教育活動の成功を支える大きな要因であると言えるでしょう。このことは、途上国における環境教育活動は隊員一人で行うものではなく、様々な関係者との信頼関係のもとでの連携・協力による実践であることを意味しています。隊員一人で環境教育活動をするのではなく、多くの関係者を巻き込み実践することが成功の鍵となるでしょう。本研究結果は、「JOCV 環境教育関連プロジェクト阻害・貢献要因シミュレーション教材」として出版され、現在では、環境教育隊員の技術補完研修などにおいて活用されています。

佐藤真久

東京都市大学准教授



図：環境教育隊員の活動報告書の分析研究成果による「阻害・貢献要因シミュレーション教材」と、教材を活用して多様なキーパーソンの出現等の学びを深める技術補完研修の実施風景

## 2. 活動計画を立てよう

それでは、いよいよ計画を立てて活動開始です。活動は一人でもできますが、ぜひ活動目標を地域の人々と共有し、プロジェクト型の活動に挑戦してみましょう。全員の意見が合わなくて苦労することも多いかもしれませんが、皆で取り組みば1+1=3以上の成果が期待できるだけでなく、共通の課題で苦楽を共にする中で深まる人と人との絆は格別のもです。たとえ目に見える成果が出なかったとしても、取り組みのプロセスの中での人々との信頼関係の構築は、国際協力の原点や喜びを感じさせてくれるはずです。

### 1. PCM と PDM

さて、実際に何かの活動を行うために、または、プロジェクトを立ち上げて活動計画を練って実際に活動を行うために、プロジェクトを管理していくための方法について少し学んでみましょう。

JICA では、主に技術協力の分野でのプロジェクトの推進にあたり、「PCM (Project Cycle Management)」という手法を用いています。PCM とはプロジェクトの計画・実施・評価を「PDM (Project Design Matrix)」というプロジェクト概念表を通じて一貫して運営・管理する手法です。これは技術協力の分野で比較的大規模なプロジェクト推進の手法のひとつで、

必ずしもボランティアの2年間の活動で使うわけではありません。

しかし、国際協力の場面で海外に出たならば、しばしば耳にするこの言葉。JICA だけではなく、多くの国際機関などでもプロジェクト手法としてPCMを用いていることが多く、さまざまな国際協力の場面での会話にPCMやPDMという言葉が出てきます。現地での活動では、国内外のNGOや国際機関のプロジェクトと一緒に連携した取り組みを行うような場面が生じることもありますので、これらの用語がプロジェクトにかかわるものだということを頭の片隅に置いておくとよいでしょう。

### 2. PDCA

ここで、ぜひ学んでいただきたいのは、「PDCA」です。PDCAとは、組織目標やプロジェクト型の活動をよりよいものにしていくための、いわゆる「チェックツール」です。P:Plan(企画)を、D:Do(実施)し、一定の基準に従ってC:Check(評価)し、それを再びA:Actionに反映する(フィードバック)の4ステップのサイクルからなっています(図表3-3)。

PDCA は、改善改革のサイクルのツールとして、国際的な取り組み、国家政策から草の根活動まで、さまざまなジャンルや場面で広く使われています。PCM や PDM でもこの「PDCA」が活用されています。

### 3. プロジェクトの企画・立案・計画

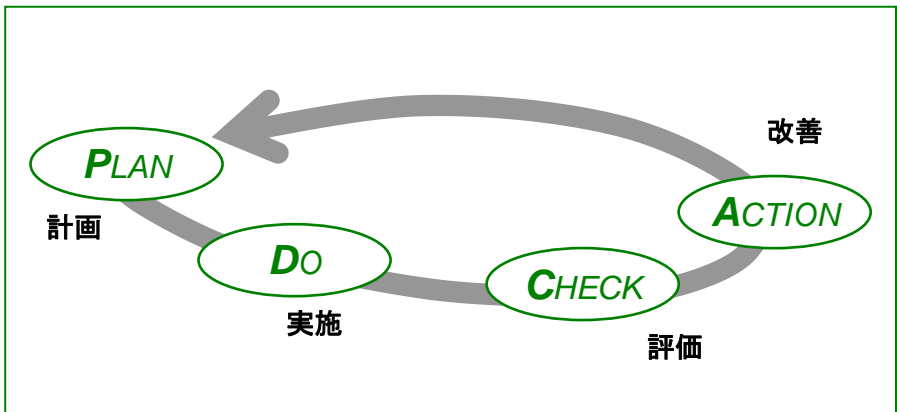
JICA では、配属先でのボランティア活動に関する「活動報告書」を 2 年の派遣期間の間に 5 回提出することをルールとしています。この「活動報告書」の提出は、①ボランティア自身が自己の活動の管理及び評価を行う ②事業関係者が情報を共有する ③情報を広く国民へ開示する、という 3 つの目的を持っています。

赴任後 6 か月目、第 2 回目の活動報告の際には所定の「活動計画書」を提出します。これには配属先における目標、ボ

ランティア活動目標の設定などを記入する仕組みになっていますので、ぜひその機会に、実際に活動を開始すべくプロジェクトを企画して、活動計画を立ててみてください。そして、赴任後 12ヶ月と 18ヶ月に提出する 3号、4号報告書の際に作成する「活動状況表」でそれまでの活動の評価(Check)を行い、必要に応じて計画の修正(Action)を行いましょ。最後の 5号報告書の「活動結果表」では、2年間の活動の評価を行います。

さて、将来こうあるべきだという考えや、こうしたいといった願いや思いなど、心の中にプロジェクトのゴールのイメージが描けたら、そのビジョンをコンセプトに落とししてみましょう。これが「企画」の第一歩です。

■ 図表 3-3 PDCA サイクル



「コンセプト」は、心に描いたビジョンを他の人々と共有するために、共通言語で表現したものをいいます。つまり、言葉だけでなく共通言語としての数字や、ビジュアルなども駆使し、プロジェクト目標が達成された状態を具体的に表現したものがコンセプトです。

コンセプトを具体化していく段階で留意すべき点は、客観性です。次ページでプロジェクトの評価基準を参考として紹介していますが、コンセプトが実現することでこれらの基準が満たされるかどうか、特に環境教育プロジェクトにおける2つの評価基準について検討してみましょう。

コンセプトが具体的に表現できたら、次は、それをどのようなアプローチで、どのようなタイムスケジュールで達成するのかを具体化する段階です。企画コンセプトのこうした具体化を「立案」、あるいは、「立案計画」といいます。

立案段階では主に、プロジェクト目標達成のためにどのような資源や手段を使って、どのようなアプローチを採るのかといった計画を行います。資源やアプローチの各ステップに時間的な資源を割り当てていく、目標達成の日までの行程表(ロードマップ)づくりです。もちろん、コンセプトを描いて企画・立案・計画したものが、その達成までロードマップ通りに進むわけではありません。途中で道に迷うこともあれば、思いもよぬハプニングによって、迂回や新たな経路設計を余儀なくされることもあり、そもそもコンセプト自体を修正する必要が生じることもあるでしょう。

このように、PDCA サイクルでたびたび計画修正を行い、地域の人々を巻き込みながら、プロジェクト参加者がみな参画意識と主体者意識をもってかかわれるよう合意形成を重んじ、結果よりもプロセスを大切に進んでいきましょう。



#### 4. プロジェクトの評価基準

何かの活動目標を立ててプロジェクトを立ち上げるとしたら、やはり効果的、効率的によりよい結果を出したいもの。プロジェクトを改善改革するツールとしての Plan(企画)、Do(実施)、Check(評価)、Action(フィードバック)の4ステップのサイクルを具体的に回していくとき、重要となるのが、「プロジェクトの評価基準」です。評価基準があいまいだと、課題を共有し、

プロジェクトを改善改革する方向がブレたりすることがあるからです。

JICA の『事業評価ガイドライン』では、評価基準として「評価5項目」を設けています(図表3-4)。この評価基準は、一般的なプロジェクトのもので、環境教育のプロジェクトにおいては、さらに追加すべき「学びの評価2項目」があることに留意しましょう。

■ 図表3-4 プロジェクトにおける5つの評価基準(DAC評価5項目)

妥当性 Relevance	プロジェクトの目標は、受益者のニーズと合致しているか、問題や課題の解決策としてプロジェクトのアプローチは適切か、相手国の政策や日本の援助政策との整合性はあるか等の正当性や必要性を問う
有効性 Effectiveness	プロジェクトの実施によって、プロジェクトの目標が達成され、受益者や対象社会に便益がもたらされているか等を問う。
効率性 Efficiency	プロジェクトの投入と成果の関係に着目し、投入した資源が効果的に活用されているか等を問う。
インパクト Impact	プロジェクトの実施によってもたらされる、長期的な効果、波及効果、上位目標の達成度合い等を問う。
自立発展性 Sustainability	プロジェクトで発現した効果が、協力終了後においても持続し発展しているかを問う。

出典：JICA 「JICA の評価制度とは」

■ 図表3-5 環境教育プロジェクトにおいて追加すべき2つの評価基準

受益者の満足度 Beneficiaries' Satisfaction	オーナーシップ・効力感・学習の深化
住民巻き込み度 Participatory Process	ジェンダー・マイノリティー・意思決定への配慮・社会形成

佐藤真久作成

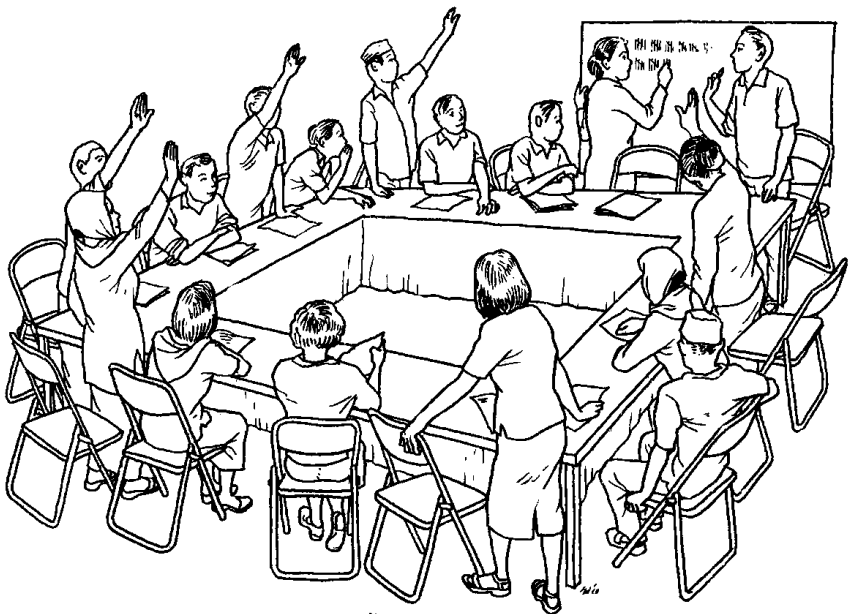
これら一般のプロジェクトにおける評価基準 5 項目と、環境教育において追加すべき評価基準 2 項目は、それぞれの評価基準の性質に注目すると、前者は「プロジェクトそのものの評価」であり、後者は「プロジェクトによる学びの評価」であると言えます。一つめの、プロジェクトそのものの評価とは、「評価 5 項目」に代表されるように、プロジェクトがどのように展開され、いかに効果的に持続発展させられたかといったことに基づきます。

一方、「プロジェクトによる学びの評価」とは、プロジェクトに直接かかわった人々はもちろんのこと、間接的にかかわった人々も含めて、当該プロジェクトが個人々にどのような学びをもたらし、それぞれの

資質能力をいかに向上させたのかということに基づく評価の側面です。

私たちの活動が特に環境教育のプロジェクトであることをふまえると、とりわけこの「プロジェクトによる学びの評価」に配慮することは重要で、そのために「受益者の満足度」、「地域住民の巻き込み度」という2つの評価の視点が重要になってくるのです。「受益者の満足度」も「地域住民の巻き込み度」も、環境教育プロジェクトによる人々の内発的な側面にかかるからです。

なぜ、とりわけ環境教育のプロジェクトでこの視点が重要なのか、環境教育の歴史をふりかえってお話ししましょう。



1977年のトビリシ会議で、環境教育の目的は認識（Awareness）、知識（Knowledge）、態度（Attitude）、技能（Skills）、参加（Participation）という5つに整理され、これらは現在でも環境教育の指針とされています。そして、現在に至るまで、これらをもつ環境教育の実践が行われ、環境教育の歴史的進展とともに、その実践のあり方や学びのプロセスは、次第に変化してきました（佐藤2010）。1970年代半ばから90年代半ばまでは、有識者や研究者、教師などが学習者に対して一般的な知識を移転する「知識移転型」の教育アプローチが主流でした。しかし、このアプローチは環境問題の改善に重要な役割を担う一方で、地域固有の様々な状況や社会的な文脈を反映させることができません。そこで、フィールドでの体験学習が重要視されるようになってきたのです。このアプローチにおいて教師は知を移転するのではなく、フィールド体験のオーガナイザーの役割を担うこととなります。さらに近年の環境教育では、環境改善に向け共同行動と参加を通して、集団的に新しい知を獲得・構築していこうという参加型・対話型アプローチが注目されるようになっていきます（佐藤前掲書）。

これらのアプローチは、純粋にどれか一つを採用できるものではありませんが、プロジェクトにかかわっている人々全員が、オーナーシップ感や効力感を抱くことがで

きているか、学習の深化が起こっているか、そして当事者だけでなく、より広くより多くの地域住民を参加に導いているか、あるいは対話が行われているかといったことが、活動における学びの指標であり大切な基準となってきます。

## 5. 環境教育プロジェクトで重視される評価基準「学びの2項目」

環境教育プロジェクトにおいて、「プロジェクトそのものの評価」のみならず、「プロジェクトによる学びの評価」が重視される所以についてお話ししましたが、実際に、「プロジェクトによる学びの評価」を行うのは難しいものです。そこで、「受益者の満足度」と「地域住民の巻き込み度」という2つの具体的な評価項目を目安に考えてみましょう。

「受益者の満足度」には、さらにキーワードとして、「オーナーシップ」「効力感」「学習の深化」などがあげられます。「オーナーシップ」とは、プロジェクトにかかわる人々全員が、主体者意識を持ち、自分たち自身のこととして取組んでいるかどうかということです。そして、自分自身が活動に関わることで、よい結果・効果をもたらされているのだという認識があるかどうか「効力感」であり、環境という刻々と変化しつづけるものに対し、対策や取り組みをその時々状況に適應させたり、応用したりしながら学びを深めていく過程が形成されていくかどうかということが「学



習の深化」です。

もう一方の「地域住民の巻き込み度」をはかる際には、キーワードとして、「ジェンダー」「マイノリティー」「意思決定への配慮」「社会形成」などがあげられます。これは、途上国の環境問題において、自然科学にもとづく問題解決型の教育実践だけでなく、個人や集団のエンパワーメントと社会変革を意識した、より人間開発の色彩が強い教育実践が必要とされているからです。

近視眼的で外発的な開発の影で、グローバル化の恩恵から排除された社会的弱者の貧困はますます拡大する一方です。そして、それこそが、途上国の環境問題の原因の一つとして横たわっているということをふまえ、いかに、「ジェンダー」「マイノリティー」といった社会的弱者を取り込み、活動に巻き込んでエンパワーメントしていけるかが、根本的な意味での地域の環境問題解決を促すことにつながるからです。

## 6. プロセス志向による環境教育プロジェクトのクオリティアップ

このようなプロジェクトの評価として学びの側面を考慮することの意味は、プロジェクトそのものの評価に比して、結果よりもプロセスを重視しているところにあります。

本章第1節で、環境教育による知識の習得が、必ずしもその後の環境保全行動

の促進につながるるとは言い切れないという近年の議論について触れていますが、結果とプロセスを考えた時、そのプロジェクトがどんなにより結果を出したとしても、そのプロセスで内発的な意識変化を伴わないものであったなら、その先、外発的な力が働かないかぎり、自発的な環境保全への取り組みとなっていくことはないでしょう。逆に、たとえプロジェクトが期待した結果に終わらなかったとしても、プロセスの中で人々の絆が深まったり、プロジェクト型で取り組む事の喜びや意義を人々が感じとったりすることができたなら、それは次なる協働的な取り組みの素晴らしい結果につながるココロの土壌が大きく耕されたと言えることも多いのではないのでしょうか。

環境問題への取り組みは、終わりのない協働活動を必要とします。また、一つの活動による環境改善が可視化できるようになるまでに、比較的時間を要するもの、環境教育分野の特徴です。

「受益者の満足度」と「地域住民の巻き込み度」といった側面を、評価基準として意識することで、現時点での結果を可視化できることだけでなく、長期的な展望で真の効果とは何かを考えることを促すことができます。また、この2つの側面によって、不可視でも確かに効果と言えることや、見えにくいけれど環境問題の解決には不可欠で重要なことが見えやすくなります。さらに、これらの視点をよりよく生かすた

めの地域での有効な仕組みやあり方が  
見付きやすくなってきます。このことは、  
環境問題のアプローチが、知識移転型か  
ら体験重視の参加型・対話型に重点が置  
かれるようになってきたことや、学びや資  
質能力の向上が、内発性に支えられてい  
ることの所為でもあります。つまり、環境  
教育プロジェクトにおいて、学びの側面を  
重視した評価基準を持つことは、有効性  
や効率性、自立発展性など、プロジェクト  
そのものの評価を高めるための、いわば  
基礎固めにもなっているのです。

## 7. エンパワメント

「エンパワメント」という言葉は、日本  
でも途上国の活動でも、さまざまな場面で  
登場します。辞書によると、エンパワメ  
ント(Empowerment)は、「権限を与える

こと、能力・実力をつけること」(小学館  
2001)とあります。途上国の開発の文脈  
では、もともとは、貧困者・社会的弱者に  
対する「力の付与」という意味合いで使わ  
れる言葉です。

しかし、例えば、カウンターパートに、  
Excel などの PC ソフトの操作を教えると  
いった能力開発も、広義でのエンパワ  
メントにあたります。また、ミーティングの  
記録をとる習慣がなかった配属先で、文  
書管理の仕組みやルールをつくることも  
カウンターパートや同僚のエンパワ  
メントにつながっています。このように、実  
際には、エンパワメントという言葉は、さ  
まざまな文脈で、幅広い意味で使われてい  
ます。



同様の意味合いを示すものとして、「キャパシティ・ビルディング」や「キャパシティ・ディベロップメント」という言葉があり、これらもよく使われる言葉です。JICA では、「キャパシティ・ビルディング」とは、主に組織や個人の能力向上をいうのに対し、「キャパシティ・ディベロップメント」は、それらに加えて制度や政策の整備、社会システムの改善などまでを広く対象に含めて、「途上国の課題対処能力が、個人、組織、社会などの複数のレベルの総体として向上していくプロセス」としています（JICA 2006）。

以上、活動を始めるにあたってのいろいろな基礎知識や言葉を紹介してきましたが、こうした基礎知識は、形式的に共有できるいわば最大公約数的な枠組みであって、わたしたちが実際に現場で直面する状況の中で、そのまま適用・活用できないことも少なくありません。

しかし、形式知としてのフレームワークを学ぶことによって、その場その場で新たに発生するさまざまな状況の真ただ中でも「漂流」することなく、その状況をプロジェクトの中で整理統合し、全体的なビジョンと部分的な物事との関係性や、さらにはその中で自分の立ち位置や役割を明確化することができるでしょう。

## 8. プロジェクトの運営（仕組みとルールづくりと留意点）

プロジェクトのビジョン・コンセプト・目標

達成への行程表などができたら、プロジェクト運営の仕組みを考えましょう。まず、必ず必要となるのが、プロジェクトのサイクルを共有・推進し、時には修正していく場としてのプロジェクト委員会です。プロジェクト委員会というと、オフィシャルな大きな組織をイメージするかもしれませんが、草の根の小さな活動であっても、規模の大小に関係なく、協働的な取り組みすべてがプロジェクトです。少人数でもぜひ委員会を立ち上げてみてください。

委員会のメンバー構成や役割分担、運営方針も含めてプロジェクトの仕組みのあり方を考えるポイントは、「コンセプトとのマッチング」です。

一般的な組織論ではなく、その地域の実情をふまえた上で、このコンセプトをその状況下で具現化していくために必要なカタチと方策を考えていきましょう。そして、プロジェクト運営の原則は「公平性」と「透明性」です。理想的には、みんなで一緒にルールを決めていきたいものですが、あくまでもこれは原則であり、地域の状況や文化によっては、「公平性」や「透明性」は、かえって活動の阻害要因になってしまう場合も少なくありません。まずは、このプロセスで、プロジェクトに関わる人々には誰がいるか？ その特徴や抱えている問題は何か？ といった関係者分析や、問題の原因や深刻度、問題同士の関係はどういったものか？ といった問題分析を、あせらずゆっくり行ってみることが大

切です。また、いったん決めたルールでも、何らかの状況が変わったとき、それらのルールが合わなくなっていたら、再び新たなルールをつくる必要があるでしょう。

また、プロジェクトの運営のプロセスで、ぜひ留意しておかなければならないことがあります。それは、特に先述の2つの学びの評価基準を満たし、人々の内発性、内面的満足感を維持するための工夫と努力を惜しんではいけないということです。オーナーシップを高めるためには、地域の人々が一つ一つ納得して次に進んでいくスピードと、自分のそれとは大きな隔たりがあるであろうことを心に留めて、彼らの速度で、彼らのやり方で、彼らにとっての価値ある方法で進むことをバックアップ

するような気持ちを持つことが大切です。それには大きな忍耐を伴うこともしばしばですが、自分が主役というよりも、彼ら自身のやる気や能力を引き出す係りだという意識で取り組みましょう。効力感を維持するためには、具体的にどのように効果が得られたのかを可視化する、つまり「効果の見える化」に配慮していく必要があります。

さらに、取り組みの試行錯誤や失敗も成功もできるかぎり記録に残しておきましょう。どんなことがうまくいって成功に結びついたのか、あるいは、どんな失敗があったのかなど、活動の軌跡は、自分だけでなくその後のボランティアへの貴重な資源づくりです。



**BOX 5****経済開発から環境保全へ  
—プロジェクトによる豊かさのスパイラル**

1991年、インドはグジャラート州、ダングス県の先住民族のある小さな村に、1台の小さな灌漑ポンプが設置され、「参加型灌漑プロジェクト」がスタートしました。このプロジェクトは、地元の教育支援団体によって行われたもので、極度の経済的貧困状態にあるために、教育支援を行っても学校に来ることができない村人たちのための飢餓救済策でした。厳しい自然環境の中で、乾季には収穫物がなく、1日1枚のチャパティと1本のチリで凌ぐという日めずらしくない状態だったのです。

ポンプ設置から2年目、初めて二毛作が実現し、乾季の収穫で飢餓から救われ、子どもたちが学校に通えるようになりました。次第に人々の意識は大きく変化し始め、徐々に始めた経済的余力によって乳牛を飼育し、新たに「ミルク・プロジェクト」がスタート。地域の牛乳協同組合を通じてミルク販売を行い、副収入の道を拓きました。採取したミルクは村人たちも飲んで栄養状態も改善され、子どもたちの学校での集中力が増して、学力も向上したそうです。また、ミルク販売にあたって署名や簡単な計算が必要になることから、自主的に読み書きを学び始め、瞬く間に村の成人識字率が向上。かつては経済的貧困に対して無抵抗に見えた村人たちは、こうして自分たちで生活を変えられるということを体験し、商業作物の栽培に

も取り組むなど人生の豊かさへの希望を持ち始めています。

そして、もともと環境教育が目的のプロジェクトではなかったにもかかわらず、もっと経済的に豊かになりたいという思いから、経費節約のために高価な化学肥料の購入をやめて、乳牛の牛糞を利用して天然肥料を作る方法や、バイオマスガスを利用する方法などを学び、さまざまな環境保全につながる取り組みが村人の中からどんどん広がっています。さらに、かつてこの村では、子どもは労働力であり多産が望ましいと考えられていましたが、今では子どもは多くなくても教育を受けさせたほうがよいと考えるようになり、近隣の村々に比べて一世帯当たりの子どもの数が減少してきたそうです。

途上国の経済的貧困問題と環境問題はともに人口増加の問題と絡み合っていると指摘されていますが、貧困救済から、生活改善、教育水準の向上、環境保全につながる行動、出生率の減少など、この村の一連のプロセスは、国際協力のアプローチに多くの示唆を与えてくれます。現在、この村の人々は支援団体の手を借りることなく、いまま灌漑プロジェクトの運営を行っています。

吉川 まみ

東京都市大学特別研究員

※このプロジェクトの詳細は、吉川まみ(2008)参照。

## 3. 活動を進める上で心に留めておくこと

これまで、途上国ならではの資源発見のコツ、計画の立て方や PDCA サイクルなどについてお話ししました。本節では、そういったノウハウとは別に、活動を始める前に心に留めておくこと、そして実際に活動を行う上での留意点について学びましょう。

### 1. 何事にも段階がある！

#### ー対象を丁寧に見る必要性

途上国に限らず海外の国々に行くと、まず衣・食・住をはじめとする目に見える違いの大きさに驚かされます。そして次第に、人々の立ち居振る舞い方から、ものの見方、感じ方、表現の仕方まで、さまざまな違いにも気がつくようになってきます。そんな異文化の中で、価値の多様性を五感で体験できることは、大きな喜びや感動です。そして、異文化を理解するにつれて、赴任した地域が身近なものに感じられ、暮らしやすくなります。

しかし、途上国の中で環境教育のプロジェクトを行う場合には、異文化理解だけでなく、途上国が抱える問題を理解しようとする必要があります。本書第1章「途上国における環境教育」で13の配慮事項について学びましたが、環境教育プロジェクトの観点から、とりわけ心に留めておくことよい点についてもう少し詳しくお話し

たいと思います。それは、対象となる地域の人々は多かれ少なかれ、私たちのような先進国の人々よりも経済的貧困にあるということです。特に、経済的貧困問題が深刻な地域では、経済的貧困問題をかかえることが、人々の暮らしに何をもたらしているのか、どんな状態を強いる結果となっているのかということをお忘れはけません。

貧困問題というのは、何も経済的な量で測れることだけを意味するわけではありません。例えば、孤独死や自殺など先進国の社会問題は精神的貧困問題を象徴しているとしばしば指摘されています。また、文化的貧困といった言葉もあります。しかし、こうした経済的貧困と精神的貧困といった違いは広く認識されてはいるものの、先進国に暮らす私たちはどれほど経済的な貧困問題の意味を理解しているでしょうか。いま、私たちはテレビやインターネット、書物を通じてさまざまな途上国の様子を知ることができます。そして、ストリートチルドレンやスカベンジャー(ゴミの中から鉄くずなどの換金できるものを拾って生計を立てている人)などを目にすると心が痛み、なんらかの国際協力をしたいと思います。しかし、先進国の物質的に恵まれた生活の中で生きてきた私たちは、国際機関などによって示されている貧困

ラインという経済指標やデータを見ても、実際にそれが意味するのはどういうことか体験から学んでいません。まして、経済的貧困とひとことと言っても、それには実はさまざまな異なる段階があることもよくわかりません。

本章第2節で、「エンパワーメント」という言葉が、いろいろな文脈で広く使われることをお話しましたが、途上国の開発の文脈では、もともとは、貧困者・社会的弱者に対する「力の付与」という意味合いで使用されています。途上国の農村で国際

協力によって、この意味でのエンパワーメントがすすむ過程を、ある研究者が調査し、経済開発過程とそれに伴う人々の内面的な意識状態の変遷を考察したところ、このエンパワーメントのプロセスは段階的であることを指摘しています。エンパワーメントのプロセスでは、本来は段階と段階の間にははっきりとした境界線があるわけではありませんが、考え易くするために便宜上、プロセスをいくつかの特徴的な変化によって段階として捉え、5段階で示されています(図表3-6)。

■ 図表 3-6 エンパワーメントの段階的なプロセス

第1段階: 基本的ニーズレベル 「絶体絶命」 生存の危機と隣り合わせの状態	「その日暮らし」の状態、生存のための最低限度の衣食住を満たすこと以外に余裕が全くない状態。
第2段階: アクセスレベル 「現状の問題視」、生活向上への希望を初めて持ち始める状態	完全に受け入れていた貧困状態を、そもそもなぜ? これからもこの状態でいいの? と問いかけ、自分の状態を客観視する余裕が芽生えてくるレベル。
第3段階: 意識化レベル 「社会意識の萌芽」	問題への気づきが芽生え始めるとともに、問題視するようになった現状の根本的な原因を、社会の中に発見できるようになる段階。また、経済活動やサービスの利用を通じて社会的なネットワークが広がる。
第4段階: 参加レベル 「生活改善への行動力アップ」	目標などを意識して、積極的に社会的な活動に参加できるようになる。
第5段階: コントロールレベル 「積極的な取り組みの開始」	さまざまな面でのエンパワーメントが進み、生活向上や活動推進など、前向きな取組ができるようになる。
最終段階: トランスフォーメーション (相互変容) 「スクラップ&ビルド」	かつてパワーを握っていた人々と、社会的弱者との間の力関係など、社会構造やさまざまな関係性に変化が生じる段階。

出典: 久木田(1998)をもとに筆者まとめ

ここからわかるのは、経済的貧困には、いつも飢餓に直面している生存ギリギリの状態から、最低限食べて生きていくことはできるけれど、とても教育を受ける余裕はない状態、などさまざまな状態があるということです。大切なことは、そういった段階によって、人々の心の状態や生きる意欲や希望など内発的な精神状態も異なるばかりか、自由に使える時間の長さや、自由な時間に何をするか、何をしたいか、何が一番必要なのかといった優先順位も異なるのだということです。

## 2. 最優先課題を考えてみる必要性

かつて国際協力において、協力対象となる地域の経済的貧困状態がどのような段階にあるかということが、きめ細かく考慮されることはありませんでした。しかし段階的にプロセスを捉え、最優先でエンパワーメントすべきことは何か、必要としていることは何かを丁寧に見ていくことで、私たちの活動はより役立つようになるでしょう。経済的貧困問題といってもその段階はさまざまで、水、食料、身体を覆う衣服、雨風・寒暑をしのぐ場など、人間が生存するために最低限必要なものにも事欠く状態である人々に対して、人間にとって最も大切なものは教育だからと識字教育を行ったり、教科書を提供したりしても、かえって人々に多くの負担を強いる結果になってしまうこともあるのです。

仕事を持っていたとしても 1 日の労働

報酬をその日のうちに受取って、その日に自分と家族が食べるお米に換えなければ、たちまち飢えてしまう人々は大勢います。蓄えがないために、たった 1 日も仕事を休むこともできません。このような「貧困のスパイラル」が「その日暮らし」を強いられるという状態です。貯蓄がないために、将来このスパイラルを断ち切るための時間や物資や資金を投資することや、その実りを待つだけの余裕がないというのが「その日暮らし」の意味です。そして、この状態にあるとき、多くが貧しさを完全に受入れてしまい、何かを変えていこうという意欲や意志、希望を抱くといった心の力を失くしているということも、「貧困のスパイラル」の段階にある人々に特徴的な問題なのです。

## 3. 「一石二鳥」の活動もある！

もしも、赴任した地域がこのような状態の地域であれば、そこでプロジェクトを立ち上げて参加を呼び掛けるというのは、地域の人々にとってとても酷なことです。その日に家族が食べるための労働の時間を奪うことになるからです。農作業の手を休めることができずにプロジェクトに参加できないことはしばしばです。まずは何よりも、その日 1 日の生活の糧を得る時間を尊重しなければなりません。あるいは、プロジェクト活動に時間を費やしてもらうためには、その時間で本来なら手にしているはずの報酬か、あるいはそれに代



替する食糧を保証してあげなければならぬのです。

しかも、私たちのようにやる気満々で海外にやってきた、そんな心の状態ではありません。プロジェクト参加で報酬を支給できるわけではありませんし、がんばれ！と励ましたら、人々の心にやる気がわいてくるわけでもありません。たとえ彼らがいくら生業の手を休める時間的余裕を持っていたとしても、経済開発プロジェクトならまだしも環境教育プロジェクトを立ち上げてみんなで心を合わせて活動するには多くの困難を伴います。

そんなとき、何か活動せねば…と焦る前に、「一石二鳥型のプロジェクト」を考えてみてください。「生活も環境も」という同時達成型プロジェクトです。ケニアのワンガリ・マータイさんが、グリーンベルト運動で、植林すればするほどお金が稼げるような仕組みを作り、結果的に植林が進み、更に女性がお金を持ったことでジェンダー問題や紛争が解消されるというよい連鎖が起こったことは有名ですね。

もっともこのような素晴らしいノーベル賞ものの活動を行わねばならないのではありません。ただ、こうした素晴らしい事例というのは、途上国での生活体験のない私たちに、途上国の暮らしの真っ只中にある人々にとって何が最優先で大切なのか、何がインセンティブになって人々の内発的な気持ちが動くのかを示してくれています。そんなヒントを見逃してしまっ

は、それこそ「もったいない」と思いませんか？

地域の人々の生業やそのやり方を見て、まずは最優先でそれを助けたりすることを、初めにプロジェクトの中心に据えていくと、生活の助けとなるのがインセンティブとなって人々のモチベーションが上がります。

とはいえ、私たちは環境教育ボランティアです。生活の助けになる活動の中から、環境保全にもつながる接点を見つけたら、それを積極的に推進してみましょう。BOX4(P60)で紹介しているインドの事例は、まず最優先課題としての経済的な救済への取り組みから、人々の内発的な意欲の喚起、そして、経済的なインセンティブがモチベーションとなり、環境保全につながる活動が自発的に生じている点がとりわけ興味深いものです。ボランティアによる活動事例ではなく、活動年月も長いものではありませんが、この事例はグリーンベルト運動と同様に、人々が置かれた状態と優先課題を段階的に的確に捉えていった点に、いつでもどこでもどんな活動においても参考になる多くの重要なポイントを含んでいると言えるでしょう。

## BOX 6

もうひとつの活動の形  
— 原点に戻る、何のために、誰のために活動をするのか

私は、シリアへ環境教育ボランティアとして派遣されました。しかし、赴任直後は、すぐに活動が順調にいくような状況ではありませんでした。せっかく来たのに、2年間を無駄にするわけには行かないと思い、既に3ヶ月前に赴任していた環境教育ボランティア2名と共に「できること」を探して駆けずり回りました。

誰が言い出したか、毎月1回週末に首都で最もにぎわう公園で清掃活動を行うこととなりました。幼児教育ボランティアには子供の遊び、音楽ボランティアには楽器演奏をしてもらい盛大に毎月1回の清掃活動を始めました。これを基点にしながら、環境問題に取り組むNGOや清掃局を訪問したり、更には大学にある日本語学科で運営に協力してくれるボランティアを集めたりと勢力的に動き回りました。公園清掃に参加してくれる子どもたちへのプレゼントとしてグリーンバンド（ボランティアの支援経費で現地の伝統工芸品を利用）を作成し、更にはスポーツ用品会社から布の端切れを提供してもらい、シニア海外ボランティアが赴任していた裁縫学校でマイバックを作る試みも行いました。

考えつくこと全てを実施し、成功と失敗を重ねる中、「毎月1回日本人が清掃活動をしている」という噂が広がり少しずつ協力者も増えてきました。清掃活動を持続的なものにするために徐々にその運営を清掃局や日

本語学生に譲り渡していく努力を続けていると、隣の公園で清掃活動を行う団体が現れたのです。我々が始めたこの活動は今3代目の隊員も続けてくれています。

清掃活動を始めた頃に、国の青少年育成を担当する青年同盟（日本の青少年育成課のような団体）と活動することになり、そこでは日本のエコクラブ活動を模して学校での環境教育の授業を行いました。アクティビティを入れ、ふりかえりの時間を作り継続的に先生ができるような教材やシステムも作りました。ここでもアイデアを実行に移しがむしやりに活動を続け、気がつく1年が経っていました。学校で教えたことや日本での環境教育の経験の少ない私にとっては毎日が孤軍奮闘、いったいこれからどうしていこうかと悩みあぐねていました。

そんな時、明治学院大学の平山恵さんからゼミの学生とシリアの農村部で社会調査の実習をしたいが協力してもらえないか、と声がかかったのです。もともと首都とその郊外を中心に生活、活動をしていた私にとってよい機会と思い、タクシーを貸し切りシリアの村々を回りました。先生はイラクやルワンダをはじめ多くの国々で調査を行ってきており、何故農村部なのか、社会調査とは何かなど色々な話を聞く中で、自分がいかにシリアの一部だけしか見ていなかったかを思い知らされました。それからの1年は自分の希

望で所属先を環境省に移してもらい 3000 人ほどの村での社会調査を実施しました。夏には 2 週間ほどのホームステイをゼミ生達と行い、清掃活動で協力してくれていた日本語学科の学生にも一緒に寝泊りをしてもらいました。清掃活動で知り合った環境 NGO の人たちともこの村の現状をシェアするなど、1 年目につくった人間関係が生きた場面もありました。

このゼミにはいくつかモットーがあり、調査とは「プロジェクトを作るための調査ではなく住民の声を聞くためのもの」「必ずフィードバック(住民への還元)を伴うもの」「一人ではできず、また 1 回で終わらない」と何度も聞かされました。

赴任 1 年目は、私のがむしゃらに走り回り色々な試行錯誤を経て沢山の失敗をしました。清掃活動は結果的に今でも続いており、活動を通して様々な人間関係もできました。ただ 2 年目になって気になったのは、本当にシリアの人たちの声を聞いていたのかということでした。主役であるシリアの人たちの望む姿を確認しないまま、自分達が、これが正しいのでは、と思うことをやってきたのではないかと。自分達の試行は、とても小さな物だったから、恐らくネガティブなインパクトがなくてすんだが、これが人の命や健康に関わることだったら取り返しのつかないことになるのではないかと。「その土地を知らず、

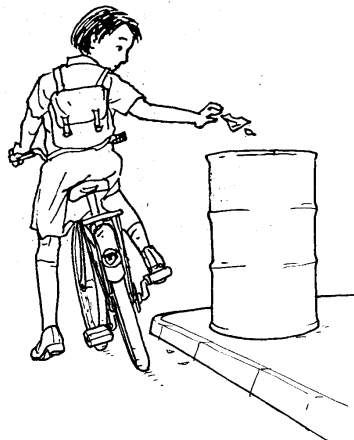
声を聞かずに自分達の思いだけで突っ走る」ことの怖さを感じました。協力隊として赴任する上で「人々のために」と思っていたにも関わらずこんなに簡単に「自己満足」の活動に傾いていたということに 2 年目の村での調査で初めて気がつきました。

私は帰国後も 3 度シリアを訪れました。明治学院大学の平山ゼミの学生は、毎年 2、3 年生がシリアを訪れフォローアップを行っています。今でも、毎年新しい発見があり、信頼関係がどんどん深まる中で、調査はやはり 1 回では終わらないと改めて感じています。

こんな活動もあっていいかなと思います。

田村 雅文

シリア・環境教育・H17 年度派遣



## NOTES

## NOTES

## 第4章 活動のツボ



**環** 境教育教材の開発や廃棄物問題の改善、学校巡回活動、イベントの企画は、多くの環境教育ボランティアが取り組む活動内容です。これらの活動においてちょっとした「ツボ」(ポイント)をおさえておくだけで、活動がスムーズにいたり、事前にトラブルを避けたりすることができます。この章で各活動のポイントをおさえて活動をどんどん盛り上げていきましょう！

# 1. 環境教育教材の開発

これまで、現地のニーズに合わせたさまざまな教材が環境教育ボランティアによって開発されてきました(図表 4-1)。また、ボランティアが開発した教材以外にも、国際プロジェクトとして展開しているものや日本国内でつくられたものなど多様な教材が開発されています。ここでは、環境教育の教材の種類、特徴、開発プロセス、普及・利用プロセス、及び配慮事項について紹介していきます。

## 1. 教材開発の準備

### (1) 環境教育教材を開発する目的

そもそも、なぜ環境教育教材を開発するのでしょうか？ 教材開発の目的には、①直面する課題と目指すべき方向性の明確化、②日常生活において活用可能な知識・技能の獲得、③日々の生活態度の振り返り、④今後の生活態度と行動に役立てること、などがあります。

さらに、地域住民と連携した教材開発は、⑤地域資源・価値の明確化と共有、⑥村落の構成員間のコミュニケーションなどにも役立つと言われています。環境教育の教材を開発する前に、まずどのような対象にどのような目的で教材開発を行うのかを明確にしましょう。

### (2) ニーズの明確化

教材開発の際には、学習者のニーズ

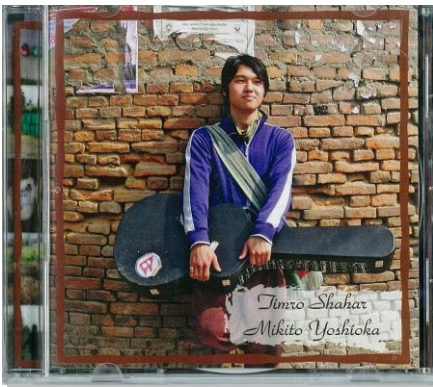
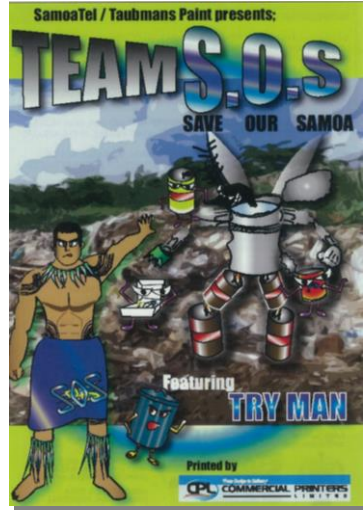
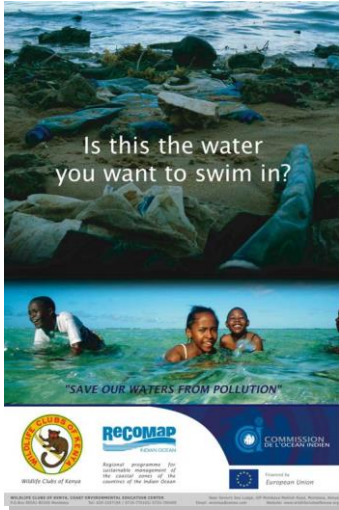
の把握することが不可欠です。そのためには、まず学習者の日常生活を知ることから始めましょう。学習者との会合は、学習ニーズをより深く理解することに役立ちます。学習者のニーズの把握に有効な手段としては、①個人・グループとの会話と質問の投げかけ(構造的・非構造的)、②個人・グループの生活現場への訪問(生活環境・条件の把握と生活課題の明確化)、③フォーカスグループ・ディスカッションや対話の機会の構築(村落のキーパーソン・ユースグループ・女性グループ・学校の教師)などがあります。

ニーズの把握は、単なる生活課題を明確にすることだけではなく、個人・集団が将来どのような生活環境を望んでいるかについても明らかにします。現状の課題改善だけでなく、個人・グループが望むよりよい生活環境にむけた創造的な学習プロセスの構築が必要とされています。

### (3) 環境教育教材の設計図 (カリキュラユニット)

目的とニーズを明確にしたら、次の段階は、教材の設計図(カリキュラユニット)づくりです。カリキュラユニットの各要素の検討を通して、より具体的で内容の充実した環境教育教材の開発を目指しましょう(図表 4-2)。

■ 図表 4-1 環境教育ボランティアにより開発された環境教育教材



- 左上： 海洋汚染の啓発ポスター(ケニア)
- 左下： ゴミ問題の啓発ソング(ネパール)
- 右上： ゴミの啓発マンガ教材(サモア)
- 右下： 家庭用コンポストのカレンダー教材(ネパール)



## ■ 図表 4-2 環境教育教材の設計図(カリキュラ・ユニット)

テーマの選択	<ul style="list-style-type: none"> <li>教材のテーマを選択する。</li> </ul>
対象者	<ul style="list-style-type: none"> <li>非識字者、新識字者、成人識字者</li> <li>初等教育段階、中等教育段階、高等教育段階</li> <li>一般市民、子どもの保護者、子どもの家庭構成員</li> <li>教職課程の学生、現職教師</li> <li>企業関係者、メディア関係者、自治体・政府関係者、NGO・社会教育関係者</li> <li>村落・地域社会の構成員(世代、ジェンダー、役割分担)</li> </ul>
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>関心(気づき)、知識、態度、技能、参加(関与)</li> </ul> <p>図表 1-5「環境教育の5つの目的」参照(P12)</p>
学習内容に基づく教材のタイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>動機づけ型教材： 学習者がテーマに対して関心を持ち、動機づけを促す教材。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加型教材： 学習者が活動への参加を通して楽しみながら、理解を深める教材。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導型教材： 課題解決にむけて明確な知識・技能を提示した教材。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>フォローアップ教材： 全体を関連づけ、付加的な情報を提供するとともに、包括的な説明と意味合いを述べる教材。</li> </ul>
学習教材のフォーマット	<ul style="list-style-type: none"> <li>文字・絵教材(例：ポスター、壁新聞、パンフレット、書籍、雑誌、フリップチャート、紙芝居、カードゲーム、すごろく、ボードゲーム、インターネット)</li> <li>フォークメディア(例：演劇、影絵、語り、パペット、歌)</li> <li>実験・観察教材</li> <li>視聴覚教材(例：DVD、VCD、ラジオ、TV、音楽、写真・スライド、Youtube)</li> </ul>
教材の内容とストーリー展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>導入部分、展開部分、振り返り・まとめ部分</li> <li>補足資料部分(例：作業シート・関連情報・定義づけ)</li> </ul> <p>※ストーリー展開が必要ない教材もあります。</p>

筆者作成

## 2. 教材の開発

### (1) 教材の選択(Selection)

環境教育の教材が必要なときに、いつもから新しい教材を作る必要はありません。任国で先輩ボランティアが作成した教材や、地域の団体や国際NGOが現地のニーズに合わせて開発した教材など、既存の教材があることが多いので、まずどのようなものがあるかを探してみましょう。既存の教材を活用するときに重要なのは、教材が対象者の学習ニーズに合ったものであるかということです。環境教育教材の開発においては、新しいものをつくるだけでなく、既存の教材の中から学習者にとって適切なものを選択し活用することも必要となります。

### (2) 教材の適合理化(Adaptation)

学習ニーズを踏まえたうえで、既存の教材を活用できる可能性がある場合は、教材の適合理化(アダプテーション)をする

必要があります。対象とする学習者にとって、どのような言語・用語レベル・文字量・画像・学習スタイル・歴史文化・教材フォーマット・ストーリー・概念・教材サイズ・付録ワークシートが適しているかを見極め、既存の教材を学習ニーズに応じて適合理化します。「アダプテーション」は、まさに、地域の文化と価値観の尊重と配慮であるとも言えるでしょう。

### (3) 教材の開発(Development)

対象者の学習ニーズに合った既存の教材やアダプテーション可能な教材がない場合は、独自に環境教育教材を開発してみましょう。これまで、日本や海外において、優良な環境教育教材がたくさん開発されています。様々な教材を参考にしながら、ぜひ独自の教材の開発に取り組んでください。



# 変応機臨

状況に応じた行動をとること。場合によって、その対応を変えること。

### 3. 異なる学習目的に基づく教材

#### (1) 動機づけ型教材

「動機づけ型教材」の特長は、学習者がテーマに対して関心を持つよう、動機づけを促す点にあります。美しく描画された絵画やポスター、環境破壊の悲惨な風景を撮影した写真、簡単な実験教材で子どもたちの興味をそそる科学実験ショーなども動機づけ教材です。気づきや関心に重きを置いた教材には、美意識や深層心理、価値観に訴えかける教材が多くあります。環境教育のさまざまな目的を達成する導入部分として、動機づけ教材は大変有効です。

#### (2) 参加型教材

「参加型教材」の特長は、学習者が活動への参加を通して楽しみながら理解を深める点にあります。参加型教材には、すごろく・かるた・カードゲーム・遊びができるポスターから、パペット・紙芝居・歌・踊りのような大人数で楽しめるものまであります。また、実験や観察の教材・教具も実験室やフィールドで活用できる参加型教材です。参加型教材は、教材のイメージが教科書のイメージしかない途上国の子どもたちに、体験に基づく新鮮な印象をもたらすでしょう。

#### (3) 指導型教材

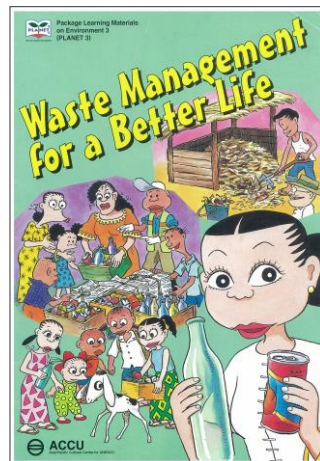
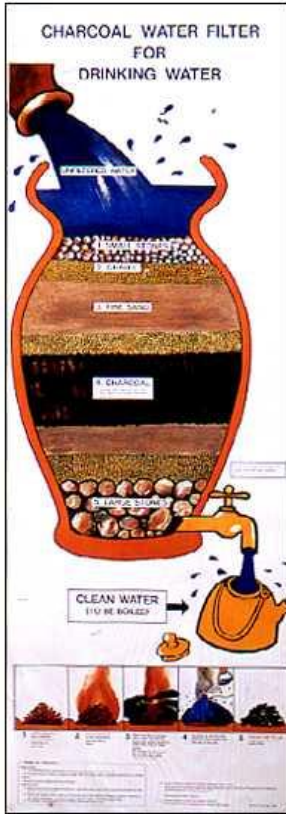
「指導型教材」の特長は、課題解決にむけて明確な知識・技能を提示している

点にあります。実際の生活課題に対して、具体的な知識・技能を提供する教材は、途上国の人々にとって生活の改善に直結する教材です。水のろ過の仕方から、衛生面に配慮した料理法、生ゴミの堆肥化(コンポスト)、収入向上のための薬草や換金作物の栽培方法など、指導型教材は、すぐに活用できる知識・技能を提示しています。また、途上国の生活環境における学習は、広い意味で環境教育と関係性を持っているため、衛生・感染症・植林・理数科教育などにおける教育活動と関連づけることができます。

#### (4) フォローアップ型教材

「フォローアップ教材」の特長は、全体を関連づけ、付加的な情報を提供するとともに、包括的な説明と意味合いを述べている点にあります。一連の環境教育活動を通して獲得されたさまざまな学びを相互に関連づけ、付加的な情報とともに、その理解を深めことができるのがフォローアップ型教材です。環境教育の5つの目的(関心・知識・態度・技能・参加)に相互関連性を持たせ、知識・技能の側面と態度・行動の側面のギャップを埋める役割を持っているとも言えるでしょう。環境問題の相互依存関係、環境・社会・経済のバランスについて、包括的な説明と意味合いを提示することにより、「関係性」を重視した学びに貢献します。

■ 図表 4-3 異なる学習目的に基づく教材(ACCU 機能識字教材より)



- 左上: 飲料水の処理に関する指導型教材
- 右上: 参加型教材のカードゲーム
- 右中: 動機付け型教材のポスター
- 右下: フォローアップ型の漫画教材

## 4. 教材の普及と利用

開発された環境教育教材の普及と利用において、配慮すべき視点を以下にまとめました。地域住民の生活環境と学習ニーズが多様な途上国においては、次のような点に配慮する必要があります。

### (1) デジタルデバイド(情報格差)

メッセージの伝達においては、多様なデジタルデバイド(情報の格差)に配慮しましょう。デジタルデバイドは、ジェンダーや世代間のみならず、学習スタイル、居住環境、使用言語などにおいてもその格差が見られます(図表 4-4)。多様なデジタルデバイドの側面を踏まえた上で、環境教育教材を活用する学習環境を見極める必要があります。

### (2) 配布と普及

教材活動の目的は、「配布(Dissemination)」ではなく「普及(Diffusion)」を重視しなければなりません。教材の配布は直接的で、テーマの重要性を発信していく点では効果的である

と言えますが、教材はテーマに関する内容を深めるだけでなく、関連教材・教育活動・地域的文脈とを関連づけることにより、様々な学習目的を満たす可能性を有しています。さらに、教材の普及は、学習者間の情報の共有とコミュニケーションに生かすこともできます。このように、普及は、地域社会の構成員間において、コミュニケーションチャネルを通じた開発プロセスであると言えます。

### (3) コミュニケーションチャネル

コミュニケーションチャネルとはターゲットとする対象にメッセージを届けるためのルートを指します。教材の普及・活用において、コミュニケーションチャネルを決定することは、重要な戦略の一つです。戦略を構築する際には、教材の設計図(カリキュラユニット)において決定した対象者に対して、どのようなコミュニケーション手法を採用すべきかを検討する必要があります。

## ■ 図表 4-4 多様な情報格差

社会的・経済的要素：	教育レベル・収入レベル・文化慣習・識字レベルなどによる異なる学習スタイルなど
学習能力の違い：	年齢や世代、労働環境などによる学習能力の違いなど
ジェンダーのギャップ：	社会的性差における情報格差など
国内における情報格差：	都市と農村地域、社会層など
世界的にみられる情報格差：	英語圏・非英語圏など

コミュニケーションチャンネルには、マスメディアチャンネルや、対人間チャンネルなどがありますが、環境教育活動においては、対人間チャンネルを通した丁寧なコミュニケーションが必要とされています。対象者と信頼関係や共通の話題・関心を有している関係者は誰なのかを見極めましょう。

#### (4) 教材のパッケージ化

環境教育のさまざまな学習目的と環境教育教材のタイプには深い関係性があります。環境教育の学習目的に基づいて、教材のタイプを使い分けることによって、環境教育の学習目的に合った教材を開発することができます。しかしながら、環境教育活動は、さまざまなアクティビティがともに関連づけられたプログラムとして機能している場合がほとんどです。このような場合には、多様な学習目的の達成にむけた、環境教育教材のパッケージ化が必要になります。「動機づけ型」「参加型」「指導型」「フォローアップ型」の教材を組み合わせるにより、より深い学習プロセスの展開が可能になります。

#### (5) 教材活用と対面式(ブレンドアプローチとファシリテーション)

教材を配布するだけでは、その効果は期待できません。教材を通して情報の共有を促したり、地域の文脈と関連づけさせたりするためには、対面式のコミュニケーションが必要不可欠です。さらに、教材

のテーマについて、多くの学習者が議論し学びを深めていくには、学びの深化を促すファシリテーターの機能が必要とされています。つまり教材に全て頼るのではなく、教材を生かし学びを深めることのできる人材の育成も必要とされています。

#### (6) 地域教材の参加型教材開発

環境教育教材は、ボランティア一人でつくることもできますが、誰と、どのように開発をするかについても検討する必要があります。とりわけ、地域の資源を活用した教材の開発において、地域住民を巻き込んだ教材の開発プロセスはとて大きな意義を持ちます。地域の資源を明確にする地域資源マップ、地域の危険区域を明確化するハザードマップ、地域のよさをアピールするビデオ教材、多くの子どもたちを巻き込んだ未来志向の壁絵づくり、環境のメッセージを織り込んだ歌と踊り、地域の環境活動のカレンダー、地域の言い伝えを活かした紙芝居などさまざまな切り口が考えられます。環境教育教材の開発において、地域住民を巻き込むことは、地域資源・価値の明確化と共有や村落の構成員間のコミュニケーションにも大きな意義を持ちます。参加と対話を重視した教材の開発は、自然に地域住民の主体者意識を高めることもつながります。

## 5. 情報共有とコミュニケーションの手段としての環境教育教材

これまで見てきたように、環境教育の教材にはさまざまな種類と特徴があります。さらに、教材の開発プロセス、普及・利用プロセス、配慮事項についても紹介をしてきました。教材は、いわばメッセージそのものであるだけでなく、情報の共有とコミュニケーションの手段にもなり得ます。環境教育ボランティアが地域住民との連携のもとで、対象とする学習者のニーズに適した教材を開発すること自体が、素晴らしい学びのプロセスなのです。

教材の開発には終わりがありません。常に改善を繰り返しながら、教材の質的向上を続けていくことが重要です。

## 6. 教材開発・普及・利用における成功のノウハウ

環境教育教材の開発・普及・利用においては、前述した視点以外にも、次ページにあるような視点もおさえておくことをおすすめします(図表 4-5)。教材開発・普及・利用のノウハウを蓄積しつつ、関係者や同僚のボランティアとともにぜひ知見を共有してください。



## ■ 図表 4-5 教材開発・普及・利用における成功のノウハウ

① 社会的適合性(地域的文脈への配慮)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 歴史的・文化的文脈への配慮(例:擬人化の受容性、太陽や自然物の表現、色・人物像・画像の嗜好性、言語・特殊文字の受容性、教材フォーマットの嗜好性)</li> <li>・ 地理的文脈への配慮</li> <li>・ 地域特有の学習スタイルへの配慮(例:歌、会話、踊り)</li> </ul>
② 教材開発の主体(教材の開発主体)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子ども主体の教材開発(例:後輩へのメッセージ媒体、絵画や歌など視聴覚を活かした教材)</li> <li>・ ボランティア主体の教材開発(例:日本の経験の発信、ボランティアの専門性・特技を生かした教材)</li> <li>・ ボランティアとCPでつくる教材開発(例:紙芝居の開発、シェルブックへの現地語の挿入)</li> <li>・ 地域住民との協同による教材開発(例:壁絵の協同制作、歌・踊りの開発)</li> </ul>
③ 参加者の動員(多くの人々の巻き込み)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資金調達と教材開発・イベントの実施(例:協賛企業の巻き込み)</li> <li>・ 村落の構成員間のコミュニケーションの活発化(例:村落紹介用のビデオ教材開発)</li> <li>・ 地域価値の顕在化(例:地域資源マップ、地域の知恵やことわざの教材化)</li> <li>・ 視聴覚教材の開発(例:非識字・多言語対応のクリップアートやフォトランゲージ)</li> </ul>
④ インパクト(学習効果の向上)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ メッセージの一貫性(例:つながり、かかわり、ひろがり、ふかまり)</li> <li>・ 生活に身近なものの教材化(例:カレンダー、ノート、エコバック、母子手帳、日記帳、マンガ、校歌、壁画、替え歌)</li> <li>・ キャラクターの一貫性(例:役割・機能をふまえたキャラクターの配置と一貫性)</li> <li>・ 非識字や他言語社会に対応した視覚教材開発(例:フォトランゲージ、シェルブック、紙芝居)</li> <li>・ メッセージの明確化(例:分類、時系列、比較、因果関係、因果ループ、優先順位、全体像、指標、二元軸)</li> <li>・ 未来志向のメッセージ・理想像の共有(例:壁絵作成、スローガン、動機づけ型教材)</li> </ul>
⑤ 効率性の向上(メッセージの効率的伝達)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ポスター教材の開発</li> <li>・ 歌・踊りの開発</li> <li>・ 共有物の教材化(例:校舎校庭、教室壁、掲示版・案内版、ゴミ箱)</li> <li>・ 地域メディアの活用(例:掲示板、壁新聞)</li> <li>・ マスメディアチャネルの活用(例:ビデオ教材、インターネット)</li> </ul>
⑥ 受益者の満足度の向上(楽しさや面白さの向上)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ イベント活動とのリンク(例:絵画イベントとのリンク、体験活動と教材化のリンク)</li> <li>・ 体で楽しめる参加型教材(例:床面を活用したすごろくゲーム、音楽や踊り・演劇とリンクした教材、歌詞や脚本の開発)</li> </ul>

筆者作成



## 2. 廃棄物問題の改善

廃棄物の活動に取り組むことになったら、以下の「活動のツボ」を抑えておきましょう！

- ・ 引き取り手の無いゴミに手間と時間をかけない。
- ・ 住民の信頼と参加は必須。
- ・ 住民巻き込み型の活動を始めるのは全体像を描いてから。
- ・ 日本の「モラル」を基準に考えない。

### 1. 廃棄物処理は「後ろ」から考える —「とりあえず家庭内のゴミ分別 指導から」は危険

世界的に環境問題が重視される傾向が強まる中、環境教育ボランティアに求められる活動内容も非常に多岐にわたってきています。特に近年は地方自治体における「ゴミ問題」が要請内容に含まれることが増えてきました。その中でも「市域におけるゴミ処理全般」や「廃棄物処理システムの構築」など、場合によってはボランティアの手に余るような大きなテーマの要請もあがってきています。しかし、ひるむ必要はありません。ゴミ問題も大きな視点で考え、その中で日常の活動を組み立てていけば、必ずしも難しいものではありません。

例えば、「一般家庭ゴミの処理」などの要請の場合、環境教育ボランティアとして

は「家庭内ゴミ分別の啓蒙(教育)」活動から始めたくなくなってしまうのですが、ちょっとだけ視点を大きくとって「家庭内分別をした後、分別資源はどうなるのだろうか?」と考えてみましょう。

- ・ 家庭内で分別された資源は、分別された状態で収集されますか?
- ・ 市役所の収集能力は全資源を収集するのに十分ですか?
- ・ 収集された資源は最終処分場で埋め立てられていませんか?
- ・ 収集された資源を一時的に保管する集積所はありますか?
- ・ 資源物を引き取るリサイクル業者はありますか?
- ・ 資源の販売で得た利益は市民に還元されますか?

家庭内分別指導の後には、これら多くのハードルが待ち受けています。これらのうち一部分でも不備があり、各家庭の協力を得て回収した資源が結果的に有効利用されなかった場合、住民の努力が無駄になるばかりでなく、市役所や廃棄物処理システム全体への不信感を増加させてしまうこととなります。スムーズに効果的な活動を行うために、事前の調査を十分に行ってください。

## 2. 廃棄物処理プロセスを調査しよう

任地の廃棄物処理に関する調査を、以下の順番で行ってみてください。

### ■ ステップ① – 任国の廃棄物処理に関する法律・制度の調査

- ・ 行政の役割分担（一般廃棄物＝市、危険廃棄物＝国・連邦政府、医療廃棄物＝州・県など）
- ・ ゴミ処理の方法（焼却処理、埋め立てなど）
- ・ リサイクル関連法（リサイクルを義務づけられている資源など）

### ■ ステップ② – 市のゴミ処理の現状

- ・ 回収システムの現状（CP などへの聞き取り調査、回収頻度や料金、住民カバー率など）
- ・ 廃棄物関連予算（総額、市の予算に占める割合、近年の増減など）
- ・ 埋め立て地（現場を観察、スカベンジャーの有無と回収物の種類、ゴミを燃やしているか、総量、規模、拡大速度など、おおよそのイメージをつかむ）

### ■ ステップ③ – 排出されるゴミの調査

- ・ 排出量（家庭ゴミと事業ゴミの量と割合、有機と無機の量と割合、無機ゴミの内容、有価物の割り出しなど）

### ■ ステップ④ – 資源物回収業者の調査

- ・ 市内にある業者（回収可能な資源物の種類と価格、回収形態、収集場まで引き取りにこられるか、など）
- ・ 近隣市にある業者（資源物の種類と価格、回収形態、引取りに来てくれるか、など）

## (1) ゴミ処理の責任分担をチェック

まず、ステップ①の任国の廃棄物関連法から調べましょう。廃棄物は大きく分けて、各家庭から出る「一般ゴミ」と企業や団体から出る「事業系ゴミ」に分かれ、国によってはそれぞれ回収プロセスが違う場合があります。また、一般ゴミの中でも通常の「一般廃棄物」のほかに、バッテリー・電池や化学物質などの「危険廃棄物」や一般家庭で出る注射針や医療機関の出す「医療廃棄物」などに分類され、種類ごとに行政の責任範囲が違っている場合も多くあります。一般的には一般廃棄物は「市役所」、危険廃棄物は「国・県もしくは州」、医療廃棄物は「県または国の保健省」などが受け持っているケースが多く、回収方法も回収後のプロセスも異なっている場合があります。

また、ゴミ処理の方法もさまざまで、日本のように焼却処理を行っているのは土地が限られたわずかな国々で、大多数は処分場に埋め立てる方式をとっています。焼却処理は有害物質を排出したり、燃料を消費したりと問題が多く、国によっては燃やすこと自体を禁止している場合もあります。埋め立ての方法も有害物質や経年変化による土壌への影響を減らすために、土中にゴムシートを埋めこんだり、浸透しないコンクリートで造成したりとさまざまな規定が国によってされています。

国によっては、リサイクル関連法が制定されており、リサイクルが義務づけられ

ている資源物や回収方法の規定、さらにはリサイクルを促進するための補助金制度などがある場合がありますので、これらについても可能な範囲で調べてみてください。

特に任国の廃棄物処理に関しては、現地の JICA 在外事務所が情報を持っていることが多いので、ぜひ問い合わせてください。任国で廃棄物関連の専門家による技術移転プロジェクトがある場合は、調整員を通してコンタクトしてみるのもいいかもしれません。

## (2) 「ゴミ問題」が凝縮されている埋め立て地は情報の宝庫

ステップ②の市のゴミ処理の現状については、CP などに対するゴミ回収の現状聞き取り調査と埋立地を実際に訪問してみることで、おおよそをつかむことができます。

CP には、CP 機関または市役所が行っているゴミ処理の現状を、回収頻度、各家庭から徴収する回収料金と徴収方法、回収地域が全住民に占めるカバー率などを中心に聞き出してください。その上で、現状の問題点を CP と話し合い、「現システムの改善」で対応できるのか、「全く新しいシステムが必要」なのかを大体のイメージでよいので共有しておくとうまいでしょう。

埋め立て地の視察では、回収されたゴミが実際にどうなっているかを確認しまし

よう。CP や市役所が「リサイクルしている」などと言っている場合でも、埋め立て地に行ってみれば一目瞭然です。どのようなものが無駄に捨てられているか、何がもっとも場所をとっているか、有機物と無機物が別れているか、ハエや野良犬はどうかなど、埋め立て地を観察することで非常に多くの情報が得られます。

埋め立て地の観察で特に注意してほしいのが「スカベンジャー」の有無です。途上国ではゴミの中から資源を探して売ることのできる人たちがおり、そういう人々は「スカベンジャー」や「ウェイストピッカー」と呼ばれています。自然界ではハゲワシやシテムシなどが「腐肉食動物(スカベンジャー)」と呼ばれ、生態系維持のために非常に重要な役割を担っています。人間界でもゴミ埋め立て地で有価物をリサイクルする作業は非常に重要な仕事ですが、地域によっては「スカベンジャー」を差別的な用語としているところもありますので、用語の使用には十分な注意が必要です。

彼らの多くは、どのようなものが売れて、何が売れないのかを熟知している、いわば「リサイクルのスペシャリスト」です。可能な範囲でインタビューをし、現地のゴミ問題の末端をよく理解してください。一方で、ゴミ分別をはじめとしたリサイクル型の廃棄物処理システム整備は、スカベンジャーの人々の仕事を奪ってしまう可能性があります。処理システムを新たに構

築する場合は、市役所などと交渉し、できるだけスカベンジャーの人々を雇用するなどして、システムの中に取り込んでいく配慮が必要でしょう。

また、一人一人のスカベンジャーの利益は少なくとも、全体としては大きな資金が動くため、多くの途上国・中進国では廃棄物処理が「マフィア」の資金源になっている場合があります。そのような状況が明らかになった場合は、直ちに現地 JICA 在外事務所の調整員に相談し、調査自体を中断してください。「新たな廃棄物処理システムの可能性を調査している」というだけでも、彼らにとっては十分な驚異です。無理をしないで、別の可能性を探ってください。

### (3) どんな「資源」がどのくらい？ おおよその目安を把握する

上記の「現場調査」の後、可能な範囲でステップ③の「ゴミ排出量」調査を行ってください。ゴミの総量などは市役所が行っている回収の現状データから得られるかもしれませんが、有価物の割合や、事業系・家庭ゴミの量、有機・無機の別などは、CP とゴミ回収に同行するなどして調べる必要があるかもしれません。この段階ではあまり無理をせず、簡単なサンプリングで「(1日あたり)売れるものがどのくらい排出されているか」のおおよそのところをつかんでください。近隣に大学などがある場合は研究室と共同で調査をした

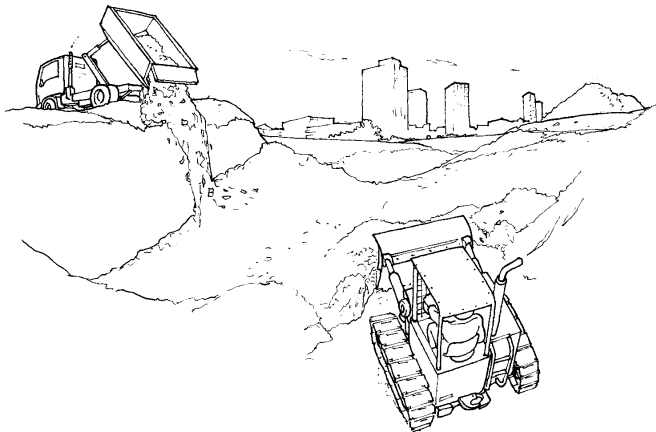
り、町内会や婦人会の協力(家庭ゴミの住民自身による調査)を頼んだりすることで、より精度の高い調査を行うことができます。調査結果から「1ヶ月あたりどのくらいの量のペットボトルが出るか」などの情報が明らかになれば、後々の買い取り価格交渉が有利になったり、一時的な貯留場所の規模が類推できたりといったメリットがあります。

いずれも、どんな「売れるもの」があるかを把握することが1番の目的なので、「1ヶ月あたり排出量がどのくらいでいくらの収入になる」など、この段階での皮算用をする必要はありません。あくまで「大体こんなものがこのくらい出そう」くらいに楽に考えてください。

もう一つ、引き取り業者の調査で重要なのは「どのような形で買い取ってもらえるか」という点です。日本ではペットボトルのラベルをはがしたり、フタを外したりした状態で回収することが多いようですが、処理設備によっては粉碎しチップ化した後

に比重の違いなどによって自動分別するシステムもあり、必ずしもラベルをはがす必要がない国もあります。そういった国で各家庭に「ラベルをはがす」要請をすることは無駄であり、場合によっては協力を得られない可能性もあります。基本的には「かかる手間」がどれだけ「買い取り価格」に見合うかを基準にして考えてみましょう。

また、資源物の種類によっては「値段がつかない」で無料で引き取るようなケースもあるかもしれません。その際も、業者が市まで引き取りに来てくれるなどでコストが減らせる場合には十分に検討する価値があります。市の埋め立て地も無限ではなく、またゴミの経年劣化によってしみ出る有害物質の汚染など、廃棄物の野ざらしは長年にわたってコストを発生し続けます。それらを総合的に判断して「ただで引き取ってもらえる」方が少ないコストで済むことが多く見られます。



### 3. 「実現可能性」を精査する

#### 一住民に無駄な努力をさせない

これらステップ①から④の調査を一通り行った後で、CP と「実現可能性」についてじっくりと話し合ってください。現行のゴミ収集システムを部分的に改善することに対応できるならば、それに越したことはありません。改善点をまとめて、CP の上司や市長、関係部署の担当者らを「説得」してみてください。また、全く新しい処理システムを構築しなければならない場合も、ひるむことはありません。調査結果をもとに CP と十分に協議し、最終的に廃棄物を処理できる目処が立つならば、挑戦してみる価値は十分にあります。

ただし、現状で廃棄物の「持って行く先」が全く見つからない場合は、「家庭内分別指導」などの活動も行わないようにしてください。住民がポジティブに協力し、結果としてその努力が「無駄になった」場合には、住民の信頼を失い、将来にわたって協力を得られない可能性があり、「何もしない状態より悪化する」ことも考えられます。ゴミ分別&リサイクル以外にも町の美化運動や環境意識向上などの「環境教育」活動はたくさんありますので、状況に合った活動を行ってください。

### 4. いざ、実行。ボランティアの創意工夫の見せどころ

ゴミ処理に目処がついたなら、CP と共に活動計画を作成してプロジェクトを組み

立ててください。調査の過程でほとんどのステークホルダーと面識ができていますし、場合によってはあなたの調査活動に賛同して協力を申し出てくれる住民もいるかもしれません。皆の「やる気」をポジティブに受け止めて、一つの目標に向かって導くような創意工夫を行ってください。以下、実際に活動をはじめるとあたってのヒントをいくつかあげてみます。

#### (1) 一般家庭およびゴミ排出業者に対する啓蒙活動と環境教育

基本的にゴミ処理は「排出者責任」であることの理解を促します。ゴミ処理にはコストがかかること、ゴミを出す人がそれを負担するのが原則であること、コストを減らすために「家庭内分別」など「ほんの少しの協力」を促すこと、 $3R+1R=4R$  でコストが減らせること (Reduce, Reuse, Recycle + Reject)、などを重点にワークショップや住民集会などを行ってみるのもよいでしょう。任国の識字率や文字を読む習慣の有無などを考慮して、絵で表現した分別ポスターなどを配布してみるのもお勧めです。町の診療所や小中学校と協力した講習会なども効果的です。

廃棄物の処理システムでは、一般家庭の協力を取りつけることがもっとも重要で、もっとも難しい部分でもあります。直接住民に働きかけるこのパートは、環境教育ボランティアの創意工夫が存分に発揮で

きる活動でもありますので、CP と共に根拠を保ち、焦らず確実に住民の信頼を勝ち取ってください。

## (2) 市役所の説得と予算の確保

将来的には資源を売った資金が入ってくるとはいえ、活動の初期には設備投資や人件費などのコストが発生します。市長さんや助役さんなど政策決定者の十分な理解を促してください。また、中間処理場などのインフラ整備は市役所だけでは予算的に対応できないこともありますので、州政府や県庁、国の出先機関などをメンバーに入れた「作業部会(ラウンドテーブル)」を組織してチームで活動することも必要になってくるかもしれません。さらに住民代表や業者団体代表などの「ゴミ排出者」を作業部会に組み入れることで、活動が大きく促進されることも多いので常に住民巻き込み型の工夫をしてみてください。

さい。

資源を買い取る業者はできるだけ「元締め」に近い業者を探すようにしてください。仲介業者が増えるほど価格は下落しますし、小さな業者ほど付加価値をついにくくなります。近隣の市に回収に来る「ついで」に回ってもらうとか、量的なメリットで価格を上乗せしてもらうなど、さまざまな交渉を試みてみましょう。また、地元住民の福祉に貢献するといった側面から、CSR(企業の社会的責任)的な協力を要請してみることもできるでしょう。国によっては CSR 活動を行う企業に対する優遇税制などもあるので、事前に調べて「提案」をしてみるのも有効かもしれません。資源物は住民が分別し手間暇かけた「商品」であることを忘れずに、できるだけ付加価値をつけて売り込んでみてください。



## BOX 7 スラム・スクワッター地域の環境衛生改善

ボランティアの皆さんが暮らすこととなる開発途上国では、急速な都市化が進んでいます。すでにながりの都市化が進んだ先進国では、都市の人口増加は緩やかであり、かつインフラが整備されています。ところが途上国の特に大都市では、もともとインフラが不十分なところに、農村部から大量の人口が流入してきています。農村では食べられない、教育が受けられない、天災や内戦で暮らせないなど、移動の理由は様々です。彼らの多くは職もなく、満足な教育も受けていません。

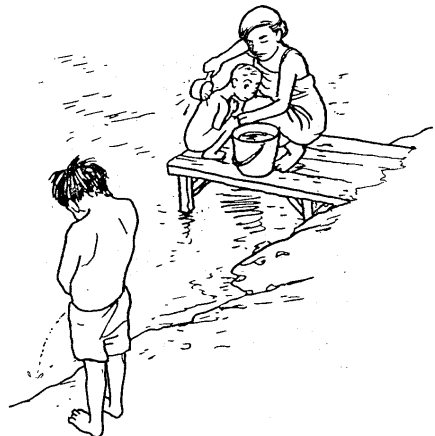
そこで、居住環境としては極めて劣悪な、占拠しても排除されないような地域を不法占拠するなどしてスクワッターを形成し、新聞売りや靴磨きといった仕事とは呼べないようなインフォーマルな仕事でその日をつなぐのです。水道もトイレもなければ、電気もない、仕事もなければ学校もないというないない尽くしの生活を送りながら、よりよい明日を夢見て暮らすのです。

こうした人々の生活環境の改善は、対途上国支援の中でも重要度、困難度がとりわ

け高い課題です。解決に当たっては、地域の自然や社会経済に適合した適正技術の適用も重要ですが、何と言っても大事なことは、そこに暮らす人々の自分の生活をよりよいものにしたいという意欲を解き放ち、つなぎ、生かしていくことです。地域の変革には、「若者・バカ者・よそ者」が必要と言われます。ボランティアの皆さんが加わることで化学変化が起き、住民の自助努力を柱とした生活環境の改善が進むなら、素晴らしいことだと思いません。

国際環境衛生講座の中の私の講義「スラム・スクワッター地域の環境衛生改善」は、そうした可能性にトライしてみたいというボランティアに送るエールです。

桜井国俊  
沖縄大学図書館長





## 3. 学校巡回活動

### 1. 巡回活動とは

複数の学校を巡回する啓発活動は、多くの環境教育ボランティアが取り組んでいる活動です。英語ではスクール・アウトリーチ (School Outreach) とも呼ばれる学校巡回型の環境教育活動 (以下、巡回活動) は、広い地域やより多くの人々を対象に啓発活動を行えるのが最大の特徴です。

ここでは、学校の巡回について述べてありますが、コミュニティへの巡回活動の場合でも共通する活動のツボがあるので参考に見てみてください。

さて、一言に巡回活動と言っても、配属先の移動手段の有無や予算によって、数校を巡回するところから、中には100校を超える学校を巡回する必要がある場合もあります。また、1校につき訪問できる頻度も1年や1学期に1回から、週に数回までさまざまです。一般的に多くの途上国の教育現場では、カリキュラムに含まれない環境教育のような課外活動は、数学や理科といったテスト科目と比べて軽視される傾向があります。そのような状況の中、効果的な巡回活動を行うためにはどうしたらよいか考えてみましょう。

### 2. きっかけとしての巡回活動

途上国の学校では、環境教育というも

のを体験したことがない子ども達や先生がたくさんいます。そもそも環境教育とは何か知らない人達もいれば、興味・関心があったとしても地理的・金銭的・時間的・組織的な制約があり、そういった機会を得られない人達もいるでしょう。巡回活動は、環境教育の実施者 (指導者) 自らが学習者に積極的にアプローチすることによって、そういった人々を対象に環境教育の機会を提供することができる活動の形です。

巡回活動は通常複数の学校を対象とし、かつ学校側がとってくれる時間は限られているために、各校へ訪問する頻度や授業に費やす時間はどうしても少なくなってしまいます。そういった状況で、「数回学校に行くだけでは、生徒達の意識が変わるようには思えない、私のやっていることに意味はあるのだろうか？」といった悩みを抱えるボランティアは少なくありません。2年間の活動期間の中で何か形に見える効果を出したいという気持ちは自然なものです。何事においても人の「意識を変える」には長い歳月と努力が必要です。学校を数回訪問し啓発活動を行うことだけで、子ども達の意識や行動を大きく変えることはその道の専門家であっても難しいでしょう。

意識の大幅な向上が難しいのであれ

ば何のために巡回活動をするのでしょうか？ それは、次のアクションにつながる「きっかけ」を作ることです。巡回活動を通してきっかけを与えることで、それまで受身だった学習者が積極的に学んだり、環境のために行動を起こしたりするようになれば、その巡回活動は成功と言えるでしょう。環境教育の5つの目的(関心・知識・態度・技能・参加)でみると、巡回活動では特に「関心」が重視されるといえます。

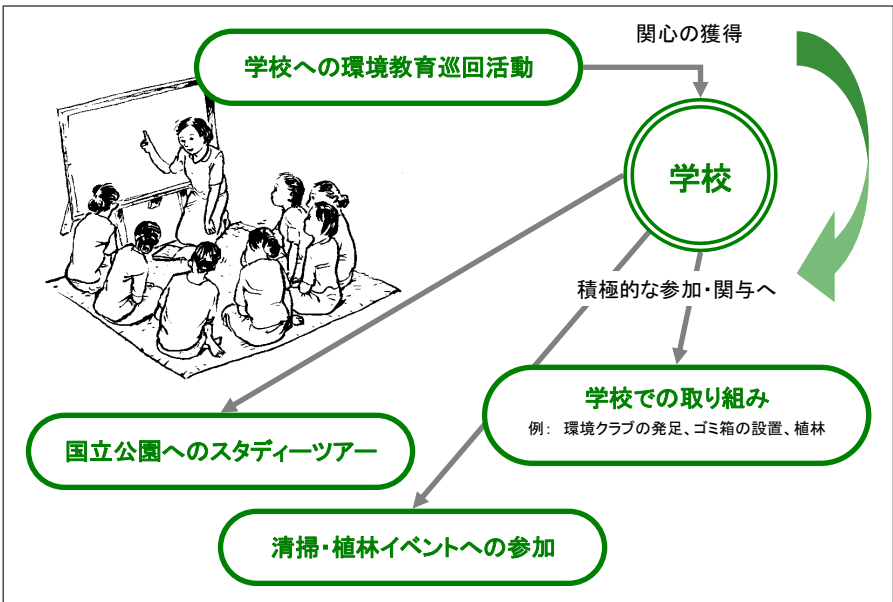
ところで、ボランティアが巡回活動を行う場合、一つの学校で与えられる時間は1時間前後のことがほとんどです。さまざまな制約の中で、どうすれば、次のステッ

プにつながる効果的な「きっかけ」がつけられるのでしょうか。

### 3. 他の活動と組み合わせる

巡回活動を効果的に次のアクションにつなげるためには、巡回活動単体での実施よりも、他の活動と組み合わせる展開していく方がより効果的です。どんなに素晴らしい巡回活動を行ったとしても、やりっぱなしでそのまま放っておけば学校側が主体的に次のアクションを起こす可能性は低いままです。学校の主体性はもちろん大切ですが、最初のうちは、ある程度の「お膳立て」が必要になってきます。

■ 図表 4-6 学校巡回型の教育活動と次の取り組みへの展開例



例えば、任地の学校数校を巡回し、ゴミ問題に関する授業をしているとしましょう。生徒達はゴミ問題に関心を持ってくれるかもしれませんが、それだけでは、学んだ内容を実践に結びつけることは困難です。そこで、それらの学校を対象とした地域の合同清掃活動や学校対抗のクイズ大会、ゴミ箱アート大会、ディベートなどのイベントを企画して、学んだ内容を活用する場を提供することができれば、「関心」から「参加」へとつなげることが可能になります。また、これらのイベントは、学びを深めるだけでなく、参加する生徒や先生のモチベーションの向上や学校間の交流の促進にも大変役立ちます。

これまで、環境教育の先輩ボランティア

も巡回活動と組み合わせて様々な活動を実施してきました(図表 4-7)。これら以外にも任地や配属先の現状に合わせて、巡回活動と組み合わせられる活動を考えてみましょう。

また、巡回活動が要請内容に含まれていなくても、環境啓発イベント・キャンペーンの企画・運営に取り組んでいるボランティアにとっては、巡回活動は大きな武器になります。あるイベントに向けて事前に学校を巡回することで、事前の予習や集客効果が期待できます。そういう意味で巡回活動は、イベントを効果的に実施する準備の一つとしても捉えることができます。

■ 図表 4-7 巡回活動と組み合わせられる活動例

活動	活動内容とヒント
エコスクールコンテスト	巡回している学校の「エコ度」を評価し、順位を決める。エコ度の指標の例としては、植林している苗木の数・ゴミのリユースやリサイクル・トイレの衛生状態などがあります。コンテストの表彰式と他のイベントを組み合わせることもできる。
各種イベント	清掃活動・植林活動・学校対抗クイズ大会・ディベート・演劇など、巡回活動で学習した内容の実践の場を提供できる。
詩、絵画コンテスト	巡回している学校同士の距離が遠く一堂に集まれない場合でも、環境のテーマに沿った詩・絵画コンテストには参加できる。
ニュースレター	ニュースレターの発行は、知識の伝達やイベントなどの告知だけでなく、学校での先進的な取り組みの紹介などにも活用できる。
シードエクスチェンジ (Seed Exchange)	2校以上の学校が、お互いの学校周辺から採取した種を交換し合う。互いに持っていない種子が手に入ったり、学校同士の交流を促したりすることができる。

## 4. 学校を巻き込む

### (1) 先生の巻き込み

環境教育ボランティアの配属機関には巡回活動を担当しているスタッフがいないこともあり、実際に学校を巡回するのはボランティア1人だけといった例も少なくありません。このような場合、任期終了後、後任のボランティアがいなければ、巡回活動自体は停止してしまいます。本来は、CP や同僚と一緒に巡回活動を行い、引き継いでもらうのが理想的ではありますが、CP が本来の業務で忙しく巡回活動に参加できないということも実際には起こります。

そんな状況で、巡回活動そのものが継続されなくても、学校で環境教育の活動が続けられるような体制を作るには、学校で活動する先生を上手く巻き込んでいく必要があります。キーパーソンとなりうる学校の先生の中には、大抵環境について高い問題意識を持っている人がいます。まず、このような意欲のある先生を巻き込むことが巡回活動の成功の条件の一つです。

二つ目の条件として、学校側のサポート体制があります。やる気のある先生がいても、学校長を含め学校の運営側が反対している場合は巡回活動の実施は困難です。学校が消極的な場合でも、環境教育やその重要性を知らずに反対している場合もあり得るので、話し合いの場を設けてCP と一緒に学校側を説得するなどする

のもよいでしょう。

逆に、とりあえず活動に協力的な学校をパイロット校(環境モデル・スクール)として重点的に活動を行ってみるのも一つの手です。それらの学校で活動が軌道に乗り、他の学校にも噂が広まれば、今まで関心を持っていなかった学校も興味を示してくれるかもしれません。

意欲のある先生がいて、学校も後押ししてくれるという条件が揃えば、巡回活動や学校主体の活動も順調に進んでいくはずです。しかし、途上国で教師の異動はよくあることで、せっかく活動が盛り上がってきたのに、担当の先生がいなくなった途端に活動が停滞・停止してしまうこともよくあります。そこで、持続的に活動を続けていくためには、できるだけ1校につき2人以上の先生を活動に巻き込むようにしましょう。環境クラブであれば顧問、副顧問というように1人が辞めた場合でも、引き継げる先生がいることが重要です。ただし、形だけの副顧問でなく、活動にしっかり巻き込んでいるか注意してみてください。

### (2) モチベーションを高める

協力してくれる先生を巻き込むときに忘れてはいけないのが、教師は本業の傍ら「ボランティアで」環境教育活動に協力してくれるということです。したがって、何らかのインセンティブなしに、本人のやる気だけで積極的に関わり続けてもらうこと

は難しいでしょう。

ワークショップやセミナーを通して環境分野でのスキルアップの機会を提供したり、対外的に環境教育活動を行っていることを示す証明書を発行したりすることは、協力してくれる先生のモチベーションをあげるのに役立ちます。そうすれば、学校長に対して、どういった活動をしているかの説明にもなり、またその先生が転職や異動をする際に実績として示すことができます。

生徒には、環境教育クラブなどのメンバーシップカードや環境クラブのロゴ入りのバッジなどがあると、生徒も環境を守るクラブの一員であるという自覚が高まるでしょう。そこまでできなくても、ある一定の課題をこなした学校や生徒に対して表彰状や感謝状を授与することで、生徒の「もっと頑張ろう」という意欲を引き出すことができるはずです。国立公園へのスタディーツアーの開催など、他にもモチベーションをあげるアイデアはたくさんあります。

さらに、学校で育てた苗木や木材を売って環境クラブの活動資金にしたり、学校の備品の購入にあてたりする仕組みができれば、持続的な活動が期待できます。他にも養鶏や「売れるゴミ」を収集して買い取ってもらう活動などを通して「結果」を見えやすくするとよいでしょう。

### (3) 横のつながりを作る

学校による環境教育活動の持続性をさ

らに高めていくためには、イベントなどへの参加だけでなく、学校に積極的に企画・運営に関わってもらう必要があります。中心的な役割を担うのは教師ですが、高校生や大学生であれば生徒に積極的に関与してもらうとよいでしょう。

アプローチで見ると、巡回活動の授業自体は「環境についての教育」(知の移転型)や「環境のなかでの教育」(感性学習・直接体験型)になることがほとんどですが、このように教師や生徒の積極的な関与を促すことで「環境のための教育」(集団的行動・参加・対話型)へとつなげることができます。

環境教育活動の賛同者が増えてきたら、担当教師や関連団体のステークホルダーからなる実行委員会を立ち上げてみてください。イベントに参加してもらうだけでなく企画・運営にも積極的に関わってもらいましょう。

## 5. 学校巡回のチェックポイント

さて、実際に巡回活動を行う際のポイントを見ていきましょう(表 4-8)。本章の1.「環境教育教材の開発」及び4.「イベント・ワークショップ」と共通するポイントも多いので参考にしましょう。

また、先輩ボランティアが経験したトラブルをもとに、巡回活動を実施する際の留意点もおさえておきましょう。

■ 図表 4-8 学校巡回活動のチェックポイント

チェック項目	チェックポイント	例
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>どんな学びを得てもらいたいのか。</li> <li>どんなきっかけを与えたいのか。</li> </ul>	ポイ捨てについて感心を持ってもらう。
対象者	<ul style="list-style-type: none"> <li>どの地域の学校か、初等・中等・高等教育、私立・公立など。</li> <li>対象者（環境クラブの生徒・全校生徒・特定のクラスなど）。</li> </ul>	海辺に近い○△×地区の小学校 10校の環境クラブに所属している生徒約 500 名。
テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>テーマを選択する際は、複数の学校でテーマは同じでもよいか、テーマが学校周辺の自然環境や生活環境に合っているか確認する。</li> </ul>	「私の捨てたゴミはどこにいく？」 (10 校とも海のそばにあり、ほとんどの生徒が海に行ったことがあるので全校同じテーマとする。)
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>手法(ビデオ上映、紙芝居、参加型アクティビティなど)</li> <li>プログラムの長さ・時間配分</li> <li>実施場所(学校の周りにどんな自然があるか事前に把握しておくとうい。)</li> </ul>	1 回目:「ウミガメとゴミ」のビデオ上映(30 分)→グループディスカッション(20 分)→ふりかえり(10 分)、計 60 分 2 回目:ゴミの種類についての参加型ワークショップ(50 分)→ふりかえり(10 分)
スケジュール	<ul style="list-style-type: none"> <li>時期、日程、各対象校への訪問回数</li> </ul>	1 学期の間に各学校を 2 回ずつ訪問、クラブ活動の時間に実施する。
会場 機材	<ul style="list-style-type: none"> <li>機材(黒板、AV 機器、DVD など)</li> <li>学校に機材を使える環境が整っているか(電気、会場など)。</li> <li>配属先と学校どちらが用意するか。</li> </ul>	TV と DVD プレーヤーがある学校では事前に準備してもらう、ない場合は機材を持参する。停電の際はビデオの代わりに紙芝居を使う。
評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価</li> <li>アンケート</li> <li>口頭でのフィードバックなど</li> </ul>	生徒からは口頭でフィードバックをもらい、担当の先生には授業についてのアンケートに回答してもらう。
他の活動との 関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>ニュースレター</li> <li>イベントへの参加</li> <li>次回の巡回時までの宿題など</li> </ul>	全校への巡回が終了後、合同のビーチ清掃活動を実施する。

### (1) 巡回活動のスケジュール

多くの学校を巡回し、時には遠方に行くこともある巡回活動の日程を決定する際には、必ず CP など現地の人に相談しましょう。悪路で移動に予想以上の時間がかかったり、イスラム圏ならラマダン（断食）の時期は学校が午前中で終わったりすることもあるので、普段から情報収集に努めましょう。

### (2) 事前の通知

事前に学校巡回の通知を郵送でする場合は、その国の郵便事情によって配達が遅れる場合があるため、時間には十分余裕をもちましょう。電話やメールで連絡がとれる場合は、郵便の他に二重、三重で確認をすると、「遠路はるばる来たのに休校だった…」というような事態を未然に防ぐことができます。

また、どんなに完璧に準備をして予定通りの時間に学校に着いても、学校側の対応が遅れることはよくあるので、時間と心に常に余裕を持ちましょう。

### (3) カリキュラムの中での環境教育

一般的に、巡回活動は生徒が登校する平日に行われます。学校では通常の授業が行われていますので、訪問する際はそれを出来るだけ邪魔しないように授業を設定する必要があります。

多くの派遣国では環境教育のように既存のカリキュラム以外の「学び」に対する

意識が低いので、授業をさせてもらう時間を頂いているという意識を持ちましょう。

また、授業のテーマがいつも「環境教育」である必要はありません。既存の音楽・理科・社会（日本の文化紹介）といった授業に環境教育のエッセンスを盛り込む方が、学校側にとって実施し易いという場合は、その機会を利用するとよいでしょう。

### (4) ハプニングに備えよう

どれだけ完璧に準備したと思っても、事はそうそう予想通りに運びません。例えば、野生生物のビデオを見せようと思って準備していても、急なトラブル（機械の故障、停電）で見せられなくなった、というのはよくある話です。こんなときに必要になってくるのが「プラン B」です。急な停電などがあるときにも紙芝居は使うことができます。トラブルや急な変更を想定して、準備の段階で2つ以上の授業内容を準備していくと、予定が変更されても対応することができるはずです。

### (5) 授業本番

さあ、いよいよ本番です。まずは、第5章のアイスブレイキング集などを使って話し易い雰囲気を作りましょう。最初のうちは、見慣れない外国人が来るわけですから子どもが言うことを聞かない、わいわい騒いで授業どころじゃないという状態になるかもしれません。そんな時は、無理にしかったりせず、子どもたちを静かにさせるのを担任の先生に任せるのも一つの手です。より効果的な授業を行うために、先生にはできる限り同席してもらおうようにしまし

よう。それができない時は、第5章で紹介されている集中を高めるアイスブレイクなどを駆使して乗り切りましょう。

### (6) フォローアップを忘れずに

巡回活動は次の授業やイベントまでの期間が空くことが多いです。そこで次回の授業に関する課題を出したり、ニュースレターを発行したりするなど、訪問できない時も何らかの形で学習者が環境教育に関わっていただけるような環境を作るよう心がけましょう。





## 4. イベント・ワークショップ

### 1. 事前のチェックポイント

環境教育ボランティアがイベントやワークショップを企画する機会は多くありますが、その実施において、思わぬハプニングはつきものです。当日まで参加者数がわからない、来ると思っていた人がなかなか来てくれない(参加者ならまだしも講師やスタッフがということも)、兄弟姉妹をつれてきたので予定より人数が激増した、届いていると思っていた協力依頼が読ま

れていない、など実際にはさまざまなハプニングがあります。「周到な準備」とともに、突然のハプニングをある程度「予測する力」、予想外の事態にも対応できる「柔軟な対応力」を磨きましょう。以下は、イベントやワークショップを実施するにあたって、事前にチェックすべきポイントです(図表4-9)。

■ 図表 4-9 イベント・ワークショップ実施のチェックポイント

目的	<ul style="list-style-type: none"><li>・ どんな体験をしてもらいたいのか。</li><li>・ どんな学びを得てもらいたいのか。</li><li>・ 社会的にはどんなメッセージを発信したいのか。</li></ul>
対象者人数	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 年齢にばらつきはあるか。</li><li>・ 固定的か流動的か。</li><li>・ 配慮すべき要件は(字はかけるか、文化的タブーはないか、など)。</li><li>・ はじめてかリピーターか。</li><li>・ 自主的な参加か、ある程度強制的な参加か、偶発的な参加か。</li><li>・ 参加者が期待するものは何か。</li></ul>
会場	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 使えるスペースの広さや備品(イス・机・電源・黒板・掲示できる場所など)。</li><li>・ 場所の特性(魅力や特性・配慮事項・危険箇所・トイレ・移動手段など)。</li><li>・ 野外的場合、日陰やトイレ、雨天時の活動場所など。</li></ul>
時間	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 参加しやすい季節や日時、時間帯があるか。</li><li>・ 準備や告知の期間はどうか。</li><li>・ 当日の状況はどうか(天候、他のイベントや活動とのかねあいなど)。</li></ul>
協力者協力団体	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 協力者は誰か、協力団体は何か。</li><li>・ 協力者・協力団体にとってのメリットは何か。</li><li>・ どんな役割を担ってもらうとよいか。</li></ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 告知はどうか。</li><li>・ 資金はどうか。</li></ul>

## 2. プログラムとアクティビティ

一つの企画を考えるときに、プログラムとアクティビティという考え方を知っておくとよいでしょう。ゲームや紙芝居、講義といった個々の活動がアクティビティと呼ばれ、それをつなげて一連の流れとしたものがプログラムです(図表 4-10)。

その組み合わせの仕方としては、「導入→展開→ふりかえり→まとめ」という流れがオーソドックスなものです。

「導入」で参加者同士が打ち解け、指導者との信頼関係をつくります。ここでは、アイスブレイクゲームなどの場を和ませる活動が有効です。全体の雰囲気づくり、参加者のやる気を引き出す段階です。

「展開」では、テーマや目的により迫っていく活動へと移ります。

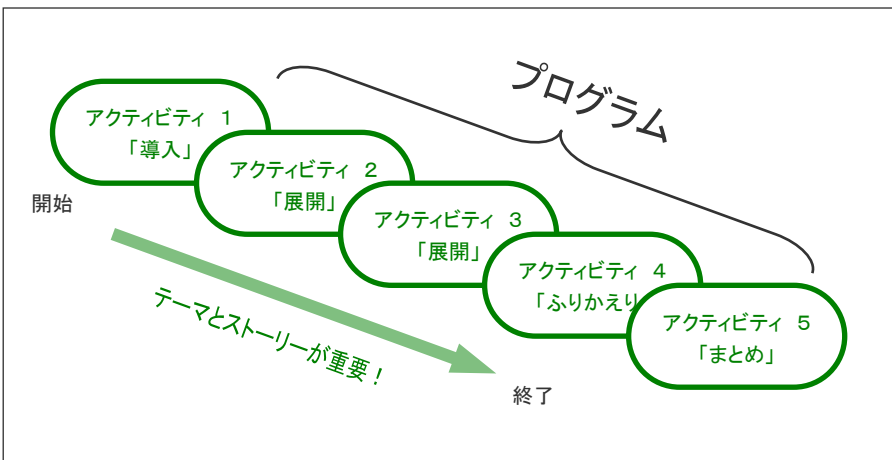
「ふりかえり・まとめ」は、それまでの活

動からの学びを意識化していく段階です。お互いに気づいたことを共有したり、指導者が学びを整理したりすることで、プログラムで体験したことを意味づけしていきます。

## 3. テーマを明確にしよう

楽しいアクティビティをばらばらにつなげていくのではなく、テーマにそって流れ(ストーリー)をつくってみましょう。個々のアクティビティもテーマを意識して展開していくと、基本的な手順は同じでも、導入やふりかえり・まとめの仕方一つで、参加者の学びの視点は大きくかわってきます。さまざまなアクティビティのマニュアルも、自分のテーマに引き寄せてみてください。

■ 図表 4-10 環境教育プログラムとアクティビティ



## 4. プログラムの例

### (1) 事例 1 - ケニア・モンバサ市 ビーチ清掃イベント

実際に先輩ボランティアが実施した企画を見てみましょう。一つ目の事例は、ケニアのボランティアが企画した半日のビーチ清掃活動です。詳細を見ると、さまざまな配慮がされていることがわかります。

#### ■ イベント概要・プログラム

目的	ゴミのポイ捨てについての意識を向上させる
テーマ	わたし達が捨てるゴミと海の生きもの
対象	環境クラブメンバーの小学生から大学生までの生徒約 500 人
会場	海洋保護区に面したパブリックビーチ
協力者	海洋保護区の管理団体(ゴミ袋・ゴム手袋提供)、市役所(収集したゴミの回収)

時間	アクティビティ	ねらい	配慮事項
8:00	集合・受付(待ち時間にアイスブレイク)	現地の人の遅刻癖に柔軟に対応する。	遅刻で実際の開始時間が大幅に遅れるので、招待レターのプログラムには 2 時間ほど早い時間を記載する。
8:15	開始の挨拶	配属先の紹介と安全確認。	主催者の挨拶とゴミ拾い時の注意事項説明。遅れる学校が多いため、随時インターンが説明を実施。
8:30	清掃活動	ビーチをきれいにし、どれだけの、どんなゴミが捨てられているか知ってもらおう。	日差しが強くない内に清掃を実施する。安全の為に、小学校のグループには大学生をひとりずつを割り当てる。
10:00	サンドアート大会	サンドアートを楽しみながら、ゴミが海の動物に与える影響に関心をもってもらおう。	清掃活動の後で疲れているので、エンターテイメント性の高いアクティビティを行うことで雰囲気を盛り上げつつ学ぶ。
11:15	生徒によるパフォーマンス	生徒の参加によるふりかえり・まとめ。	生徒に海の環境とゴミに関する詩・歌・劇・ダンスなどを事前に準備してもらう。
11:45	主催者・協力者によるスピーチ、閉会の挨拶	主催者・協力者によるふりかえり・まとめ(生徒によるまとめの補足)。	協力者にスピーチの機会を与える。生徒をねぎらってもらい、参加者のモチベーションをあげる。海亀とビニール袋などの話も盛り込む。
12:00	各学校の自由時間	普段、海に来られない生徒が多くいるため、午後自由に浜辺や海で遊ぶ時間をとれるようイベントは午前中で終わらせる。	

## (2) 事例 2 ー ベトナム ハノイ市小学校における 3R 環境教育増強計画

二つ目はベトナムのハノイに短期でチームとして派遣されたボランティア達が実践した連続したワークショップの事例です。学校の授業時間を使ったこの活動は、「関心→知識→態度→技能→参加」の流れを意識してプログラムがつくられています。

### ■ プログラム概要

プログラム名	ハノイ市の小学校における 3R 環境教育増強計画			
日時	2009年8月21日～9月18日			
対象	①Khuong Thuong 小学校 ②Hoang Hoa Tham 小学校			
目的	ハノイ市2箇所の小学校において「REDUCE、REUSE、RECYCLE」の3R環境教育プログラムを教員と共に実施・共有して、ハノイ市の課題である廃棄物管理に関連して、持続的な環境教育と3Rの啓発を促進することである。			
内容	①環境教育プログラムの実施、②環境教育・啓発活動に関する優良事例の共有、③環境教育ネットワークの構築			
期待される効果	①ハノイ市の3R環境教育プログラムの改善と3R促進、②環境教育・啓発活動に関する基礎知識についての理解が深まる、③ハノイ市の今後の環境教育の展開について方向性の共有			
投入	人員：日本側：JOCV11名 その他 ベトナム側：小学校教員2名 その他3Rボランティア5名 資金：21,185,200 VND			
日程及び内容	Khuong Thuong 小学校		Hoang Hoa Tham 小学校	
	8/21～	E.E.準備開始	8/21～	E.E.準備開始
	8/25	学校側と1stミーティング	8/31	学校側と1stミーティング
	8/26～28	E.E.準備(アクティビティ作成)	9/1～7	E.E.準備
	9/1	2 <sup>nd</sup> ミーティング	9/8	レッスン1打合せ
	9/3～7	E.E.準備(E.E.ツール作成)	9/9	レッスン1実施
	9/8	レッスン1打合せ&リハーサル	9/10	レッスン2打合せ
	9/9	レッスン1実施、L2打合せ	9/11	レッスン2実施
	9/10	レッスン2リハーサル、L2実施	9/14	レッスン3打合せ
	9/11	レッスン3リハーサル、L3実施	9/15	レッスン3実施
	9/14	レッスン4レビュー打合せ	9/16	レッスン4打合せ
	9/15	レッスン4実施、レビュー打合せ	9/17	レッスン4実施
	9/16	レビュー実施、学年集会打合せ	9/18	レビュー実施
	9/17	学年集会での啓発活動の実施	9/21	全校集会での啓発活動の実施

## ■ レッスン 1 (40分)

**目的** ハノイ市の廃棄物の現状を知る【関心から知識へ】

### 内容

環境教育ツールを用いた参加体験型学習を通じて、ハノイ市の廃棄物の現状、Namson 埋立地について学んでいく。参加者は、本授業から自分たちの町の現状を知り、自分達の町を守る責任と環境保全の責任があることの認識と、そのための知識を得ることをねらいとする。

- ① 自己紹介(アイスブレイク)
- ② レッスン 1 の紹介(既存教科書 P.1-2)
- ③ 環境教育ゲーム(このまま廃棄物発生量が増加すると 2016 年にはハノイの埋立地が一杯になってしまう。現在と 2016 年の埋立地の状況を表したゲームを通して、児童が五感で体験する。)
- ④ レクチャー(教科書・新規ツールを使用してハノイと海外の廃棄物事情を比較。都市部で廃棄物をもたらすリスクについて体系的に学ぶ。)
- ⑤ まとめ(環境保全の責任があることの認識)
- ⑥ ミニテスト(本プログラム実施前と実施後の理解力を図る)

### 必要なもの

教科書『3R Education Text Book』(越語)、黒板、E.E.ゲーム(宝箱、布、笛)、写真パネル(ナムソン埋立地、ハノイ・ゴミカート、ミクロネシア埋立地、イタリア・ナポリ、シドニー・歩行者道、横浜・赤レンガ、岡山・収集ステーション)、ミニテスト

**実施場所** Khuong Thuong 小学校 4B クラス Hoang hoa Tham 小学校 5A クラス

**実施日時** 2009 年 9 月 9 日 9:40~10:20 2009 年 9 月 9 日 9:50~10:30



## ■ レッスン 2 (40分)

**目的** 「3R」を知り、分別ができるようになる。【知識から技能習得へ】

### 内容

環境教育ツールを用いた参加体験型学習を通じて、3種類のゴミ(Organic waste, Inorganic waste, Recyclable)と3R(Reduce, Reuse, Recycle)について学ぶ。参加者は、本授業からなぜ3種類のゴミに分ける必要があるのか、また3種類のゴミとは何かを学ぶ。またあわせて3Rについての知識を身につける。

- ① 前回授業の復習クイズ形式(アイスブレイク)
- ② レッスン2の紹介(既存教科書 P4-7)
- ③ レクチャー(教科書、新規ツールを使用して、「3種類のゴミについて学ぶ」→「3Rについて学ぶ」)
- ④ 環境教育ゲーム(ゴミの描かれたピクチャーカードを3種類のゴミに分ける。本ゲームを通じて各生徒が3種類のゴミについて正しく分別できるかを確認)
- ⑤ まとめ(3種類のゴミ、3Rに関する知識)

### 必要なもの

黒板、マグネット、笛、写真パネル(ナムソン埋立地、リサイクル品、コンポスト製品)、3Rパネル(Reduce, Reuse, Recycle)、ピクチャーカード(一組20種)

**実施場所** Khuong Thuong 小学校 4B クラス      Hoang hoa Tham 小学校 5A クラス

**実施日時** 2009年9月10日 10:20~11:00      2009年9月11日 9:50~10:30



## ■ レッスン3 (40分)

**目的** 正しいゴミ出し方法を習得する【技能習得から態度へ】

### 内容

環境教育ツールを用いた参加体験型学習を通じて、ゴミを出す時間・分別方法について学んでいく。参加者は、本授業から正しいゴミの出し方を習得し、今後ハノイ市全域に拡大する予定のゴミの分別収集参加への礎を築くことをねらいとする

- ① 前回授業の復習 クイズ形式 (アイスブレイク)
- ② レッスン3の紹介(既存教科書 P11)
- ③ E.E.ゲーム(一次収集・二次収集の仕組みを組み込んだ EE ゲームを通じて、分別することを疑似体験する。レッスン2よりも実践的な方法)
- ④ レクチャー(既存の3Rテキスト、新規ツールを利用し、具体的なゴミの出し方を学ぶと共に、家庭から出されたゴミがどのように処理されるのかを学ぶ)
- ⑤ まとめ(ゴミを捨てる際のルール知識)

### 必要なもの

パネル 3(Organic waste, Inorganic waste, Recyclable)、ゴミのピックアップカード A5 サイズ(ラミネート)、Review 用クイズパネル(ラミネート)、パネル1(ゴミステーションと回収員の写真、よリステーション及び悪いステーションの写真、コンポスト向上のゴミの山)、Master of Discharger ゲームキット(3色のバケツ・3色のザル・箸・ゴミリスト)

**実施場所** Khuong Thuong 小学校 4B クラス      Hoang hoa Tham 小学校 5A クラス  
**実施日時** 2009年9月11日 10:20~11:00      2009年9月15日 9:50~10:30



## ■ レッスン4 (40分)

**目的** 3Rを日常で実践する【態度から行動へ】

### 内容

環境教育ツールを用いた参加体験型学習を通じて、日常でできる 3R を学んでいく。参加者は、本授業からゴミ問題を身近な問題ととらえ、実践的な行動を行えるようにする。

- ① 前回授業のふりかえり(アイスブレイク)
- ② レッスン4の紹介・レクチャー(パネルを用い日本の事例を紹介。例:レジ袋有料化、スーパーでのリサイクルゴミ回収、マイ箸など)
- ③ E.E.ゲーム(日常的にできる3R活動は多く存在する。そのことをスゴロクボードでのゲームを通して習得)
- ④ まとめ(ゴミ問題を身近な問題として捉え、各個人がゴミ削減のためにできることを認識)

### 必要なもの

スゴロクボード、サイコロ、3Rに本の事例写真(ラミネート)

**実施場所** Khuong Thuong 小学校 4B クラス      Hoang hoa Tham 小学校 5A クラス

**実施日時** 2009年9月15日 10:20~11:00      2009年9月17日 9:50~10:30





## ■ レッスン 5 (40分)

**目的** すべてのレッスンをふりかえる

### 内容

レビューテストを実施し、知識の定着度の確認を行う。あわせて意識や認識が変わっているかの測定を行う。

- ① レッスン 1～4 のふりかえり(アイスブレイク)
- ② レビューテストの実施
- ③ E.E.ゲーム(もったいないダンスに合わせて創作ダンスを行う)←この間にレビューテストの採点。
- ④ 表彰(創作ダンスの優勝チーム、レビューテストの優秀者)
- ⑤ まとめ(環境教育ボランティアからの挨拶)

### 必要なもの

レビューテスト、エコバッグ

**実施場所** Khuong Thuong 小学校 4B クラス      Hoang hoa Tham 小学校 5A クラス

**実施日時** 2009 年 9 月 16 日 10:20～11:00      2009 年 9 月 18 日 9:50～10:30



## ■ 朝礼にて3R啓発活動（40分）

**目的** 環境教育ボランティアの活動紹介

### 内容

- ① 花の交換（プロジェクト代表者、学校長）
- ② レクチャー（簡単に3Rについて説明）
- ③ クイズ大会（3Rに関するクイズを出題）
- ④ もったいないダンス（もったいないダンスを踊り、3Rの啓発を行う）
- ⑤ まとめ（エコバッグの利用やゴミの分別などの参加を促す）

### 必要なもの

Mottainai Book、PET ボトル、エコバッグ

**実施場所** Khuong Thuong 小学校 4B クラス Hoang hoa Tham 小学校 5A クラス

**実施日時** 2009年9月21日 8:20～8:30 2009年9月21日 8:00～8:30



## BOX 8 企画のツボ

あなたの企画が「思い込み企画・独りよがり企画」にならないために、企画の基本をまとめてみました。

### ■ 思い+ポテンシャル分析

＋マーケット分析＝コンセプト

#### ①思いがなくなっちゃ始まらない

「こうしたい」という思いは企画実施者であるあなたの思いもありますが、その事業の主催者の思いもあるでしょう。客観性を持つために明文化することが大切です。

#### ②手の内のポテンシャルを把握する

地域にある(手の内の)資源(自然、施設、協力者、人的資源、資金)をよく調べましょう。自分一人で背負いこまないように。

#### ③教育の対象者をよく理解する

誰に教育イベント(プログラム・カリキュラム)を実施するのか。対象者をよく知ることは不可欠です。対象者の理解が深まればプログラムは自然に湧いて出てきます。

#### ④上記①＋②＋③＝コンセプト(中心概念)。その事業で実現したいこと。

上記①と②と③を足してコンセプトを書きます。コンセプトとは旗印です。このイベントで実現したいことを短い言葉で表現します。スタッフ間での確認のためにも、募集型プロ

グラムの場合にはコンセプトが上手にプログラムタイトルになれば主催者が何を実現しようとしているのか明確になります。

### ■ コンセプト実現のための6W2Hの確認

コンセプトの実現のために、When(いつ)、Where(どこで)、Who(誰が)、Whom(誰に)、What(何を)、How(どう)を考えます。いわゆる5W1Hと呼ばれるものです。これにあと一つずつ、WとHを足しましょう。What for(何のために)、How much(いくらで)、これで6W2Hです。この6W2Hは全て、コンセプトの実現のために適切かを考えます。コンセプトと6W2Hとの間に齟齬があったら、6W2Hかコンセプトを考え直します。

川嶋 直

財団法人キープ協会環境教育事業部  
シニアアドバイザー



## 5. 先輩ボランティアの活動いろいろ

先輩ボランティアは、さまざまな工夫をこらしながら活動を展開してきました。ここでは実際に実施された活動をもとに、いくつかの切り口をご紹介します。

### 1. アートの力

アートのもつ人々をひきつける力、つなげる力、楽しくする力を生かした活動は、環境教育ボランティアの間でも多く実践されています。

「絵画コンテスト」「ポスターコンテスト」は、入賞者の作品をどのように活用するかも工夫のしどころです。入賞作品をカレンダーなどの日常の中で使うものに掲載すれば、環境のメッセージを長く目にする機会につなげることができます。

「ゴミ箱」や「コンポスト」も、アートにすれば、とても楽しくなります。2009年のサモア沖地震後の津波の被害を受けたサモアでは「廃物アート」使った地域の人を元気づける活動が実施されました。被害のなかった小学校で被災地の状況を伝え、防災の話しながら被災後に残ったゴミを紹介し衛生やゴミの啓発活動を行いました。さらに、80名の子どもの協力で450本のペットボトルを使って被災地にプレゼントするクリスマスツリーを製作しました。みんなのカウントダウンでライトアップをして、明るいクリスマスのムードをつくり

ました(JICA 2009)。

### 2. 音楽の力

「環境ソング」をつくって広めたり、環境イベントに音楽的な要素を取り入れて盛り上げたりする取り組みも多くあります。ボランティア同士で楽団をつくって登場するのも楽しいですね。インドネシアでは「3R音頭コンテスト」を企画したら、30校以上もの学校が応募して大盛況でした。

誰もが知っている曲の替え歌で環境メッセージを伝えるというのも、親しみやすくてよい方法です。

### 3. 日本の文化・経験

日本の文化や経験を環境教育から始めて実践する事例も多くあります。日本が経験してきた「公害や消費社会の弊害」「生活改善運動」「廃棄物に対する取り組み」を紹介したり、「ふろしき」「紙すき」「折り紙」など日本文化をとり入れた環境教育を実践したりしています。

「モットイナイ」という言葉と考え方を伝えていこうという活動もあります。ベトナムやマーシャルでは、モットイナイソング、モットイナイダンス、モットイナイワークショップ、モットイナイハンドブックなどさまざまな活動が行われました。

## 4. 調査・視察

現地の廃棄物や衛生問題の現状をしっかりと調査し、それを現地団体や後任のボランティア、プロジェクトに引き継ぐことも立派な活動です。参加型の調査方法を取り入れてカウンターパートや市民もまきこんでいくことも検討してみてください。また、調査結果をどのように共有・活用していくかも知恵の出どころです。

市内の廃棄物回収業者をほぼすべて探し回り、売れるゴミの種類と値段・所在地・連絡先をリーフレットとポスターにしてワークショップで配布し、それをきっかけにして地元の教会が廃棄物回収活動をスタートしたという成果をあげた実践もあります。CP や関係者とともに処分場を訪ね、現状を目の当たりにする「処分場ツアー」を実践した事例もあちこちで行われています。

## 5. 経済的なインセンティブ

資金集めにつなげる工夫も大事です。分別回収で集めたゴミを回収業者に引き取ってもらい、売上でグループが必要なものを買う仕組みをつくらせたり、「リサイクルバンク」で「いらぬ人」と「ほしい人」をつなげたりといった活動が考えられます。他にも、リサイクル手工芸で小規模な収入源を確保したり、「有機ゴミ」「無機ゴミ」の表示をやめて「売れるゴミ」「売れないゴミ」表示に切り替えたり、クリエイティブな発想で活動を展開していきましょう。

## 6. 連携・交流

環境教育ボランティア同士や他職種のボランティアとの連携も非常に有効です。手工芸のボランティアと連携したネパールの「エコバッグプロジェクト」、職種の違うボランティアがアイデアや知識・イラストなどの技能をもちよって作成した「ポリビアのための環境教育ガイドブック」、任地の異なる環境教育ボランティアと一斉にイベントを実施することで社会的なインパクトをあげる工夫をした「ミクロネシア環境週間」企画など、効果的な連携事例がいくつもあります。

インドネシアの環境分科会は、環境教育以外にも青少年活動・野菜栽培・理数科教師・栄養士などの多様な職種のメンバーで構成され、有機農場や最終処分場、プラスチックゴミから鞆やゴミ・小物を作っている工房の見学や、専門家を呼んでの講演会、CP を連れてのセミナー開催、メーリングリストでの情報交換、そして合同で実施するイベントなど、実に多様な活動を行っています。

お互いのイベントを手伝うというところから、新しいアイデアが生まれてくることもあります。ボランティア間のネットワークもぜひ活用してみましょう。

## 7. 広報・啓発

ホームページ・ポスター・ステッカー・ニュースレター・集会でのアピール・ラジオなどさまざまな広報、啓発手法があります。

書き手も読み手も高校生という「環境フリーペーパー」の取り組みは、読み手にとっては環境情報を得るツールになり、記者になった学生たちにとっては、作文技術・論理的な考え方・取材能力・パソコン技術など環境啓発以外の多くの力を身に

付けることができる総合的な「学びの場」となったそうです。

拡声器を持って、地域の人々にメッセージを伝えながら練り歩くという広報手段もあります。たとえばゴミ収集の日に、収集場所などをアナウンスしながら街を歩くと、後ろには子どもたちがぐっついてきて、一緒に大声でアピールしてくれるかもしれません



## BOX 9 一緒に活動する団体をさがす

### ■ 活動の進みやすい団体とは

任期前半、私はあるコミュニティでの活動を通して、活動が進みやすい団体と進みづらい団体がある事に気づきました。極端に言ってしまうと独裁的な団体の場合、活動は進みません。リーダーとメンバーの意向が異なってもメンバーはなんとなく言う通りにさせられており、日頃から受身である彼らは面と向かって不満を口にしないため外部のボランティアや配属先にはその不満が見えてきません。メンバーの不満はシラケに変わり、団体として活性化しません。「全ての活動はリーダー次第」と言われていましたが、強いしがらみの中でもメンバーに自由な話し合いをさせる勇気のあるリーダーが必須なのだ、私は解釈しています。

### ■ 学校への巡回活動

学校での集団回収を企画した私は、幼稚園を含めた8校へ参加呼びかけの巡回を始めました。とにかく「オープンに何でも話したい」とまず自分から伝えるようにし、また、日本の学校での廃品回収の歴史や任国で行われるゴミ銀行について写真と絵で紹介して集団回収のイメージを持ってもらえるよう努力しました。8校の反応は様々で、「素敵だ、是非やってみよう！」と言って参加を決めてくれたのは小学校1校と幼稚園1校でした。

### ■ 先生たちとのワークショップ

後日新しい活動場所へ赴き、「どのように廃品回収を実現させるか、どのようなシステムがこの学校に向いているか」というテーマでブレインストーミングを行い、自分たちのモデルを作ってもらったワークショップを実施しました。この時、主に回収対象となるゴミの種類、参加対象者、収入の使い道などが話し合われました。

小学校では、校内で販売する飲料のペットボトルとコップ型プラスチック・紙ゴミを回収、原則的に校内のゴミだけを扱うが定期的に家庭ゴミの受け入れも実施、収入は学校の活動に使用という方針になりました。

幼稚園では、給食用食材の包装材(厚紙やプラスチック)を全て回収、園内ゴミと教師たちの家庭ゴミを対象とし、保護者にも参加を呼びかけ、参加する保護者獲得のため、保護者が持ち込むゴミに関しては収入の一部を返還するなどのアイデアが出ました。

### ■ 各学校での展開

この後、それぞれの活動場所で活動チームが作られました。彼らは希望の回収業者を自力で見つけ、以後それぞれの活動計画が展開されていきました。

## BOX 9

小学校では、活動チームが「有機・無機」のゴミ箱表示を「売れるゴミ・売れないゴミ」に換えて全校で新しい分別に取り組みはじめました。毎週約10人の生徒が対象となる家庭ゴミを持ち込み始め、ゴミについての定期的な授業を実施するなどの発展がありました。

幼稚園では、園児と一緒に回収業社を訪れる遠足を企画しても、1人を除き全ての教師が家ゴミを持参せず、活動が停滞している様子でした。自分たちで計画を立てても、出来ないことまで計画してしまう事があるようで、明らかに暗い雰囲気になっていたため、PDCAアクションプランの勉強会を開き、「実行と再計画を繰り返して、一番合うプランを作っていく」ということを理解してもらうことに力を入れました。結果、①園内のゴミをメインに回収、②教師や保護者は好きな時に参加できる、③収入は幼稚園で使用するという、よりシンプルなシステムで活動を再開させることになりました。

### ■ 団体のキャラクターをみる

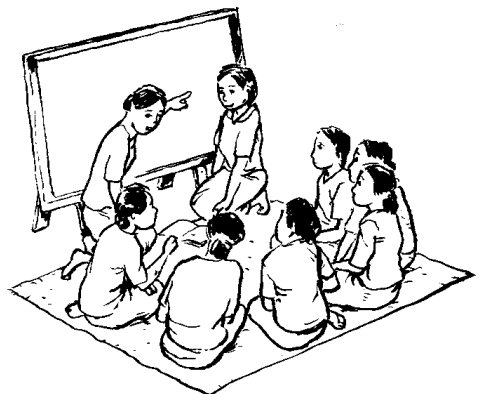
配属先が考える「目標」と、一般生活者の「現状」の開きの大きさを実感しました。現状

の改善を行うはずの配属先は現状を見ようとせず、このような活動に対して「一番よい方法とは言えない」というようなことを言う人もいました。確かに大きな活動にはならなりませんでしたが、本来教師である活動メンバー自身で計画を立てて活動していった事で、実践的な活動ができたと思います。

この活動で教師たちに自由な活動案と自発的な行動があったのは、活動チームのキャラクターによるところが多かったように思います。みんなでオープンに話し合うこと、またそれができる団体を選ぶ事は、小さくても成果を得るためには大事であると思います。

森 美佐子

インドネシア・環境教育・H20年度派遣





## NOTES

## 第5章

# 活動アイデアボックス



**活** 動の引き出しを増やしましょう！この章では、短い時間で場を活気づけたり集中させたりするのに活用できるシンプルなゲームや、生活系環境問題に活用できそうなアクティビティを紹介していきます。ぜひ、みなさんの活動のヒントにしてください。現地の遊びと組み合わせたり、地域の文化に合わせて応用したりしてみましょう。

# 1. アイスブレイクいろいろ

## 1. アイスブレイクとは？

活動のはじまりは、参加者も指導者も少し緊張していることが多いものです。参加者が、「これからはじまることはおもしろいのだろうか？」「自分ではうまくやれるのだろうか？」「この指導者は信頼できるのだろうか？」と少し不安に思っているいっぽうで、指導者側も、「みんなに受け入れてもらえるだろうか？」「果たしてうまくいくのだろうか？」と、内心プレッシャーを感じていることはよくあることです。

そんな双方の心の固まった状態を氷（アイス）にたとえ、氷を壊して（ブレイク）、リラックスした楽しい雰囲気をつくり出すのがアイスブレイクの活動です。アイスブレイクは、活動への不安を和らげ、参加者同士や指導者との打ち解けた関係をつくり、続く活動への意欲を高め、主体的なかかわりを促す役目を持っています。

## 2. 以外な落とし穴

### (1) ジャンケン

ジャンケンを使った活動は、日本ではとてもポピュラーで楽しいものです。他国でも同じような発想の遊びがある場合は、活用しやすい一方、ジャンケンにあたるものがない地域では、どれがどれに勝つというじゃんけんのルールを理解してもらうことが難しく、予想以上に時間がかかったり、混乱したりしてしまう場合があります。

### (2) スキンシップ

スキンシップの方法は、文化によってさまざまです。男女が手をつなぐことや身体の接触は避けるという文化もあるので、事前に現地の人に確認しておきましょう。

### (3) 読み書き

文字の読み書きを含む活動を実施する場合は、読み書きができない人がいないか事前の確認が必要です。年齢的なばらつきがある場合も注意しましょう。読み書きができない人が混じっている場合は、その活動は行わない、活動を選択できるようにする、または書けない人へのフォローを入れるなど、工夫をしてください。

### (4) 盛り上がりすぎ

アイスブレイクが盛り上がり過ぎて、後の活動に集中できないような心理状態になっては本末転倒です。メインの活動に向けての導入と考え、適切なムードをつくるよう心がけてください。

## 3. 地元の遊びをとりにいよう

みなさんの派遣される地域でも、楽しいアイスブレイクになるようなゲーム・歌・踊りなどがあるはずですよ。誰もが知っているので苦勞なしに盛り上がります。現地の仲間に担当してもらって、教えてもらうなどして、大いに活用してください。

この節では、誰でも簡単に実施でき、道具もほとんどいらない活動を集めてみました。にぎやかな活動だけでなく、参加者の集中力を高めたり、雰囲気落ち着かせたり、表現する楽しさを経験してもらったりする活動もあります。

アクティビティ毎に、ねらい・場所・人数・時間・対象が示されていますが、あくまでも適正条件としての目安です。「準備

するもの」で「△」マークがついている場合は、状況によって使うか使わないか選択するものを示しています。取り上げるトピックや導入・ふりかえりの仕方次第で、異なるねらいをもたせることもでき、必要とされる時間も変わってきます。参加者の人数が多い場合は、グループに分ける、わかちあいの仕方を工夫する、指導の補助者を入れるなどして、対応してください。

### ■ アクティビティ目次

1. ネームトス.....	116	10. ナイフとフォーク.....	124
2. アクションまわし.....	117	11. 情報バスケット.....	125
3. ぱちぱちインパルス.....	118	12. 宇宙船地球号.....	126
4. お題自己紹介.....	119	13. はっばっば.....	127
5. ルックダウン・ルックアップ.....	120	14. 変化さがし.....	128
6. パス.....	121	15. からだ文字.....	129
7. 番号！.....	122	16. 通り雨.....	130
8. いっぱい握手.....	122	17. クイックチェック.....	131
9. ラインアップ.....	123		

### ■ アイスブレイクのアダプテーション

あなたが活動する地域の自然・宗教・文化などを考慮しながら、各アクティビティのその地域での留意点や展開・応用・発展例を考えてみましょう。



## ネームトス

### ■ 手順

1. 輪をつくり、自分呼ばれたい名前(ニックネームなど)を順番に発表する。
2. 最初の人(例: 指導者)がボールを持ち、『○○です(自分の名前)。△△さん(ボールを投げる相手の名前)、ボールいきます。』と言って投げる。
3. 受け取った人は、『○○さんありがとう。私は△△です。□□さん、ボールいきます。』と言い、ボールを投げる。
4. できるだけまだボールを受け取っていない人にボールを投げながら、繰り返す。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・慣れてきたらボールを増やしてみましょう。
- ・投げるものを途中でかえていくのもおもしろいでしょう(風船、タオルなど変化のあるものがおすすめ)。
- ・投げるものを想像で実施することもできます。はじめはボール、次はビー玉、その次は生卵、サボテン、という風に。

### ねらい:

- ・名前を覚える
- ・打ち解ける

### 場所:

- ・円になれる場所

人数: 10人以上

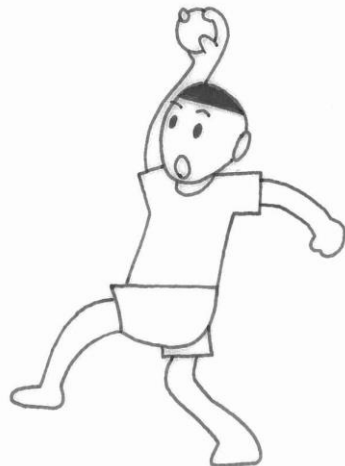
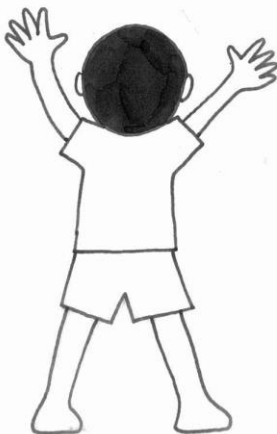
時間: 10分以上

対象: 7歳以上

### 準備するもの:

- ・ボール(または何か投げられるもの)

出典: みんなのPA系ゲーム 243 ほか





## アクションまわし

### ■ 手順 1

1. 輪になる。
2. 最初の人(例:指導者など)は、となりの人に向かって声(例:『ニャ～オ!』)をまわす。
3. となりの人は、そのとなりの人に同じ声をまわす。こうして一方向に声をまわしていく。
4. 慣れてきたら、誰でもいつでも方向を逆まわしにできる。できるだけ早くまわすようにしてスピード感を出すと盛り上がる。
5. 最初に声を出す人を変えながら、何度か繰り返す。

### ■ 手順 2

1. 声にポーズもつけてまわしていく。相手の表現をしっかり見て真似すること。スピードが遅くならないように気をつけるとよい。
2. 慣れてきたら、1つ目のポーズと声をまわしている途中に、2つ目のポーズと声を加える。
3. 3つ目、4つ目のポーズと声をまわす。それぞれのポーズと声は、違う大きさ、ニュアンスのものを工夫して楽しむ。それぞれのポーズや声がなくならないように、しっかりと表現することがポイント。

### ■ 手順 3

1. 誰でもいつでも方向を逆回しにできる。
2. 可能であれば、反対まわりになるとき、方向を変えた人はポーズと声を全く違うものにする。あまり考えすぎで行うとペースが落ちて楽しいリズムが損なわれるため、難しいと思ったら簡単なやり方に戻す。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 声やポーズのテーマを、動物や昆虫などにすれば、自然系の活動の導入としても使えます。モンスターなどにすると発想が広がって楽しく盛り上がりやすい。
- ・ 声や動作を日本語(例:『こんにちは!』『元気?』『ありがとう』など)にすれば、異文化に触れる要素も加えられます。

#### ねらい:

- ・ 心と身体をほぐす
- ・ 表現を楽しみあう関係づくり
- ・ 柔軟性を養い、瞬発力を楽しむ

#### 場所:

- ・ 円になれる場所

人数: 10人以上

時間: 10分以上

対象: 5歳以上

出典: インプログラム 身体表現の即興ワークショップ



# ぱちぱちインパルス

## ■ 手順

1. 輪になる。
2. 指導者は、『私と同じ動作を隣の人に順々に送って行ってください。』と言って、拍手を 1 回『ぱち！』と左右どちらかの人に送り、参加者は順々に隣にまわす。
3. 指導者のところに拍手が戻ってきたら、『今度はもっと速くまわしましょう。』と言って、拍手を『ぱち！』。
4. 『もっと速く、1 周で終わらないでどんどんまわしましょう』と言い、途中で『もっと、もっと速く！』と、参加者を盛り上げる。
5. 『次は拍手を 2 回にします。』と言って、『ぱち、ぱち！』をまわす。
6. スピードがのってきたら、『拍手 2 回の後に足踏みを 1 回入れます。』と言って、『ぱち、ぱち、ドン！』をまわす。
7. 「拍手 2 回、足踏み 2 回」「5 秒ぐらいの間隔を置いて、ウエーブのように次々に信号（インパルス）を発信」「信号の発信間隔の短縮」など、難易度を上げていきます。

ねらい:

・打ち解ける

場所:

・円になれる場所

人数: 10 人以上

時間: 10 分以上

対象: 5 歳以上

## ■ 展開・応用・発展例

- ・ 何秒で信号を 1 周ませるかを計って、上達や目標達成を楽しむ活動にもできます。
- ・ 左右同時にまわして、信号がぶつかった人は『ワーオ！』と叫ぶやり方も加えると、盛り上がります。
- ・ 手をつないで、黙ってギュッと手を握り「ギュツ信号」をまわす活動にすると、静かに参加者の集中力を高める活動となります。男女が握手することがタブーな地域では、グループを分けて実施しましょう。

出典: グループのちからを生かす





## お題自己紹介

### ■ 手順

1. 自己紹介するにあたり、あるお題を提示する。
2. 指導者が見本で、お題にそった自己紹介をする。
3. 順番にお題を含んだ自己紹介をする。

### 【お題の例】

自分を動物にたとえると、もしも生まれかわるとしたら、大好きな食べ物、最近あった嬉しいこと、村の中で一番好きな場所、将来の夢、今の気持ちを一言で、など。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 紙に絵や単語を書いて、見せながら実施し、後で掲示するなどの方法もあります。
- ・ お題を具体的な「もの」を使って、実施してもよいでしょう(例: 宝物をひとつ家から持ってくる、あたりを歩いて自分を表すのにぴったりのものをひとつ捨ってくる、仕事の道具を紹介、など)。状況にあわせてお題を工夫してみると楽しいです。
- ・ 自己紹介の最後に自分を表すポーズをして、みんながそれをまねするというのも楽しいです。

### ■ 留意点

- ・ 参加者の人数にあわせて、お題を選ぶ必要があります。大人数の場合は、話が長くなるようなお題にすると、途中で飽きてきてしまいます。

### ねらい:

・ お互いを知り合う

**場所:** どこでも

**人数:** 5人以上

**時間:** 10分以上

**対象:** 7歳以上





# ルックダウン・ルックアップ

## ■ 手順

1. 輪になる。
2. 指導者が『ルックダウン！』といったら、全員下を向く。
3. 指導者が『ルックアップ！』といったら、全員上を向く。
4. 『キャッチ！』といったら、全員輪の中の誰かの目を見る。
5. 誰かと目が合った人は、『キャ〜！』と叫びながら、輪から飛び出す。
6. 目が合わなかった人が残り、輪を小さくしながら繰り返す。

**ねらい:**

- ・打ち解ける

**場所:**

- ・円になれる場所

**人数:** 10人以上

**時間:** 5分以上

**対象:** 5歳以上

## ■ 展開・応用・発展例

- ・慣れてきたら、誰でも自由に「ルックダウン」「ルックアップ」「キャッチ」の掛け声をかけてもよいルールにしてもよいでしょう。
- ・目が合った者同士でペアになれるので、ペアをつくる活動の前に実施するのも有効です。

## ■ 留意点

- ・目を合わせることができるまで時間がかかる人たちもいます。そのような対象者の場合は、ある程度打ち解けてから実施するようにしましょう。

出典: みんなの PA 系ゲーム 243 ほか





## バス

### ■ 手順

1. あるカテゴリーを提示する。
2. 参加者同士でやりとりをしながら、共通点のある人とグループをつくる。
3. グループができあがったら、各グループに、自分たちはどういうグループか発表してもらう。
4. カテゴリーをかえながら、何度か繰り返す。

#### 【カテゴリーの例】

男女、誕生日、家族の数、朝起きた時間、飼っている生き物、職業、好きな科目、趣味や好きなこと、得意なこと、宝物、特別な経験(その後の活動に関連する経験など)、参加の動機、最近困っていること、など

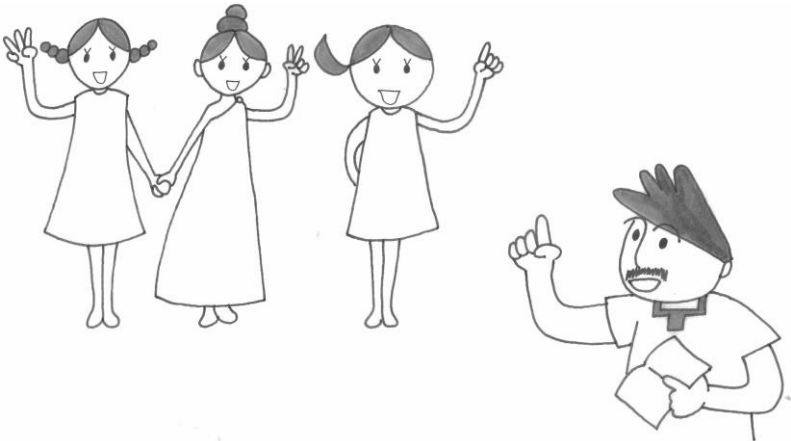
### ■ 展開・応用・発展例

- ・ カテゴリー分けから見えてくることを話題にしてテーマを深めたり、次の活動につなげたりできます。

### ■ 留意点

- ・ 宗教・人種・民族・階級・カースト・組織における地位・収入などについては、恥辱的であったり、不和を生じさせたりする可能性もあるので注意しましょう。

出典：参加型ワークショップ入門 ほか



#### ねらい:

- ・ 打ち解ける
- ・ お互いを知る

#### 場所:

- ・ 動きまわられる場所

人数: 10人以上

時間: 10分以上

対象: 7歳以上



## 番号！

### ■ 手順

1. グループで、1 から順番に番号をカウントしていく。一人 1 回ずつ、好きなときに、次の番号を言うことができる。誰かと声が重なったら 1 からやり直す。番号以外の声を出すこと、目で合図することは不可。
2. 全員が番号を言うことができたら、目標の数を増やしていく。目をつぶったり、歩いたりしながら実施するなど難易度を高くしていく。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 人数が多い場合は、ひとり 1 回よりも、最初から目標数(10 ぐらいから)を決めて実施するとよいでしょう。
- ・ 慣れてきたら、番号の代わりに、簡単な問題を出して回答するという形も可能です(例: 校庭にあるもの、村にいる動物、ゴミになるものなど)。
- ・ うまく最後の番号までいかない場合は、どうしたらうまくいかかアイデアを出し合い、再チャレンジしてください。

出典: みんなの PA 系ゲーム 243 ほか

### ねらい:

- ・ 集中力を高める
- ・ グループの一体感をつくる

場所: どこでも

人数: 5 人以上

時間: 5 分以上

対象: 7 歳以上



## いっぱい握手

### ■ 手順

- ・ 席を移動せずに何人に握手できるかチャレンジする。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 席が移動しにくい場合のアイスブレイクとして効果的です。講義の途中のリラックスや、バスでの移動中でもできます。

### ■ 留意点

- ・ 男女が握手することがタブーな地域では、同性に何人握手できるかというように課題を変化させるなど配慮しましょう。



### ねらい:

- ・ 打ち解ける

場所: どこでも

人数: 10 人以上

時間: 3 分以上

対象: 5 歳以上



## ラインアップ

### ■ 手順

1. お題を出し、参加者にそのお題にあわせた順番に並んでもらう（円形でも1列でも可）。
2. それぞれお題について発表する。

### 【お題の例】

誕生日の順、自分の名前や住んでいる村のアルファベット順、一緒に住んでいる家族の人数順、飼っている生き物の数順、出身地の北から南、家から会場までの距離順、朝起きた時間順、きのうの睡眠時間順、体調のよい順、好きな生き物の大きさ順、手(足・身長・目)の大きさ順、手のひらの温かい順、など

### ねらい:

- ・打ち解ける
- ・お互いを知る

### 場所:

- ・動きまわれる場所

**人数:** 8人以上

**時間:** 10分以上

**対象:** 5歳以上

### ■ 展開・応用・発展例

- ・「言葉を使わない」というルールを加えると、難易度をあげることができます。
- ・「家から会場までの距離の順」のお題のあとに自分の地域の様子を説明してもらったり、「朝起きた時間順」のあとに朝起きてすぐのことを話してもらったりするなど、発表の後にインタビューを入れると、さまざまことが共有できます。
- ・後に続く活動につながるお題を選べば、次の活動へのよい導入になります。
- ・スタッフが参加者の情報を収集する機会としても有効です。

### ■ 留意点

- ・オープンに共有することが不適なお題ではないか配慮しましょう。一般的には年齢・体重・収入などのお題は避けた方がよいでしょう。

出典: みんなの PA 系ゲーム 243 ほか



## ナイフとフォーク

### ■ 手順

1. ペアをつくる。
2. 指導者がお題を出し、10 数えるまでに、言葉を使わずにお題の形をジェスチャーでつくってもらおう。
3. テンポよくお題をかえて、繰り返す。

### 【お題の例】

ナイフとフォーク、マッチと火、ネコとネズミ、家畜と農夫、ゴミとゴミ箱、水溜りと蚊、生ゴミと微生物、など

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ タイトルに感情をつけるのもおもしろいです(例: 仲よしの花瓶と花、情熱的なマッチと火、笑い上戸のゴミ箱と空き缶など)。
- ・ 4~6 人のグループや、全員でひとつのものや、状況をつくることもできます(例: 台所、公園、結婚式、おばあさんの 100 歳を祝うパーティ、環境イベント、村の清掃活動など)。

出典: インプログラム 身体表現の即興ワークショップ

### ねらい:

- ・ 心と身体をほぐす
- ・ 表現のバリアを解き、表現を楽しみあう
- ・ 発想の違いを楽しむ

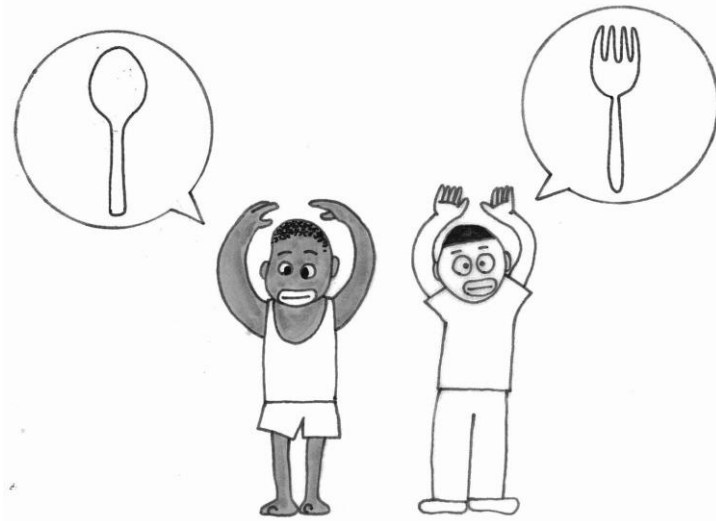
### 場所:

- ・ 動き回れる場所

人数: 8人以上

時間: 5分以上

対象: 7歳以上





## 情報バスケット

### ■ 手順

1. イスを輪にして置き、全員座る。
2. 指導者が質問を出し、その質問にあてはまる人はイスから立って別のイスに急いで移動する。
3. 何問か実施したら、指導者のイスを輪から外す。
4. 同じように質問を出すと、一人座れない人がでてくるので、その人が次の質問者となる(質問をつくるのが難しいときは質問カードを渡す)。
5. 質問と移動をくりかえしながら、お互いを知り、情報を共有しよう。

### 【質問の例】

男性、髪の毛が肩より長い人、赤い色を身につけている人、一緒に暮らす家族が10人以上の人、学校に通うのに1時間以上かかる人、家畜を飼っている人、家にゴミ箱がある人、道に捨てたゴミがどこにいくか知っている人など。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ イスを移動した後や最後のまとめの時に、その質問について少しやりとりしたり、短い情報を加えたりしながら、その後の活動に生かせる情報を共有するとよいでしょう。



### ねらい:

- ・ 打ち解ける
- ・ 情報を共有する

### 場所:

- ・ 円になれる場所

人数: 10人以上

時間: 10分以上

対象: 5歳以上

### 準備するもの:

- ・ イス(人数分)
- ・ 質問カード



# 宇宙船地球号

## ■ 手順

1. ロープを輪にして地面に置く(初めは、無理なく全員が入れる大きさにする)。
2. 全員が輪の中に 10 秒間留まるにはどうすればいいか話し合ってもらおう。
3. 合図とともに、全員がロープを踏まずに輪の中に 10 秒間留まることができれば成功。
4. 『みなさんは森に暮らす動物たちです。森が伐採されて広さが昔の3分の2になってしまいました。』など、環境に関する話をしながら、ロープの輪を小さくしていく。
5. グループで協力して、全員がロープの中に入る。
6. エピソードをつけ加えながら、ロープの輪を小さくしていき、全員が入れる難易度を上げていく。
7. 何回か実施し、気づいたことを話しあう。

## ■ 展開・応用・発展例

- ・ 気候変動で氷がとけて陸地が減る、ゴミを投棄する場所が増えて人の安全に暮らせる場所が少なくなるなど、テーマにあわせてストーリーをつくって実施できます。
- ・ 「人口増加」をテーマとする場合は、輪の大きさは固定で、入る人数を少人数からだんだんに増やして、最後はうまく入りきらないように設定するとよいでしょう。

## ■ 展開・応用・発展例

- ・ 身体の接触について抵抗感がないグループであるか事前に確認しておきましょう。文化的背景や年齢、親密度によって変わってきます。

出典：中学校での「総合的な学習の時間」に役立つ  
自然体験アクティビティ集 ほか

### ねらい:

- ・ チームワークづくり
- ・ 環境問題について考える

**場所:** 平坦な場所

**人数:** 10人以上

**時間:** 10分以上

**対象:** 10歳以上



## はっぱっぱ

### ■ 手順

1. 違う種類の葉っぱを各自で 5 枚程度拾ってくる(事前に指導者が集めておいてもよい)。
2. 自由にペアになる。
3. 指導者が葉っぱに関するお題を出し、参加者は 1 番お題に近い葉っぱを選ぶ(例: 大きな葉っぱ、虫にくわれている葉っぱ、ちくちくする葉っぱなど)。
4. 指導者の『せーの!』の合図で、参加者は『はっぱっぱ!』と掛け声をかけて、選んだ葉っぱを差し出し、相手と比べあう。
5. よりお題に近い方が勝ち。負けの方は、葉っぱを相手に渡す。
6. 相手を変えながら何度か繰り返す。
7. 1 番たくさん葉っぱを集めた人が勝ち。
8. 葉っぱについて、よく観察することについて、気づいたことを紹介しあう。

### ねらい:

- ・打ち解ける
- ・新しいことに気づく
- ・自然物に親しむ

**場所:** どこでも

**人数:** 2 人以上  
(10 人以上がおすすめ)

**時間:** 10 分以上

**対象:** 5 歳以上

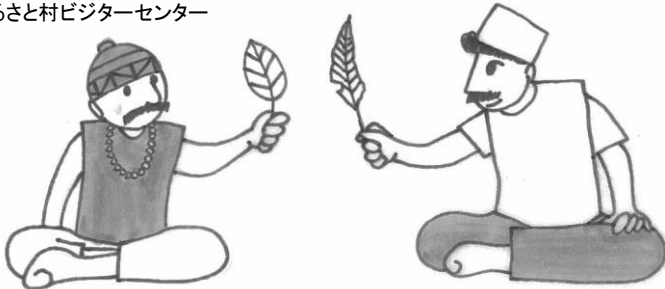
### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 葉っぱ以外にも、石や木の実、その他いろいろな自然物で実施できます。お題の工夫をしてみてください。
- ・ まとめで、虫に食われた葉っぱから小さな虫が葉っぱを分解することを話し、コンポストの分解へと、話をつなげることもできます。ねらいに応じたまとめをしてみましょう。

### ■ 留意点

- ・ 勝ち負けは、あくまで楽しく活動するためのものです。「よく見ること」で「気づく」ことに焦点を置くようにしましょう。

出典:平成 12 年環境教育活動報告書:  
山のふるさと村ビジターセンター







## 変化さがし

### ■ 手順

1. 指導者が参加者の前に立ち、参加者によく観察してもらう。
2. 参加者に後ろを向いてもらい、その間に自分の外見を何箇所か変化させる(例: ボタンをひとつはずす、腕まくりをする、靴を反対に履くなど)。
3. 参加者にもう一度観察してもらい、変化したところをあててもらおう。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 一度全体で実施した後に、ペアで行って見るのもよいでしょう。
- ・ 「ゴミが散らばっている場所とゴミが減っている様子」「同じ場所の昔と今」など、2つの写真の変化を見つけるような活動つなげることもできます。

出典: 中学校での「総合的な学習の時間」に役立つ自然体験アクティビティ集 ほか

### ねらい:

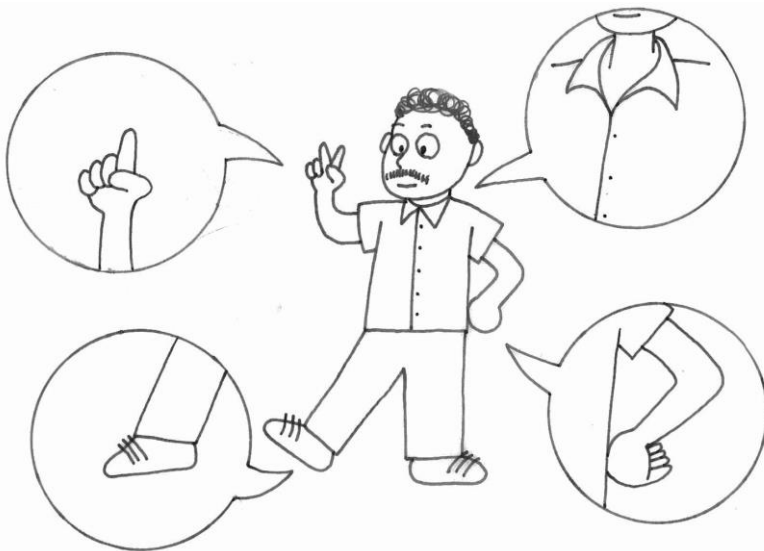
- ・ 観察力高める
- ・ 集中力を高める

場所: どこでも

人数: 2人以上

時間: 5分以上

対象: 5歳以上





## からだ文字

### ■ 手順

1. からだの一部を使って文字を書いて単語をつくり、見ている人が答えをあてる。まずは指導者がからだで文字を書く見本を見せる。
2. 使うからだの部分(例:頭、鼻、肘、肩、臍、尻など)を指定し、からだ文字をつくる人を変えながら繰り返す。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ グループ活動にして、答えをあてる速さを競ってもいいでしょう。
- ・ お題を指導者から指定してもよいでしょう(例:動物、食べ物、教室にあるものなど)
- ・ 次の活動へのつながりをつくることもできます。(例:次にビデオ上映をするときには、最後の単語を「ビデオのタイトル」にするなど)

### ■ 留意点

- ・ 文字の読めない人がいる場合は不適です。
- ・ その地域で社会的に受け入れられるからだの部分を使って実施してください。

### ねらい:

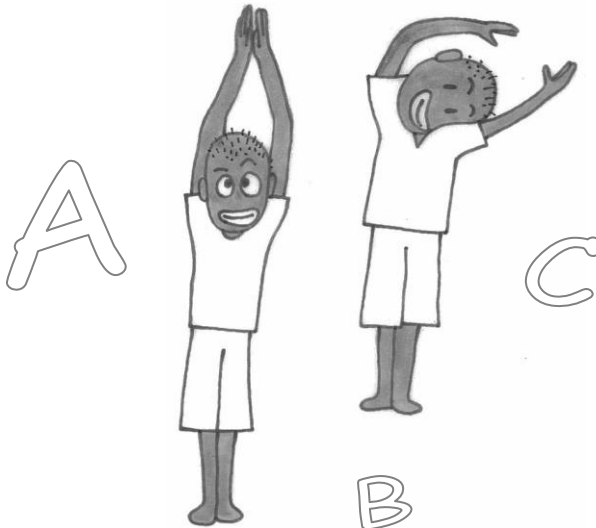
・ 打ち解ける

**場所:** どこでも

**人数:** 5人以上

**時間:** 5分以上

**対象:** 5歳以上





# 通り雨

## ■ 手順

1. 指導者に続いて、順番にからだを叩きながら音を出していく。
  - ①指をこする(=小雨)
  - ②指を鳴らす(=しずくのはねる音)
  - ③腿を叩く(=本降り)
  - ④足で床を踏み鳴らす(=激しい風雨)
  - ⑤腿を叩く(=本降り)
  - ⑥指を鳴らす(=しずくのはねる音)
  - ⑦指をこする(=小雨)
2. タ立が遠くから迫り、去っていくような音になり、最後は静けさを味わう。

## ねらい:

- ・気持ちを落ち着ける
- ・グループの一体感をつくる

**場所:** どこでも

**人数:** 10人以上

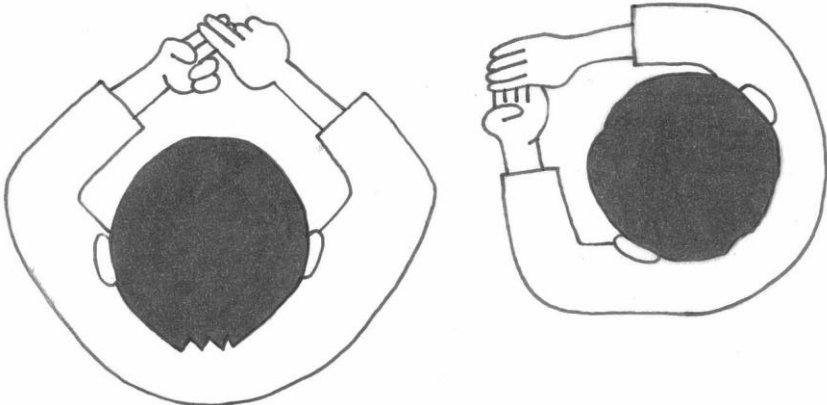
**時間:** 5分以上

**対象:** 5歳以上

## ■ 展開・応用・発展例

- ・ 指の本数を変える拍手でもできます(一本指の拍手→二本指の拍手→四本指の拍手→手の平の拍手→四本指の拍手→二本指の拍手→一本指の拍手→静けさ)。
- ・ 水に関するプログラムの前などに実施すると効果的です。

出典:みんなのPA系ゲーム 243 ほか





## クイックチェック

### ■ 手順

1. 参加者は、指導者の質問に手の角度で答える。
2. 問いにあわせて、数名にインタビューする。

### 【質問の例】

心やからだの状態(例:元気いっぱいだったら腕を上、ままあななら腕を水平に、調子が悪ければ腕を下)、満腹度、これからの活動の期待、今日の活動の楽しさ、今日のテーマの理解度など

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 質問によって、参加者への動機づけ・期待・ふりかえり・評価などさまざまな場面で活用できます。
- ・ 質問に対して、言葉で表現してもらうこともできます(例:今の気持ちを天気に例えると? → 晴天、ちょっと曇り、どしゃぶり前など)

出典: 中学校での「総合的な学習の時間」に役立つ自然体験アクティビティ集 ほか

### ねらい:

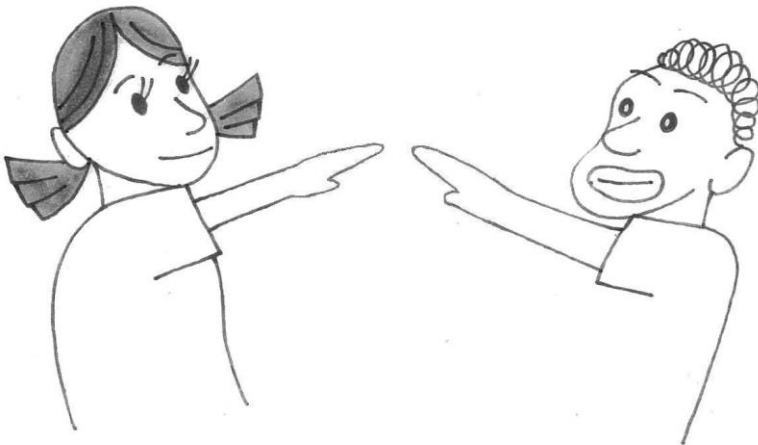
- ・ 打ち解ける
- ・ 参加者の状態を知る

**場所:** どこでも

**人数:** 5人以上

**時間:** 5分以上

**対象:** 7歳以上



## 2. 体験型アクティビティいろいろ

### 1. 参加者自身が「気づく」「考える」「学びあう」工夫を

こんなフレーズを耳にしたことはありませんか。

聞いたことは忘れる

見たことは思い出す

体験したことは理解する

発見したことは身につく

教育に関る人には示唆に富むことばです。指導者は知っていることを教えたい、しかしそれが伝わっているかは、指導者自身が常に謙虚にチェックしていく必要があります。

より参加者の印象に残るように、よりビジュアルに、より体験的に、より参加者自身で考え気づけるように、活動を工夫してみましよう。

### 2. 体験型のアクティビティ

この節では、生活系の環境教育に活用できる体験型アクティビティを紹介しています。途上国では、「知っている人が知らない人に教える」という一方向の教育が中心で、体験型のアクティビティが目指す、双方向的なやりとりの中から学びを得ていくというスタイルは一般的でない場合が多いでしょう。

体験型のアクティビティをぜひ取り入れて、参加者の反応を見てください。慣れていないうちは、うまくアクティビティの説明ができず混乱状態になり、本来の目的がどこかにいってしまったというようなこともしばしばありますが、何度か繰り返していくと、コツがわかってきます。指導者が知らないことを、参加者が教えてくれることも多くあるでしょう。

また、現地で誰もが知っている遊びに少し環境的な要素を入れることで、環境教育アクティビティをつくりあげることができます。みんなが知っている活動だからノリもいいはずです。現地の遊びを仲間に教えてもらいながら、そんなアクティビティをつくっていくのも楽しいでしょう。

### 3. 地域によるアダプテーション

地域によって、取り上げる題材や配慮する事柄が異なってきます。まずは、CPをはじめ活動の協力者にアクティビティを体験してもらい、アドバイスを求めながら、地域にあった内容につくりあげていってください。

## ■ アクティビティ目次

1. ノーズ.....	134	8. 水の浄化.....	144
2. ミステリーアニマル.....	135	9. フィールドビンゴ.....	145
3. ネイチャーループ.....	137	10. ボディマッピング.....	146
4. ゴミが消えるのはいつ?.....	138	11. フォトランゲージ.....	147
5. 川を汚したのは誰?.....	139	12. 日課表.....	148
6. エコビンゴ.....	142	13. 社会マップ.....	149
7. ゴミを通して考える人間の生活と自然	143	14. マイクロティーチング.....	150

## ■ アクティビティのアダプテーション

あなたが活動する地域の自然・宗教・文化などを考慮しながら、各アクティビティのその地域での留意点や展開・応用・発展例を考えてみましょう。



# ノーズ

## ■手順

1. ある生きもの(例:参加者が知っている生き物など)についてのヒントを一つずつ出し、参加者にその生き物が何か考えてもらう。
2. 答えがわかった人は、口には出さず、鼻に人差し指をあてる。
3. その後のヒントで「間違っただ」と思った人は、うまくごまかして(例:鼻をこする、くしゃみをするなど)して指をはずせば、その後続けてもよい。
4. ヒントが終わったら、一斉に大きな声で答えを言ってもらう。
5. その生き物にまつわる話をしたり、参加者が知っていることを共有したりする。

### 【ヒントの例】

- ① 飛びます。→ ② 寿命は 2~3 週間です。→ ③ 林や藪、人家のそばなどでよくみかけます。→ ④ 水のあるところに卵を産み、子どもの頃は水の中で育ちます。→ ⑤ ストローのような口を持ち、花の蜜や草の汁などを吸います。→ ⑥メスは卵を産むために、人間の血も吸います。一回に自分の体重と同じくらい吸います。→ ⑦ 伝染病を広げることがあります。→ ⑧人間を刺すことがあり、刺されたところはかゆくなります。

<答え:蚊(ネツタイシマカ) デング熱などを媒介する>

## ■展開・応用・発展例

- ・ その地域に暮らす生き物を題材にして地域の生き物に関心をもってもらったり、絶滅しそうな生き物を選んで状況を説明したり、衛生面で問題になる生き物を選んで注意を喚起したり、選択する生き物によって、次に続く活動のテーマに入っていくよい導入になります。
- ・ ヒントの中に、参加者に学んでもらいたいトピックやあまり知られていない興味深い特徴・性質をいくつか入れておくとよいでしょう。
- ・ 慣れてきたら、参加者がヒントを出す側になるのもよいでしょう。

出典:シェアリングネイチャー

NATURE GAME  180

### ねらい:

- ・ 生き物への関心を高める

**場所:** どこでも

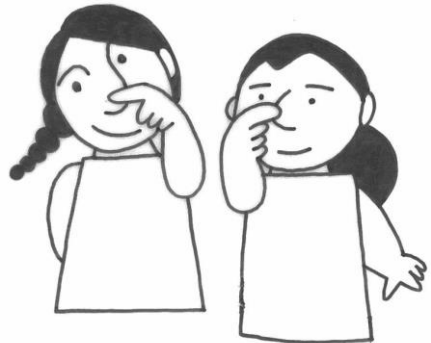
**人数:** 2人以上

**時間:** 5分以上

**対象:** 5歳以上

### 準備するもの:

- ・ ヒント





## ミステリーアニマル

### ■手順

- 『これからある生き物を見に行きます。後で書いてもらうので、しっかり観察してくださいね。』と言って、目を閉じてもらう。
- 指導者が、目の前に情景が浮かぶようにストーリーを話す。生き物の姿の描写は丁寧にする。
- ストーリーが終わったら、白紙カードを配り、観察した(ストーリーで話した)生き物を想像して絵に描く。
- お互いの絵を見せあう。
- 『その生き物の本当の姿を見たいですか?』と聞いて、その生き物の本当の姿を写真・絵などで見せ、その生き物について話しあったり、情報を伝えたりする。
- 実物を見せることができる場合は、準備していたものを見せたり、探しに行ったりする。

### ■展開・応用・発展例

- 指標生物、危険な生き物、病気を引き起こす生き物、ゴミを分解してくれる生き物など、テーマにあわせて生き物を選択し、ストーリーやまとめのやりとりの中に、参加者に学んでもらいたいトピックを入れておくとういでしょう。
- 音響効果など工夫して臨場感を高めるのもよいでしょう。

### ■留意点

- 低年齢の対象者など、目をつぶってイメージするのが難しい対象者の場合は、話をシンプルにして、目をあけたまま、指導者が身振り手振りで表現するとよいでしょう。
- 選択する生き物は、よく知られていないものがおすすです。よく知っている生き物だと、あまり話を聞かずに既にもっているイメージで絵を書いてしまいます。
- 実際の生き物を観察することになった場合は、生き物やその周辺の環境へのインパクトを最小限にしましょう。

### ねらい:

- 生き物への関心や共感を高める
- 生き物の生態を学ぶ

**場所:** 静かな場所

**人数:** 3人以上

**時間:** 15分以上

**対象:** 7歳以上

### 準備するもの:

- ・台本
- ・白紙カード(人数分、B6 サイズ程度)
- ・筆記具(人数分)
- ・生き物の実物、写真、絵など

出典:シェアリングネイチャー



## ミステリーアニマル ストーリー例

私たちは今、川のほとりにいます。水の音が聞こえてきます。あたりから鳥の声も聞こえてきますよ。トンボやチョウも飛び交っています。川をのぞくとイワナやヤマメなどきれいな川の中だけにすんでいる魚の姿がみえます。ヤゴやサワガニも川底で動いています。たくさんの石が転がっています。実は石の下は生き物のとてもよいすみかです。ひとつ取り上げて裏をみてみましょう。

やっぱり、いるいる…。さまざまな形の小さな生き物が動いていますよ。その中の1匹がちよっとおもしろい形をしています。よく見てみましょう。

大きさは1cmぐらいで、せんべいのように平らです。からだは、頭と胸を腹の3つに分かれ、腹が一番長いです。上から見ると、頭は丸く、口の横には2本の短いヒゲがついています。頭の後ろの方には、大きくてまん丸なギョロ目がついています。胸には左右に3本ずつ前向きに足がついていて、水に流されないようふんばっています。

足の先には鋭いツメがついていて、石にしっかりとひっかけています。背中には、小さな羽が2枚ついています。腹の両側にはひらひら

たものがゆらゆらしています。これは水の中で呼吸するためのエラのようなものです。腹の先から2本の細くて長いしっぽがピンと伸びています。

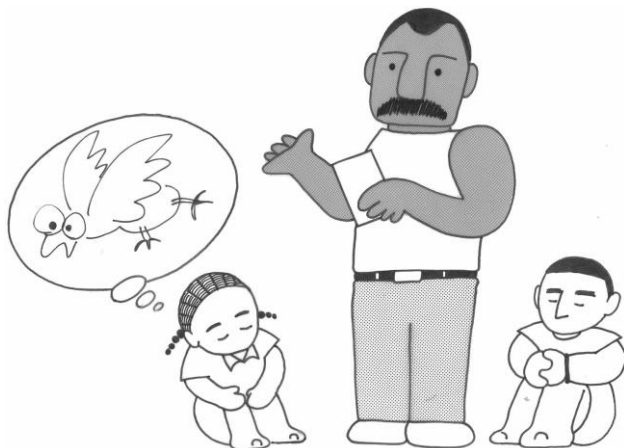
さあ、もう少しで教室に戻らなくてはなりません。最後にもう一度確認しましょう。

からだは頭と胸と腹の3つに分かれていません。頭は丸く、口の横にヒゲが2本、ギョロ目がついています。胸の左右に3本ずつ足があり、鋭いツメで石にしがみついています。背中には、小さな羽が2枚あります。腹の両側にはひらひらしたものがゆれています。腹の先から細くて長いしっぽが2本あります

さあ、これで観察は終わりです。教室に戻りましょう…ゆっくり目を開けてください。

<答え：ヒラタカゲロウの幼虫>

※ヒラタカゲロウの幼虫は河川の指標生物で、この生き物がある場所は水がきれいだと判断できます。川に生息する生き物を調査して、指標生物を学び、川の汚染度を調べるなどの活動に役立てることができます。





## ネイチャーループ

### ■手順

1. ネイチャーループカード(例:ネズミ・ネコ・ヘビ・ワシ・微生物・木・花・土・川・森・街・雨・太陽・人間など)と洗濯バサミを、床にランダムに置く。
2. スタートの合図で、参加者はカードと洗濯バサミを一つずつ拾い、胸につける。
3. 自分とつながりのあるカードをつけている人を探しペアをつくる。(例:食う-食われる、すみか-すんでいるもの、世話するもの-世話されるもの、エネルギーを与えるもの-エネルギーを受け取るものなど)。生態や暮らしにつながるつながりで、頭文字が一緒というようなものは不可。ペアをつくれな人がいたら、3名でもよい。
4. 全員がペア(またはトリオ)になったら、そのつながりを発表する。
5. 次に、空いている方の手でつながれる相手を見つけ、つながっていく。最初につくったペアやトリオを壊すことはできない。
6. 多くの場合一重の輪(ループ)ができるが、できない場合は、どんなカードを加えるとループが完成するかを話し合い、カードを加えて(白紙カードに描く)、最終的には一つの輪になる。
7. 隣のカードとのつながりを順番に発表していく。
8. 相互のつながり、相互の影響、人間の役割など、感じたことを話し合う。

### ■展開・応用・発展例

- ・最終的に輪になったカードを地面や大きな紙の上に置き、他の自然物同士のつながりを線でつないで、生き物や環境のつながりが網の目のようになっていることを、実感してもらうこともできます。

出典:ネイチャーゲーム指導員報自然案内人 2006 年度版

NATURE GAME 178



### ねらい:

- ・生き物や環境のつながりを考える

### 場所:

- ・円をつくれる場所

人数: 8人以上

時間: 20分以上

対象: 7歳以上

### 準備するもの:

- ・ネイチャーループカード(人数分)
- ・白紙カード(ネイチャーループカードと同じ大きさ、5枚程度)
- ・洗濯バサミ(人数分)
- ・太いマジック(1本)





## ゴミが消えるのはいつ？

### ■ 手順

1. ゴミカード(各カードに1種類のゴミが書かれているカード)と白紙カードを配る(参加者の人数により各自に1組でもよいし、2~3名のグループに1組でもよい)
2. 渡されたゴミカードのゴミが、自然にもどる時間を白紙カードの上側に記入してもらう。
3. 記入した時間の順に並んでもらい、発表する。
4. 意見があれば、出し合う。
5. 回答を発表し、参加者はカードの下側に正解を書く。
6. 正解に合わせて並び直す。
7. 気づいたことを話しあう。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・地域のゴミを調査し、その地域のゴミカードをつくとよいでしょう。
- ・まとめて、処理の仕方、資源になるものとならないもの、自分の力で改善出来るものできないもの、危険なもの危険でないもの、地域で処理できるものできないものなど、テーマを出してグループをつくり、話し合いをしてみましょう。

発案: 三好直子



### ねらい:

- ・さまざまなゴミが、自然にもどるまでの時間を知る

### 場所:

- ・円になれる場所

人数: 5人以上

時間: 15分以上

対象: 7歳以上

### 準備するもの:

- ・ゴミカード(人数分またはグループ数分)
- ・白紙カード(A5版程度、人数分またはグループ数分)
- ・太いマジック(数人に1本程度)
- ・ゴミが消える年数の回答 △



## 川を汚したのは誰？

### ■ 手順

1. 事前に、水の入った大きい容器（タライ、バケツ等）及び不透明なフィルムケースなどに物や液体を入れラベルを貼ったもの（下記表参照）を準備する。
2. 各参加者に役割を貼った小さい容器を一つずつ渡す。中は見ず、ラベルに書いてある言葉も言わないように指示する。
3. 「川の物語」を朗読しながら、参加者に物語の中で自分の役割（ラベル書いてあるもの）が出てきたら、水の入った大きい容器の中に中身を入れてもらう。
4. 物語が終わったら、知っていること、感じたことを共有し、どのようにしたら川を汚さずに済むか、きれいにすることができるかなどを話し合う。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 地域の川のものごとを作り作成するとよいでしょう。
- ・ 日本の例（次ページ参照）を実施して、参加者の国や地域の状況はどうか出し合うという展開もおもしろいです。
- ・ 川に限らず、地域の課題にあわせて台本をつくることも可能です。（例：買い物をし、ゴミが出て、それがどのように巡っていくかなど）

出典：Population Connection 「Who Polluted the Potomac?」

#### ねらい：

- ・ 川の汚染について学ぶ
- ・ 自分たちのできることを考える

**場所：**どこでも

**人数：**10人以上

**時間：**30分以上

**対象：**7歳以上

#### 準備するもの：

- ・ きれいな水の入った容器（タライ、バケツなど）
- ・ 役割を貼った不透明で小さい容器（フィルムケースなど）

※参加者に振り当てる各役割と、川へ流れ込むもの、用意するフィルムケースの中身

役割	川へ流れ込むもの	ケースの中身の例
1 木	木の葉	葉っぱ
2 川岸	土	土
3 パーベキューをするグループ	ゴミ	プラスチック、包み紙、ブルタブ
4 釣りをする人	釣り糸	からまった糸
5 農家	農薬	小麦粉
6 下水処理場	窒素やリン	砂糖水
7 コインランドリー	洗剤	洗剤
8 半導体工場	薬剤	においの強い薬剤
9 通勤の車	酸性雨	酢
10 モーターボート	油	植物油
11 不法投棄された車	油	ゴマ油
12 庭仕事をしている家族	除草剤、殺虫剤	紅茶
13 車庫の片付けをしている人	正体不明の液体	ジュース

## 川のものがたり（日本の例）

多摩川は 1300 年ほど前の詩歌にも登場する古い歴史を持った川です。白い布を川にさらす風景が詩歌に何度も出てきます。昔の多摩川はそれくらいきれいでした。

これから皆さんにお話するのは、40 年程前の多摩川です。皆さんには、この話に登場してもらいます。この水（バケツの中）が多摩川です。手元にある容器に書かれているのが皆さんの役割です。容器の中には、役割に関するものが入っているので、自分の役割が話の中に出てきたら、バケツにその中身を空けてください。

多摩川の源流は山梨県の笠取山です。ここに降った雨は地面にしみ込んだり、また地表に湧き出したりしながら流れていきます。流れる途中で同じように湧き出した水を束ねながら沢となり、川となって流れていきます。

そのような源流部で、よく晴れた日が続いたあと雨が降り始めました。雨はだんだんに激しくなり、風も出てきました。強い風が木を揺さぶります。木は、「木の葉」を川に落としました。強い雨の勢いで川岸も削られていきます。「土」が川に流れ込みました。

御岳渓谷や青梅のあたりでは、雨がやみ、日が差し、暖かくなってきたので、川辺にパーベキューをするグループが増え始めました。その人たちが川辺に捨てた「ゴミ」は、次の雨で川に流されてしまいました。

また、川辺で釣りをする人が使っていた「釣り糸」が、川の中の石にからまって、やがて流れていきました。

川の生き物はどうしていますか？

川に沿って農家があります。農家は畑に「農薬」を撒いています。その農薬の一部が雨に洗われ、川に流れ込みました。

この水は飲みたいですか？

中流部になると多くの人が町に住んでいます。その人たちが使った水は、下水処理場で処理されて、多摩川へ放流されています。ただ、処理しきれない「窒素やリン」などは川に入り、栄養分が過多になって、自然のバランスを崩しています。

また、町では近くのコインランドリーで洗濯をする人も多くいます。でも排水の配管が壊れているので、「洗剤」の一部が川に流れ込んでいます。

ここで泳ぎたいですか？

さらに半導体工場がいくつもあります。商品をつくる過程で使われた「薬剤」は、工場内で処理されて多摩川に放流されます。しかし、その排水はかつて発ガン性物質が問題となりましたし、現在では環境ホルモンが問題となっています。環境ホルモンの影響で、メス化したコイも現れているようです。

また工場や会社への通勤の車が行列を作っています。車の排気ガスは「酸性雨」を増やします。地面に降った酸性雨は川へと注がれていきます。

川の生き物はどうしていますか？

下流では水上バイクやモーターボートを楽しむ人が見られます。モーターボートが川を行ったり来たりして、エンジンから落ちた「油」が水の中に混じりました。

また川辺に不法投棄された車からは、「油」が少しずつ染み出し、近くの排水溝へ、そして川へと入っていきました。

下流のある家では、庭仕事をしている家族がいます。夏になる前に、庭に雑草が生えないように「除草剤」を撒き、嫌な虫を寄せ付けないように「殺虫剤」を撒きました。ようやく仕事を終えた時、雨が降り出し、今撒いた薬剤の成分が川へ流れ込みました。

またある家では、車庫の片付けをしている人がいます。そこに「正体不明の液体」の入った古いビンを見つけました。それが何なのか、今となってはわかりませんが、危険なもののように見えました。そして、誰かが言いました。『道路の脇のみぞに流しちゃおう！』…正体不明な

液体は川に流れ込んでしまったのです。これが40年程前の多摩川です。

川の生き物はどうしていますか？

どうい問題が起きますか？

いったい誰が川を汚したと思いますか？

自分の行動の中にも思い当たることが、ありませんか？

この汚れた川はきれいになるのでしょうか？

どうすれば多くの生き物が住める川に、人々を健康にする川になるでしょう？

今日考えたこと、話したことを、もう一度自宅に帰って考えてみてください。そして水を使うときに思い出してください。川を汚しているのは実は私たちだということを。



※下線部は、参加者がふりあてられる役割を、かぎ括弧内は、川に流れ込むものを示しています。



# エコビンゴ

## ■ 手順

1. 白紙に線を縦横に2本ずつひいて9マスのエコビンゴカードをつくる(事前に準備しておいてもよい)。
2. 環境によい行動のアイデア・提案を各自マスに一つずつ書き9コマを埋める。
3. 参加者は、環境によい行動のアイデアや提案を、順番の一つずつ発表する。
4. 発表されたものと同じような内容がエコビンゴカード書かれていたらマル(○)をつける。○かどうかあいまいな場合は発表者が○かどうかを決定する。
5. ビンゴのルールで縦横ななめのいずれかに○がふたつ並んだら『リーチ!』、3つ並んだら『ビンゴ!』と声をあげる。
6. 様子を見ながら適当なところで終了し、ビンゴの数が一番多い人と、一番○の少ない人を表彰する。
7. ビンゴの一番少ない人に、○のつかなかったアイデアを発表してもらう。
8. 他の人の○のつかなかったアイデアや提案も出し合う。
9. 感想やこれから自分達ができることなどを話し合う。

## ■ 展開・応用・発展例

- ・ 自分ですでに実践していることや、これから実践したいことにチェックを入れたり、話あったりしてもよいでしょう。
- ・ テーマを限定して展開するのもよいでしょう。たとえば、テーマを「廃棄物」とした場合は「ゴミビンゴ」になります。ゴミを拾いの活動の後や一週間をふりかえて自分の出したゴミを書いたあとで、「ゴミビンゴ」を実施してもよいでしょう。
- ・ 活動の後、グループで標語やポスターなどを作成したり、「これから取り組みたいこと」を宣言して1週間取り組んでみたりするなど、さまざまな活動につなげることができます。

出展：千葉県庁ホームページ「環境学習ガイドブック」

### ねらい：

- ・暮らしと環境の関係学ぶ
- ・環境に対して自分たちのできることを考える

**場所：**どこでも

**人数：**3人以上

**時間：**30分以上

**対象：**7歳以上

### 準備するもの：

- ・厚紙(B5程度 人数分)
- ・筆記具(人数分)



## ゴミを通して考える人間の生活と自然

### ■ 手順

1. 家庭生活の絵(例:お母さんがものがいろいろある台所で料理し手いる様子など)を見せながら、人間の出すゴミについて出し合う。
2. 動物の生活の絵(例:森の中でサルや鳥が木の実を食べ、フンをしている様子など)を見せながら、動物の出すゴミについて出し合う。
3. それぞれのゴミはどうなるのか、ゴミのサイクルについて話し合う(例:動物のゴミは循環している、人間のゴミは循環しないものが多い、など)。
4. ゴミを減らすにはどうすればよいのか、意見を出し合う。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 人間ができることとして、3R(Reduce、Reuse、Recycle)を考える機会にもできます。
- ・ 3R 以外にも、Repair(修理して長く使う)・Refuse(不要なものを買わない・もらわない)・Return(購入先に戻せるものは戻す)・Recovery(回収する)など、ゴミを減らすためには、様々な視点があります。

### ねらい:

- ・ 自分たちの生活をふりかえる。
- ・ 人間のとるべき行動について考える。

**場所:** どこでも

**人数:** 3人以上

**時間:** 30分以上

**対象:** 7歳以上

### 準備するもの:

- ・ 家庭生活と動物の生活の絵
- ・ ゴミのサイクルの図

出展:ポリビアのための環境教育ガイドブック







# 水の浄化

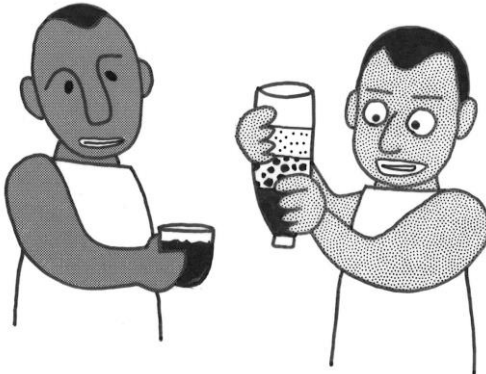
## ■ 手順

1. にごった水を見せながら、「何が含まれているか。」「このまま飲むとどんな影響があるか。」「この水をきれいにするにはどうしたらよいか。」などを話しあう。
2. グループをつくり、ペットボトルと各種の砂・小石・綿（布でも可）・キッチンペーパーを渡す。
3. 参加者は、水が上記のものをどの順番通っていくと一番きれいになるかを考え、逆さにしたペットボトルの中に順番に敷いていく。
4. 比較するために、指導者は上から「キッチンペーパー・綿・小石・木炭や粗い砂・細かい砂（各層は 5cm程度の厚さが適当）」の順に入れたものをつくっておく。
5. 実際にろ過を始める前に、きれいな水を約 1L 程度注ぎ、不純物を取る。
6. 土の混ざった水を、上から少しずつ静かに注ぐ。
7. 水の浄化具合をみる。
8. 比較をして、わかったことを共有し、浄化した水を飲むとどうなるかを話しあう。
9. 水の浄化に関する情報を提供する

### 【水の浄化に関する情報例】

川や湖の水はきれいに見えても、大腸菌などの微生物がいて、そのまま飲むと感染症になる可能性があること、実験で浄化した水は 10 分以上煮沸するなどすれば飲めるようになる、など

出展：ボリビアのための環境教育ガイドブック ほか



### ねらい:

- ・水の衛生について学ぶ
- ・身近な材料によって水を浄化できることを知る

**場所:** どこでも

### 人数:

- ・道具の数による

**時間:** 40 分以上

**対象:** 7 歳以上

### 準備するもの:

- ・ペットボトル（底を切り取り、キャップには穴を開けておく）
- ・大きさの違う砂や小石・木炭、綿など（事前に洗ってきれいしておく）
- ・キッチンペーパー
- ・土のまざった水



## フィールドビンゴ

### ■ 手順

1. 少人数(3~4人程度)のグループに分ける。
2. フィールドビンゴカード(例: 巣・いいにおい・風・虫・木の芽・鳥の声・ゴミ・足跡・冷たいもの・美しいもの・不思議なものなど、各カードの項目は一緒に並べ方は異なるように配列する。)を配り、カードの項目にあるものをグループごとに探す。各グループにつき1枚でもよいし、各自1枚でもよい。
3. 見つけたらグループのメンバー全員で確認し、合意を得たら、全員がその項目にマル(O)をつけられる。
4. タテ、ヨコ、ナナメが並んだら「ビンゴ!」。何本もビンゴをつくる。
5. 集合の合図の後、発見したものについて話しあい、ビンゴの数を発表する。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 活動のテーマにあわせて、項目を選ぶとよいでしょう。たとえば、ゴミをテーマにしたければ、項目の中にいくつかゴミ関係の項目を入れておけば、まとめの時に話しができます。
- ・ 見るものが中心になりがちですが、「きく」「さわる」「かぐ」などの多様な感覚をつかう項目を入れるとよいでしょう。

### ■ 留意点

- ・ 勝敗を強調すると、探すことよりも、早く見つけたところに焦点がいきってしまいます。まとめのときは、ビンゴの数の比較はさらっと行い、見つけたものについての話し合いに焦点をあてるのがよいでしょう。
- ・ 少ししかビンゴができなかった人にも、見つけたことが喜びになるようなまとめをしてください。

出典：小学校の授業に生きるネイチャー  
ゲームスタート編

NATURE GAME  176

### ねらい:

- ・ 様々な感覚をとぎすます
- ・ 観察力を高める

### 場所: 野外

### 人数: 3人以上

### 時間: 15分以上

### 対象: 5歳以上

### 準備するもの:

- ・ フィールドビンゴカード(人数分)
- ・ 筆記具(人数分)
- ・ 集合の合図の道具 △





# ボディマッピング

## ■ 手順

1. 人に寝転んでもらい、輪郭をなぞって、正面と背面の2つの人のからだのかたちをつくる(紙、ロープ、土の上を棒でなぞる、など)。
2. 参加者に目印(石ころ・付箋など)を特定数量(通常手の指の数と同じ10が数えやすい)持ってもらう。
3. テーマを出し(例:自分が最も気になる体の部分、など)、各自該当するところに目印を置く。10コ全部を同じ部位においてもよいし、肩に5コ、膝に3コ、眼に2コというように分けて置いてもよい。
4. 人型以外に、「心」「何もない」「その他」の欄を作っておいてもよい。
5. 目印の置かれた様子を見ながら、気づいたこと、感じたことをわかちあう。

## ■ 展開・応用・発展例

- ・ 共有したいテーマに合わせて、人型を学校の見取り図、地域の見取り図にかえて実施するのもよいでしょう。

発案: 平山 恵



## ねらい:

- ・ 自分自身の問題や課題を表現しやすい場づくり
- ・ 地域の個性や課題などを共有するきっかけづくり

## 場所:

- ・ 平坦で少し動き回れる場所

人数: 3人以上

時間: 5分以上

対象: 7歳以上

## 準備するもの:

- ・ 目印(小さな石など、参加者×10程度)
- ・ 人型を描く道具(人が入るぐらいの大きな紙とマジック、ロープ10m×2本、土に線を引くための棒など)



## フォトランゲージ

### ■ 手順

1. 題材となる写真を参加者に配り、課題を出す(例:どこの国か、どういう状況か、何をしている人か、疑問点をできるだけたくさん書き出す、キャプションをつけるなど)。
2. なぜそう思ったのかを共有する。
3. 気づいたこと、感じたことを出し合い、ものごとの捉え方、固定観念などについて話し合う。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・ 数枚の写真をテーマにあわせて順位づけするランキングの手法も効果的です(例:住んでみたいところ順、生活の豊かさ順、ゴミの危険度順など)
- ・ 写真の一部を隠し、そこに何が写っているのか想像すると、意外性のある写真の場合、さまざまな気づきが生まれます(例:腰から下が隠れた男女の写真—実は男性の方がスカートをはいている、美しい海の写真—実は岸はゴミでいっぱいなど)
- ・ 同じ場所の異なった時代の写真を並べ、時間の経過の中で何が起きたのかを想像することもできます。
- ・ 身近な「もの」を題材にして、それがどこでどのようにつくられ、どこにいのかという「もの的一生」を考えることもできます。
- ・ 写真のかわりに生活用品など具体的な「もの」を使って「ものランゲージ」にすることもできます。実際に手にとりながら、どんな時にどのように使うものなのかを想像したり、その道具の長所や短所について話あったりすることで、その土地の文化への理解を深めることができます。

### ■ 留意点

- ・ 参加者一人一人がじっくり写真を観察することのできる時間を十分とることが大切です。
- ・ 正解がある題材(例:どこの国か)の場合も、その正解を知ることが目的ではなく、正解とは異なった考えをもったときに、その原因になった先入観や情報の偏りに気づいてもらうことがポイントです。
- ・ 参加者が想像力を十分に働かせ、のびのびと自由に考え、発言できる雰囲気づくりを心がけてください。

出典:参加型学習で世界を感じる

### ねらい:

- ・ 共感的な理解や想像力を高める
- ・ ものごとの多様なとらえ方に気づく
- ・ 固定観念に気づく
- ・ メディアに対して批判的な見方ができるようにする

**場所:** どこでも

**人数:** 3人以上

**時間:** 15分以上

**対象:** 10歳以上

**準備するもの:**

- ・ 写真など



# 日課表

## ■ 手順

1. 活動の目的を話し、なるべく同じような環境にある人で少人数のグループをつくる
2. 一般的な1日について、朝起きてから寝るまでの仕事や活動をあげてもらう。
3. 参加者のひとりにそれらの活動を記述してもらう。文字がかけない場合は絵やシンボルでかいてもらう。
4. 参加者にそれらの活動時間をかいてもらう。
5. 完成した日課表について質問をしながら、不明なところを明らかにする
6. 完成した日課表を見ながら、自由時間・仕事量・活動との関連などについて話し合う。出てきたポイントは、かき留めておく。
7. 完成した日課表を紙に記録する。

## ■ 展開・応用・発展例

- ・ 完成した日課表や話し合った内容が、実際にどうなっているかを客観的に確かめると、現地の人々の生活への理解が深まります。

## ■ 留意点

- ・ 日課表は紙にかくよりも地面にかく方が有効です。柔軟性があり、多くの人に参加できるスペースが取れ、参加者の積極的な参加が見込めます。紙にかいた場合は、なかなか修正しづらいという傾向があります。

出典：参加型開発による地域づくりの方法  
—PRA 実践ハンドブック



## ねらい:

- ・ 個人、グループ、コミュニティの日常を明確化する

## 場所:

- ・ ゆつたりと人が集まれ、床を使える場所

人数: 3人以上

時間: 60分以上

対象: 7歳以上

## 準備するもの:

- ・ 地面にかくための道具(木切れ、チョーク、石、砂など)



## 社会マップ

### ■ 手順

1. 活動の目的(ねらい)を話す。
2. 参加者に住んでいる地域の特徴的な地形や目印(例:道路・森・広場・集会所・住居など)を自由に描いてもらう。
3. 外部者(指導者)は、住民による地図作成過程を注意深く観察する。
4. 作成過程または完成後に、住民に説明してもらう。
5. 記録を持ち帰って、見やすいように大判の模造紙などに整理する。
6. 整理された地図を地域に持ち帰り、住民とともに再度チェックする。このチェックの過程で、新たな情報を書き込むこともある。

### ■ 展開・応用・発展例

- ・話し合いのプロセスを注意深く観察し、どんなやりとりがされているか、誰が活発にかかわっているか、その人たちが社会のどの集団に属しているか、誰が仲間はずれになっているかということ意識してみていくと、地域の理解に役立ちます。
- ・モニタリングや評価の手段として活用することもできます。

### ■ 留意点

- ・紙よりも地面、文字よりも絵やシンボルを使うと、非識字者などより多くの人の参加が期待できます。
- ・せかしたり、口出ししたりはせず、参加者を信頼し参加者が主体的にかかわることを見守りましょう。
- ・参加型開発の手法である PRA (Participatory Reflection and Action) の代表的な活動です。下記書籍などで、ベースになる考え方や事例などを確認の上、実践することをお勧めします。

出典: 参加型開発による地域づくりの方法—PRA 実践ハンドブック、入門社会開発

### ねらい:

- ・地域社会の理解を深める
- ・地域社会に関する話し合いの場を提供する

### 場所:

- ・ゆったりと人が集まれ、床を使える場所

### 人数: 3人以上

### 時間: 60分以上

### 対象: 7歳以上

### 準備するもの:

- ・地面にかくための道具(木切れ、チョーク、石、砂など)
- ・できあがった地図を書き写す紙やペン
- ・模造紙



# マイクロティーチング

## ■ 手順

1. 伝えたいテーマ、参加者の気づきを促したい内容を5項目(導入・目的・内容・確認・まとめ)に分ける。
2. それぞれの項目を整理して、全体を5～15分でまとめて話す。

### 【話の例】

- ① Introduction: 『みなさんはトイレで紙を何回巻きますか？これらの紙は溶けると思いますか？ …実は溶けません。』
- ② Objective: 『今日は、皆さんが日々捨てるごみが自然界にどれだけ沢山の期間残ってしまうかを理解し、ゴミを減らすことの大切さ(Reduce)を理解して帰ってもらいたいと考えています。』
- ③ Main Explanation: 『このチャートは皆さんの身の回りが出るゴミがどれくらいで地球の土に還るかを現したものです。例えば生ゴミは3～6週間で、アルミ缶は10～100年…、これだけの時間が土に還るために必要です。』
- ④ Assessment: 『さて冒頭でトイレの紙が溶けないと言いましたが本当でしょうか？ 実際水にトイレットペーパーを入れて混ぜてみましょう(コップの水にトイレットペーパーを入れかき混ぜてみる)。トイレットペーパーは細かくなりますが溶けない事が分かりますね。』
- ⑤ Summary: 『水の中ではトイレットペーパーは溶けないですし、土に対してもほとんどのゴミは還るのに膨大な時間がかかります。皆さんが明日からトイレの紙の巻き数を一回減らすことでゴミの少ない社会に近づくかもしれません。』

## ■ 展開・応用・発展例

- ・ 特に座学に慣れていない人たちへの教育に有効で、アクティビティというより、短い時間に伝えたいことがある場合意識してこの流れを活用すると効果的にメッセージを届けられます。

## ■ 留意点

- ・ 参加者の理解度の確認が抜けがちです。わかりやすく確認できるように工夫してください。

### ねらい:

- ・ 短い時間で大切なことを伝える

### 場所: どこでも

### 人数: 3人以上

### 時間: 5分以上

### 対象: 7歳以上

### 準備するもの:

- ・ 説明の補足に必要なもの(写真・絵・図など、今回の例ではコップ・水・トイレットペーパー・ゴミが土に還る速度を表したチャートなど)△



発案: 平山 恵

## 巻末付録資料

付録資料 1	環境教育の指導原則	152
付録資料 2	ESD の 10 の視点	153



## ■ 付録資料 1 環境教育の指導原則(UNESCO-UNEP 1978)

- (1) 環境を総体として考察すべきである。すなわち自然、および人工環境、技術的および社会的環境(経済的、政治的、技術的、文化—歴史的、道徳的、美的環境)などを総体としてとらえることである。
- (2) 就学前教育に始まり、すべての段階の学校教育、学校外での教育を通じ、生涯にわたって継続的に行われるべきである。
- (3) そのアプローチにおいて学際的であるべきである。それは全体的でバランスのとれた将来展望を導き得るよう、各学問分野から特定の内容を取り出したものである。
- (4) 生徒に地理的に異なる他地域の環境の状態に対する洞察を与えるため、地方・国・地域・国際レベルで主要な環境問題を取り扱うべきである。
- (5) 歴史的展望を考慮しつつ、現在の環境の状態と潜在的なそれに焦点を当てるべきである。
- (6) 環境問題の解決と未然防止における地方、国そして国際レベルの協力の価値と必要性を促進すべきである。
- (7) 開発や発展に関する計画に対し、環境の面からはっきりと考察を加えるべきである。
- (8) 学習者自らが学習経験のプランニングに参画できるようにすべきであり、彼らに意思決定の機会とその結果を受容する機会とを与えるべきである。
- (9) 環境に関する感受性、知識、問題解決技能、価値の明確化を年齢に対応させるべきであるが、低年齢層に対しては、学習者自身の地域社会に対応した環境に関する感受性を特に強調すべきである。
- (10) 学習者を支援して環境問題の現状や原因を見出させるべきである。
- (11) 環境問題の複雑さを強調すべきであり、それゆえ批判的思考と問題解決技能を発達させる必要があることを強調すべきである。
- (12) 実際の活動や直接経験を強調しつつ、環境についての、そして環境からの学習のために、多様な学習環境や整理された教育的アプローチを活用すべきである。

## ■ 付録資料2 ESDの10の視点(佐藤ら 2008)

### (1) 相互関連性の認識

相互関係性・相互依存性、事象間の関連性の認識(つながり)、主体間の関連性の認識(かかわり)

### (2) 活動の文脈化

地域的な文脈化(精神性・文化・歴史・生命地域)(ふかまり)、世界的な文脈化(グローバリゼーション、市場経済)(ひろがり)

### (3) 持続可能性の原則と概念の構築

持続可能性(生態学的持続可能性、社会的公正、文化的・精神的持続可能性)への配慮、進展していく「持続可能性」の概念に対応、協同的・価値創造的学習

### (4) 環境倫理と多様な価値観の尊重

自分自身の価値観、社会の価値観、世界中のさまざまな人々が有する価値観を理解、自分自身の価値観を認識する技能、個人の価値観を持続可能性という文脈のなかで評価する技能、地域に根差し、文化的に適切な価値観の創造

### (5) 多様な学習手法・高度な思考技能の活用と学び

システム思考、未来志向型思考、批判的思考、課題解決能力、参加型・対話型学習と教授による協同的で価値創造型の「知の獲得・連結」、時間軸や相互関連性の認識、理論と実践の反復(アクション・リサーチや参加型評価)

### (6) 多様な教育領域での実践とかかわり

フォーマル教育(FE)、ノンフォーマル教育(NFE)、インフォーマル教育(IFE)

### (7) 協同アプローチと能力開発

効果的コミュニケーションと協同アプローチ、リーダーシップとコーディネーション、個人能力のみならず、組織能力と市民能力の開発

### (8) 社会における学びの仕組みと生涯学習体系の構築

基本的人権としての「学習へのアクセス」、学習理念: ①知ることを学ぶ(learning to know)、②為すことを学ぶ(learning to do)、③共に生きることを学ぶ(learning to live together)、④人間として生きることを学ぶ(learning to be)、変容をすることを学ぶ(learning to transform)、個人と社会が変容するための学習を意識化

### (9) 国際的教育イニシアティブとの連関

「持続可能な開発と教育」と「基礎教育の質の向上とアクセスの改善」、質の高い基礎教育(Quality Basic Education)、ミレニアム開発目標(MDGs)のプロセス、国連識字の10年(UNLD)の運動、万人のための教育(EFA)

### (10) 現実的な社会転換

変容を促す教育(Transformative Education)

## おわりに

今日、環境教育分野で JICA ボランティアとして派遣される半数以上が、廃棄物問題にかかわる活動に取り組んでいます。ボランティアの報告書からは、ゴミだらけの町や劣悪な衛生状態に驚きながらも、日本とは異なる文化・言語・社会環境の中で必死に活動を模索している姿が浮かびあがります。多くのボランティアがさまざまな課題に直面する一方で、現地のニーズに応じるために創意工夫を凝らした活動の成功事例や教材も多く集まっています。

本書は、そのようなボランティアの努力の成果と環境分野の学問的及び技術的な知見を併せて、生活系環境問題の改善に向けてのボランティア活動を支援するために作成されました。環境教育隊員だけでなく、それ以外の職種で開発途上国の環境問題に取り組む隊員にも、本書が広く活用されることを願っています。さまざまな環境課題の解決に向けた隊員のチャレンジを心から応援しています。

本書の制作にあたり度重なる議論に関わっていただいた技術専門委員の方々、コラムの執筆やイラストの提供にご協力いただいた関係者の方々、そしてさまざまな情報やご意見をいただいた帰国隊員の方々に心より感謝申し上げます。

環境教育 ボランティア技術顧問  
三好直子

## 引用・参考文献

### ■ 第1章

環境省(2001).「平成13年度版 環境白書」. <http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/hakusyo.php3?kid=213>(閲覧日:2011年3月4日).

Palmer, J. & Neal, P.(1996). *The Handbook of Environmental Education*. Routledge, Grande-Bretagne.

UNESCO-UNEP (1978). *Intergovernmental Conference on Environmental Education. Tbilisi (USSR). 14-26 October 1977. Final Report*. UNESCO. Paris.

### ■ 第3章

沖守弘(2010).『マザー・テレサ あふれる愛』. 講談社文庫.

久木田純(1998).「エンパワーメントとは何か」久木田純, 渡辺文夫(編)『現代のエスプリ エンパワーメントー人間尊重社会の新しいパラダイム』. 至文堂. No.376, pp.10-34.

國廣哲彌 ほか編(2001).『Progressive English-Japanese Dictionary 3rd Edition』. 小学館. Vol.3, No.6.

佐藤真久(2010).「ESDにおける『知の構築』のあり方ー『持続可能性』・『開発』・『教育』を橋渡しする開発コミュニケーションに焦点をおいて」生方秀紀ほか(編著)『ESD(持続可能な開発のための教育)をつくるー地域でひらく未来への教育』. ミネルヴァ書房. pp.28-42.

吉川まみ(2008)『途上国の農村における持続可能な豊かさのための環境教育理念』(博士論文). 上智大学地球環境研究所.

JICA(2006).『途上国の主体性に基づく総合的課題対処能力の向上を目指して キャンパシティ・ディベロップメント(CD) ~CDとは何か、JICAでCDをどう捉え、JICA事業の改善にどう活かすか~』. JICA 国際協力総合研修所 調査研究グループ.

JICA(2010).『新 JICA 事業評価ガイドライン 第1版』. JICA 評価部.

JICA「JICAの評価制度とは」. <http://www.jica.go.jp/activities/evaluation/about.html> (閲覧日:2011年3月4日)

## ■ 第4章

JICA 青年海外協力隊事務局(2009)『クロスロード2009年5月号』. 社団法人協力隊を育てる会.

## ■ 第5章

開発教育協会(2006).『参加型学習で世界を感じるー開発教育実践ハンドブック』. 開発教育協会.

絹川友梨(2008).『インプロゲームー身体表現の即興ワークショップ』. 晩成書房.

ジョセフ B. コーネル(2012).『シェアリングネイチャー 自然のよろこびをわかちあおう』.  
日本シェアリングネイチャー協会

青年海外協力隊 ポリビア青少年・環境教育分科会(2007).『ポリビアのための環境教育ガイドブック』.

ソメシュ・クマール(2008).

『参加型開発による地域づくりの方法 PRA 実践ハンドブック』. 明石書店.

千葉県庁(2010).『環境学習ガイドブック』.

<http://www.pref.chiba.lg.jp/kansei/kankyougakushuu/guidebook/index.html>

(閲覧日:2011年3月4日).

日本環境教育フォーラム(2002).『中学校での「総合的な学習の時間」に役立つ自然体験アクティビティ集』. 日本環境教育フォーラム.

日本ネイチャーゲーム協会(2005).『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック第6版 アクティビティ編』. ネイチャーゲーム研究所.

日本ネイチャーゲーム協会(2006).『公認ネイチャーゲーム指導員報自然案内人 2006年度版』. ネイチャーゲーム研究所.

日本ネイチャーゲーム協会(2007).『小学校の授業に生きるネイチャーゲーム スタート編』. ネイチャーゲーム研究所.

プロジェクトアドベンチャージャパン(2005).『グループのちからを生かすープロジェクトアドベンチャー入門 成長を支えるグループづくり』. C.S.L 学習評価研究所.

プロジェクトPLA編(2000).『続入門社会開発-PLA:住民主体の学習と行動による開発』. 国際開発ジャーナル社.

諸澄敏之(2009).『みんなのPA系ゲーム 243』. 杏林書院.

山のふるさと村ビジターセンター(2001).『平成12年環境教育活動報告書 山のふるさと村ビジターセンター』. 東京都西部公園緑地事務所管理課 山のふるさと村ビジターセンター.

ロバート チェンバース(2007).『参加型ワークショップ入門』. 明石書店.

Population Connection. 「Who polluted the Potomac?」. <http://www.populationeducation.org/>(閲覧日:2011年3月4日).

## ■ 付録資料

佐藤真久(2008)「トビリシから30年—アーメダバード会議の成果とこれからの環境教育」.『環境情報科学』. 37-2. pp3-14.

## 編集・執筆・協力者紹介

### ■ 編著

- 三好直子 JICA 青年海外協力隊事務局ボランティア技術顧問。専門は体験型環境教育。国内外のネイチャーゲームの普及や JICA の短期専門家として東南アジアや中南米での環境教育に携わる(第 4 章 4・5 節及び第 5 章)。
- 佐藤真久 JICA 青年海外協力隊事務局技術専門委員。東京都市大学環境情報学部准教授。Ph.D。専門は環境教育・国際教育協力。現在は、ESD や環境教育の国際的なプログラムの運営、実施、調査研究に携わる(第 1 章、第 4 章 1 節及び BOX 4)。
- 中川 圓 JICA 青年海外協力隊事務局技術専門委員。2005～2010 年までメキシコで実施されていた JICA の技術協力プロジェクト「ユカタン半島沿岸湿地保全計画」専門家(第 2 章及び第 4 章 2 節)。
- 吉川まみ JICA 青年海外協力隊事務局技術専門委員。環境学博士。専門は環境教育、ESD、持続可能な地域の担い手育成。経営コンサルタント、地方行政機関を経て、現在、東京都市大学特別研究員(第 3 章及び BOX 5)。
- 菊池 佳 青年海外協力隊事務局国内協力員(第 4 章 3 節及び編集担当)

### ■ その他執筆者

- 阿部 治 立教大学教授、日本環境教育学会会長(BOX 1)  
(前 JICA 青年海外協力隊事務局技術専門委員)
- 平山 恵 明治学院大学国際学部准教授(BOX 2)
- 田村雅文 青年海外協力隊 OV(シリア・環境教育・H18 年度派遣)(BOX 3・6)
- 桜井国俊 沖縄大学図書館長(BOX 7)
- 川嶋 直 財団法人キープ協会環境教育事業部シニアアドバイザー(BOX 8)  
(前 JICA 青年海外協力隊事務局技術専門委員)
- 森 美佐子 青年海外協力隊 OV(インドネシア・環境教育・H20 年度派遣)(BOX 9)

## ■ 編集協力

北脇秀敏（東洋大学教授）

青年海外協力隊 OV:

小野栄子、柿本礼子、片山仁志、楠田知子、熊谷とも絵、小鷹 紫、永井久美子、丹羽健治、日向 淳、平川詩子、増田勇希、宮崎紀子、森下福史、山本一美、吉岡幹人、H21 年度ベトナム短期派遣環境教育チーム、青年海外協力隊ポリビア青少年・環境教育分科会メンバー

## ■ イラスト

山口哲也（5 章イラスト）

財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）（1～4 章イラスト）

識字クリップアートは、質の高い教材制作をサポートするためにユネスコ・アジア文化センター（ACCU）とユネスコが制作しました。コミュニティ開発においてよく取り上げられるテーマを 8 つ（健康・衛生・栄養、収入向上、環境と科学、女性のエンパワーメント、教育、市民コンセンサス、文化と価値、そのほか）に分け、学習テーマに応じて使用ができるよう配慮がなされています。詳細は、<http://www.accu.or.jp/jp/index.html> を参照。



環境教育ボランティア 活動ハンドブック  
ー生活系環境問題の改善に向けてー

2020年3月13日発行

編集・発行：独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局  
〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-4-1 竹橋合同ビル

TEL:03-5226-9814 FAX:03-6672-1723 URL:<http://www.jica.go.jp/>

印刷・製本：有限会社日本文化教育センター

本書掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

